

第3章 報告 I

1. 今帰仁タイプとビロースクタイプ
2. 今帰仁タイプとビロースクタイプに関する磁器生産地とその製品
 - 2.1. 福建閩江流域宋元時期窑址概況
 - 2.2. 今帰仁タイプに関する窯跡とその製品
 - 2.3. ビロースクタイプに関する窯跡とその製品
3. 今帰仁タイプとビロースクタイプの消費地と消費状況
 - 3.1. 琉球列島における出土状況
 - 3.2. 博多遺跡群における出土状況
 - 3.3. 長崎県鷹島海底遺跡における出土状況
 - 3.4. 相关的中国沉船遗址及其遗物
4. 今帰仁タイプ・ビロースクタイプ関連磁器の胎土分析
5. 今帰仁タイプとビロースクタイプの編年・貿易港・生産と流通
 - 5.1. 年代的 position 付けと貿易港
 - 5.2. 生産と流通

今帰仁タイプとビロースクタイプを生産地（中国福建）と消費地（琉球・九州）において追跡し、胎土分析を併せて、これらの磁器を焼いた窯を特定する。

今帰仁タイプとビロースクタイプ

—設定の経緯・定義・分類—

金武正紀

今帰仁村教育委員会

KIN Seiki

Board of Education NAKIJIN Village

1. 今帰仁タイプ白磁碗（浦口窯系）

1.1. 今帰仁タイプ白磁碗の命名の経緯

1982年から1985年にわたって実施された今帰仁城跡主郭（俗称本丸）の発掘調査で、注目される陶磁器の一つが今帰仁タイプ白磁碗であった。それは、出土状況が層序で明確に把握されたことであった。実は、1981・1982年に発掘調査を実施した石垣島のビロースク遺跡⁽¹⁾で、ビロースクタイプ白磁碗⁽²⁾と共伴して出土していたので注目はしていたが、その時は「薄手直口口縁碗」として分類しておいた⁽¹⁾。その碗の特徴について、「薄手の直口口縁で、口唇部内部に稜を設け、口唇を平坦にする特徴を示している。（中略）、この底部は、高台が外側へ広がり、内底に幅広の蛇ノ目掻き取りが回る特徴のある底部である。（中略）、Ⅱ層からも検出されており、古いタイプと考えられる。」と述べた⁽¹⁾。

今帰仁城跡主郭の発掘調査後の資料整理で分類したり、層序確認や共伴遺物などを検討してる中で、この白磁碗は全国的に見てもほとんど出土報告がなく、沖縄だけで多く出土する状況を把握した段階で、今帰仁城跡を特徴づける陶磁器であるということで、「今帰仁タイプ白磁碗」として報告した⁽³⁾。

1.2. 今帰仁タイプ白磁碗の特徴（図1）

この白磁碗の特徴をビロースク遺跡出土品で前述したが、与那国島の慶田崎遺跡⁽⁴⁾でもビロースク遺跡出土品と類似のものが多く出土しており、また、宮古の住屋遺跡⁽⁵⁾、高腰城跡⁽⁶⁾などでも多く出土していることから先島諸島には今帰仁タイプが多く入ったと考えられる。しかし、今帰仁城跡主郭出土品を検討してみると、口縁部でビロースク遺跡出土品（図1の3、以下同様）や慶田崎遺跡出土品（4）のように口唇内端に稜を示し、口唇部を平らにするものもある（1・2・11・12）が、口唇部を丸く仕上げたものもある（15～17）。さらに施釉方法で、内面全体に施釉したあと、内底釉を蛇ノ目掻き取りしたビロースク遺跡（3・5・6）や慶田崎遺跡（7・8）出土品のようなもの（1・2）もあるが、内底を露胎にしたもの（11・12・15・16）や内底まで施釉したもの（17）もある。

高台の特徴は「ハ」の字状に外側に開き、畳付内端だけが畳に付く。畳付外端は稜を示し、外端部を意識的に面取りしたのではない。また、外底の高台際を篋で削って三角状に凹めて仕上げる特徴もある。なお、外底のへそを削り取っているのがほとんどである。

1.3. 今帰仁タイプ白磁碗の分類（図1）

2007年3月、筆者は今帰仁タイプ白磁碗をⅠ～Ⅳ類に細分した⁽⁷⁾。しかし、2007年9月に福建省博物院で栗建安氏採集の白磁碗の中に第Ⅳ類を発見した⁽⁸⁾。それは莆田市庄辺窯で生産されたものであった。

Ⅰ～Ⅲ類が連江県浦口窯産であることから、Ⅳ類を今帰仁タイプから削除してⅠ～Ⅲ類とすることを日中共同研究のメンバーで確認した。なお、Ⅳ類は白磁大型外反碗（庄辺窯系）と仮称して報告する。

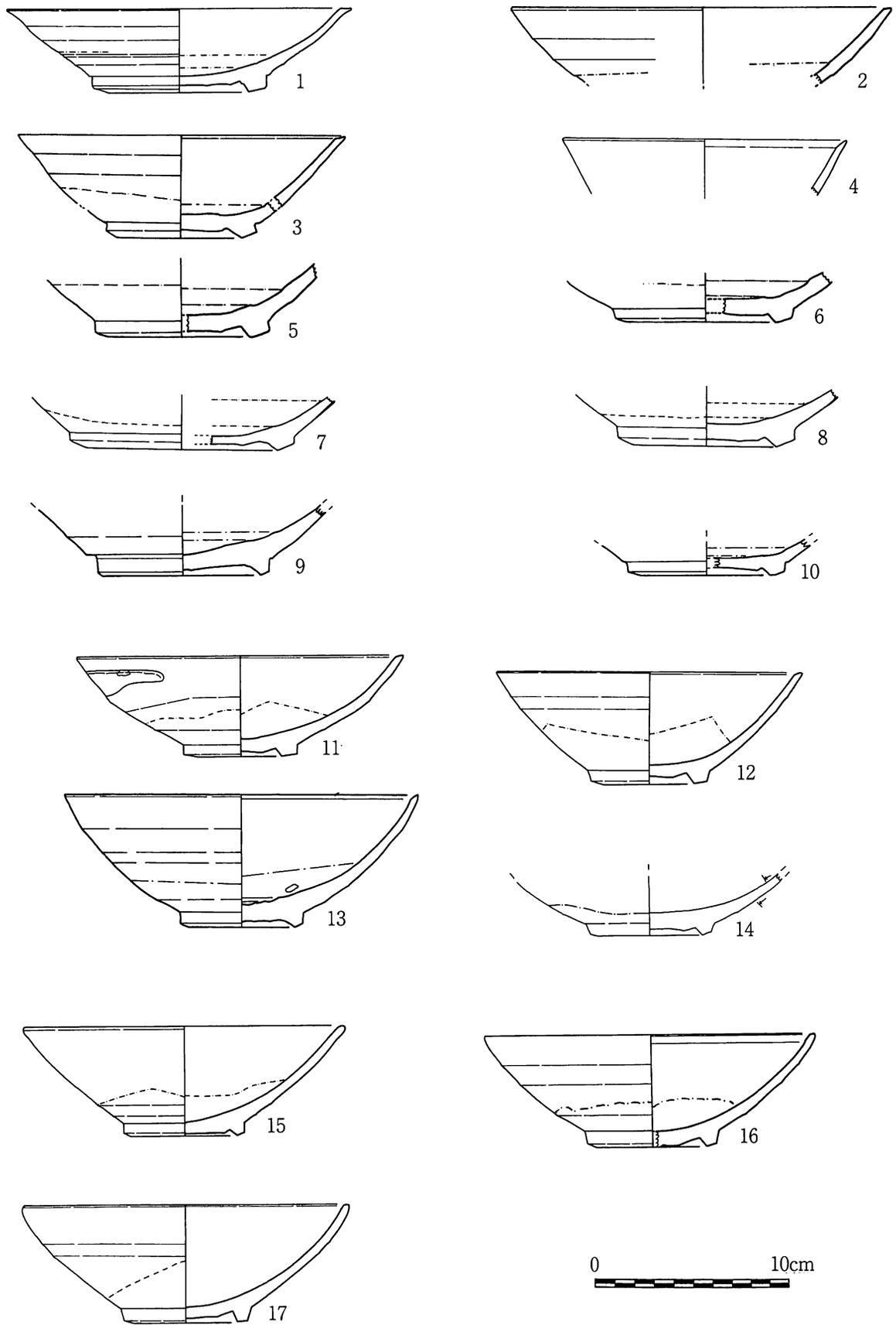


図1 今帰仁タイプ白磁碗

- I類(1~10)：今帰仁城跡(1・2)、ピロースク遺跡(3・5・6)、慶田崎遺跡(4・7・8)、住屋遺跡(9・10)
 II類(11~14)：今帰仁城跡(11・12)、住屋遺跡(13)、尻川遺跡(14)
 III類(15~17)：今帰仁城跡(15・17)

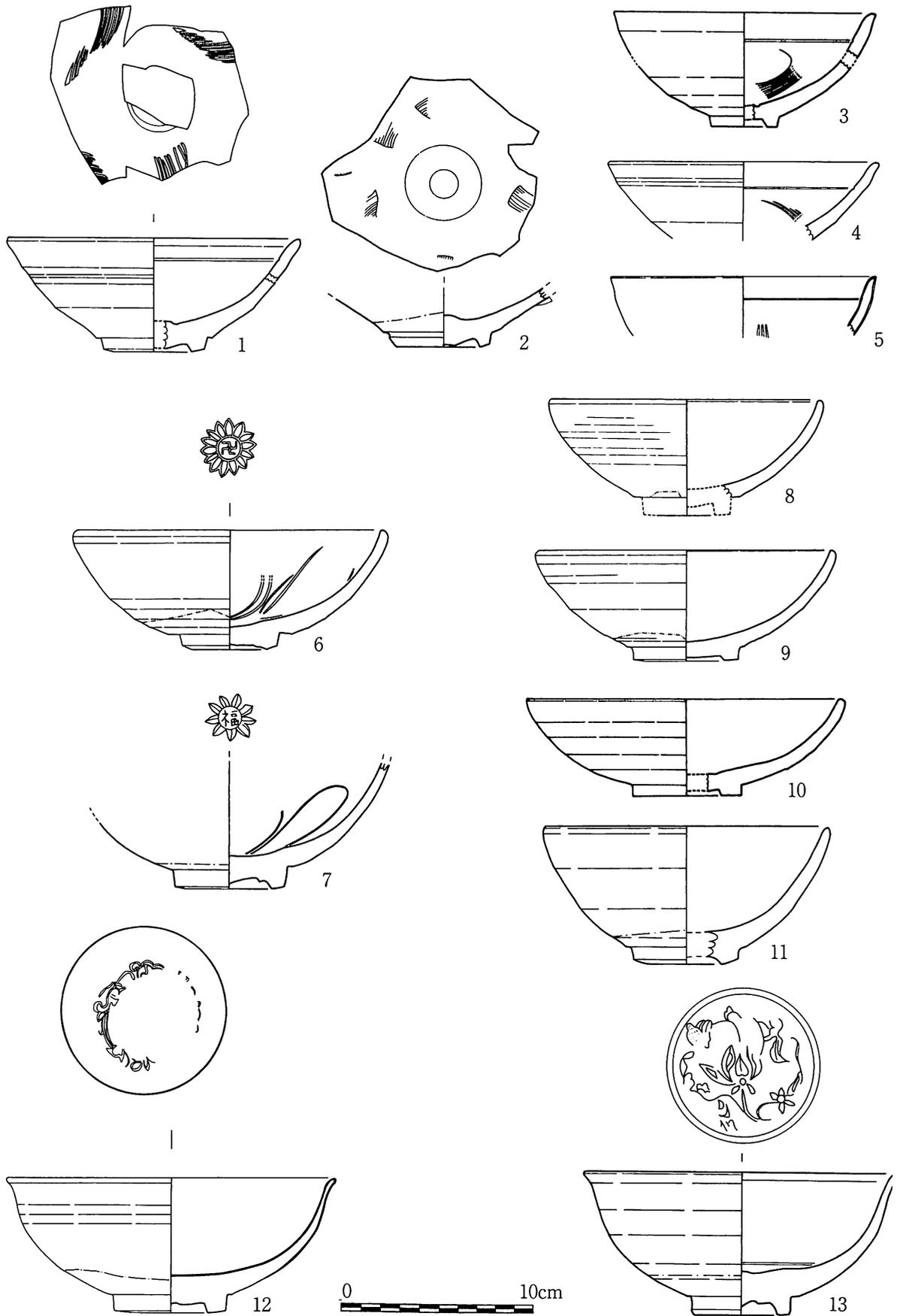


図2 ピロースクタイプ白磁碗

I類(1~5)：今帰仁城跡(1・4)、住屋遺跡(2)、ピロースク遺跡(3)、慶田崎遺跡(5)

II類(6~11)：今帰仁城跡(6・8・9)、住屋遺跡(7・11)、ピロースク遺跡(10)

III類(12~13)：今帰仁城跡(12)、住屋遺跡(13)

I類 (1~10)

口唇内端が稜を示し、口唇部を平らにする。内底釉を蛇ノ目掻き取りする。高台は「ハ」の字状に開き、畳付外端の面取りがない。外底の高台際を篋で削って三角状に凹める。

II類 (11~14)

口縁部や高台の特徴などはI類と同じであるが、内面下位から内底まで露胎にする。

III類 (15~17)

口唇部を丸く仕上げたものである。施釉方法は内底露胎(15・16)と、内底まで施釉したもの(17)があるが、単に重ね焼きのときの上と下の違いかと考えられるので同じ類とした。高台はI・II類と同類である。

2. ビロースクタイプ白磁碗(義窯・青窯系)

2.1. ビロースクタイプ白磁碗の命名の経緯

ビロースクタイプ白磁碗とは、石垣島ビロースク遺跡から検出された中国陶磁器のうち、特に注目された内彎型白磁碗に付けられた型式名である。1981年6月~8月にかけて発掘調査が実施された石垣島の桃里恩田遺跡とビロースク遺跡で、中国陶磁器が多く検出された。その中で、あまり報告例のない内彎型白磁碗が目立った。筆者は1981年9月の第2回貿易陶磁研究集会において、今帰仁城跡とビロースク遺跡出土の中国陶磁器について発表し、その中で「ビロースクタイプ」についてふれた。1982年3月、『桃里恩田遺跡』の報告書で「ビロースクタイプ」と仮称した⁽⁹⁾。1982年8月には森田勉が「…ビロースク遺跡出土例のように外反しないのも少数発見されている」とビロースクタイプ碗にふれている⁽¹⁰⁾。

その後、多くの報告書や論文などにも「ビロースクタイプ」が使われるようになり、中国白磁碗の一つの型式として定着しつつある。

しかし、ビロースクタイプの特徴や年代の位置付けなどあまり明確にされないまま現在に至っている。そこで今回は、沖縄各地の遺跡で検出されているビロースクタイプ白磁碗の特徴や、層序、共伴遺物などから年代の位置付けなどを考えてみたい。

2.2. ビロースクタイプ白磁碗の特徴と分類

基本的には厚手の内彎型碗である。素地は白色及び黄白色の微粒子である。畳付は幅が広く、水平に切られている。器表面にはロクロ痕が稜線状に廻っているのが多い。釉は薄く、内底から外面の腰部か高台脇まで施釉されている。このビロースクタイプを口縁部の形態と圏線、文様などの有無によって2つに分けた⁽¹¹⁾。しかし、2007年9月の日中共同研究において、ビロースクタイプI・IIとこれまで「白磁外反碗」と呼んでいたタイプが閩清県青窯窯隔の同じ窯で生産されていることが確認された⁽⁸⁾。この事実を踏まえて、白磁外反碗をビロースクIIIと設定することが日中共同研究のメンバーで確認された。森本朝子、田中克子がビロースクタイプIVと分類していた外反碗である⁽¹¹⁾。

2.2.1. ビロースクタイプI類(第2図1~5)

基本的には内彎型であるが、口唇内端を丸くし、口唇直下の外面を指でおさえてロクロを回し、口唇外端を尖らしている。内面上部には陰圏線を1本廻らし、下部には櫛描き文のあるのも見られる。このタイプIは現在のところ出土例は少ない。ビロースク遺跡と慶田崎遺跡(与那国島)の報告⁽⁴⁾と、今帰仁城跡の第5・7層出土が知られている⁽³⁾。また、宮古では住屋遺跡で出土している⁽⁵⁾。

ビロースク遺跡・今帰仁城跡・慶田崎遺跡のを見ると、口径は12~18cmと幅があるが、器高はビロースク遺跡のが6.0、6.4cm、今帰仁城跡のが6.0、6.1cm、慶田崎遺跡のが約6.5cmとなっており、

後述のタイプⅡよりやや深い碗と考えられる。(表1・表2)

2.2.2. ビロースクタイプⅡ類 (図2の6～11)

一般にビロースクタイプと呼んでいるのはこのタイプⅡのことである。内彎する碗で、口唇は丸みを持ち、口唇内端は内向し、稜を示すが多い。タイプⅡは沖縄各地の遺跡から検出される。表1は、報告書が刊行され、その中で口径復元図が示されているものをまとめたものであり、実際に出土している遺跡はその数倍に達している。口径は12～20cmまで大小ある。14～17.9cmの口径が全体の約72%を占め、標準的口径と考えられる。器高復元できたのはビロースク遺跡の5.0cm、今帰仁城跡の5.8、6.0、6.1、6.2cm、新里村西遺跡の5.9cmなどであるが、全体的にはタイプⅠより浅い碗が多いと考えられる。(表1・表2)

2.2.3. ビロースクタイプⅢ類 (図2の12・13)

素地、高台造り、施釉法などⅠ・Ⅱ類と類似しているが、大きな特徴は口縁部が外反することと、内底が平坦で、そこに印花文を施したのがほとんどである。ビロースクタイプⅠ、Ⅱ類が終る14世紀中頃から琉球に大量に入ってくる。(表2)

注

1. 金武正紀・阿利直治他『ビロースク遺跡』石垣市教育委員会 1983
2. 金武正紀「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会 1988
3. 金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会 1991
4. 金武正紀・大田宏好他『慶田崎遺跡』与那国町教育委員会 1986
5. 大橋康二他『住屋遺跡(1)』平良市教育委員会 1999
6. 盛本勲・手塚直樹他『高腰城跡』城辺町教育委員会 1989
7. 金武正紀「今帰仁タイプ白磁碗」『南島考古』第26号 沖縄考古学会 2007・3
8. 金武正紀「中国資料調査報告2」『13～14世紀上海貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究 -中国福建省を中心に-』(日中共同研究代表木下尚子)熊本大学文学部 (内部資料) 2008・5
9. 金武正紀他『桃里恩田遺跡』石垣市教育委員会 1982
10. 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982
11. 森本朝子・田中克子「沖縄出土の貿易陶磁の問題点 -中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁-」『グスク文化を考える』沖縄県今帰仁村教育委員会 2004

掲載した住屋遺跡の今帰仁タイプとビロースクタイプ白磁碗の実測は新里亮人(徳之島伊仙町教育委員会)、トレースは松本綾子(今帰仁村教育委員会資料整理員)が行なった。記して謝意を表す。

表1 沖縄出土のビロースクタイプⅡ類の口径状況

(単位: cm)

遺跡名	口径 (cm)	12~	13~	14~	15~	16~	17~	18~	19~	20~	合計
		12.9	13.9	14.9	15.9	16.9	17.9	18.9	19.9	20.9	
ビロースク遺跡(石垣市)					1	2		2	2	1	8
桃里恩田遺跡(〃)					2		2	1			5
カンドウ原遺跡(〃)			1	1	1	4					7
アラスク遺跡(〃)			1								1
新里村(東)(竹富町)						2					2
新里村(西)(竹富町)					3	3	1				7
慶田崎遺跡(与那国町)	2	1	1	1							5
与那原遺跡(与那国町)			1	2	1						4
住屋遺跡(宮古島市)				1				1			2
高腰城跡(宮古島市)			1	4							5
佐敷グスク(南城市)				2	1						3
稲福遺跡(〃)				2	1	1					4
浦添城跡(浦添市)				1	1						2
拝山遺跡(〃)		1	1	1	1	1					5
親富祖遺跡(〃)				1							1
北谷グスク(北谷町)							1				1
今帰仁城跡(今帰仁村)			3	4	2	1					10
伊原遺跡(糸満市)				1							1
伊是名ウフジカ遺跡(伊是名)				1							1
合計		2	4	8	28	18	7	4	2	1	74

表2 ビロースクタイプ白磁碗と共伴の白磁碗・皿の出土状況

遺跡名	層	玉縁口縁 碗	口禿口縁 碗・皿	今帰仁 タイプ碗	ビロースクタイプ碗			推定年代 (世紀)
					I	II	III	
新里村遺跡(東)	2・3	○	○	○	○	○		12末~13
伊良波東遺跡	2・3	○	○			○		〃
親富祖遺跡	2・3	○				○		12後半~14
ビロースク遺跡	2	○	○	○	○	○	○	12末~14
今帰仁城跡主郭(俗称本丸)	7		○	○	○	○		13末~14前半
今帰仁城跡主郭(俗称本丸)	6・5		○		○	○	○	14中頃
拝山遺跡	1・2	○	○			○	○	12末~14
稲福遺跡	1~3	○	○			○	○	12末~14
新里村遺跡(西)	1・2	○	○	○	○	○	○	14~15前半
佐敷グスク	1~3	○	○			○	○	14~15前半
慶田崎遺跡	1・2			○	○	○	○	13末~15前半
与那原遺跡	13			○	○	○	○	13末~15前半
住屋遺跡	2・3	○	○	○	○	○	○	12~15前半
住屋遺跡第1号竪穴	3			○		○	○	14
高腰城跡(宮古島市)	1~3	○		○	○	○	○	12後末~14
桃里恩田遺跡	1・2			○		○	○	14

今帰仁タイプに関わる窯跡とその製品

—福建省連江県浦口窯跡の踏査と関連資料の調査—

宮城弘樹
今帰仁村教育委員会

MIYAGI Hiroki
Board of Education NAKIJIN Village

はじめに

今帰仁城跡において出土する資料を標式として設定された「今帰仁タイプ白磁（金武2007）」は広く琉球列島において特徴的に出土する陶磁器資料の一つである。この製品の生産地特定のため、2005～2008年福建省博物院等関連機関所蔵資料の調査及び、窯跡の踏査を行った。以下、今帰仁タイプの生産窯跡と目される浦口窯採集資料の紹介を行う。なお、沖縄で白磁と分類される今帰仁タイプであるが、浦口窯出土の製品は中国側の研究では一般に青磁とされている。実際、窯跡における調査では龍泉窯、同安窯系の製品の影響下に製作された製品が採集された。さらに、製品の釉調等も白磁とも青磁とも判断が難しい特徴を有する資料が多い。このため、窯跡の製品を紹介するにあたって、便宜上「浦口窯製品」としてまとめ、個別に紹介していきたい。

1. 浦口窯

浦口窯は、中国福建省連江県浦口鎮に所在する宋元代の古窯跡である。連江県は福州から北東に約30kmの位置にあって定海湾に面する沿岸部に立地している。窯跡は連江県の郊外に位置し、近年の道路建設工事などによって、窯道具や陶磁器片が散在している状況であった。今回踏査を実施した地

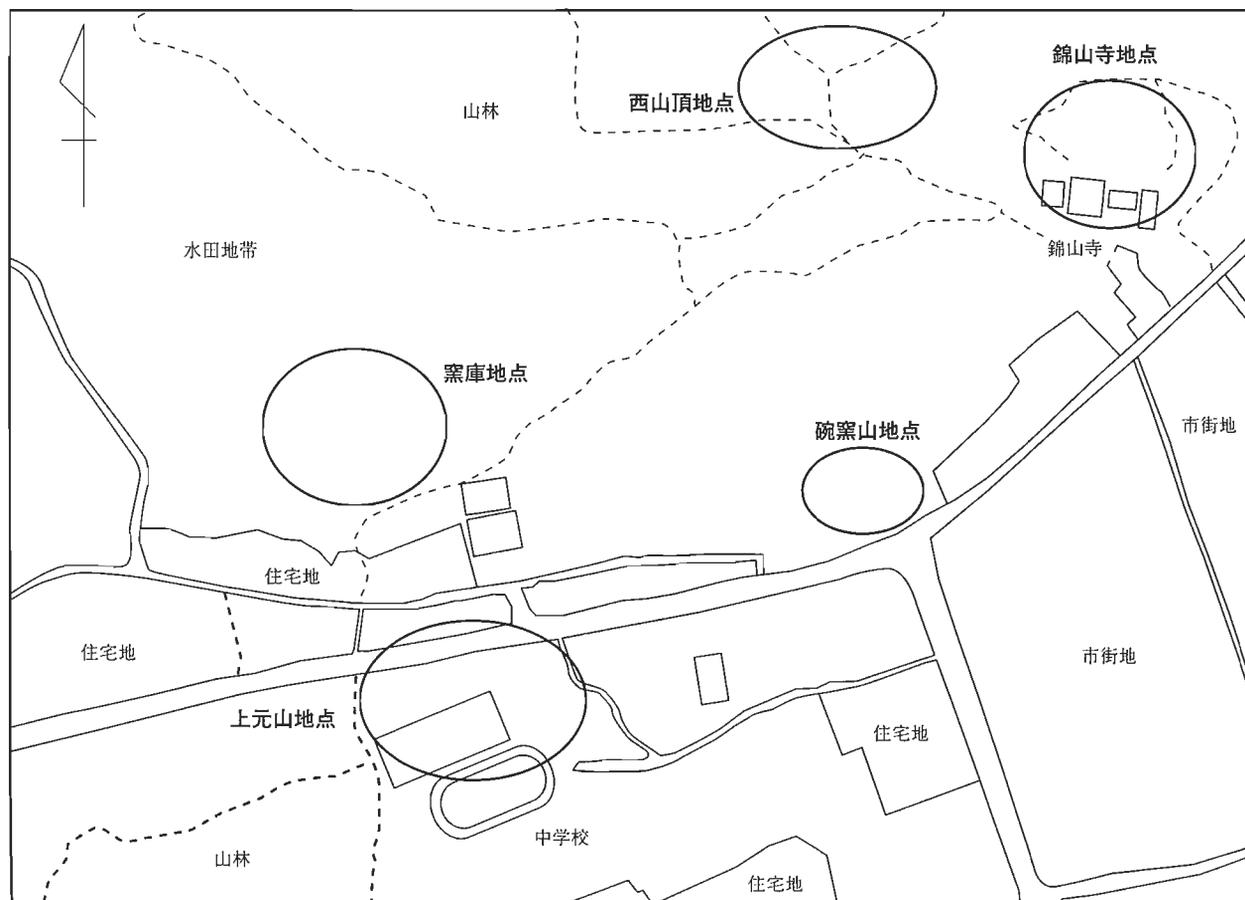


図1 浦口窯調査地点位置図

点は上元山、碗窯山、錦山寺、西山頂、窯庫の主に5地点である(図1)。また、これまでの調査で採集された資料が、福建省博物院、連江県博物館に所蔵されていたので、これら収蔵資料についても併せて調査させていただくことができた。浦口窯の全体像は不明である。その遺跡範囲は広大で今回の踏査だけではとても具体的には示すことができない。しかし、おびただしい数の遺物散布状況などから考えると、今回採集した地点一帯に窯跡が埋没し、生産途中に不良品等の廃棄によって形成された灰原等があることは容易に想像できる。今回の調査は、福建省博物院の栗建安氏、連江県博物館の駱明勇館長の案内で踏査を行った。

浦口窯が今帰仁タイプの生産跡である可能性について言及したのは、今回の共同研究者の一人田中克子である(森本・田中2004)。本稿以前に田中によって福建省の窯跡と日本出土の陶磁器の比較検討が行われており(田中1996・2002・2003)、今回の整理は田中に及ぶものではないが、今帰仁タイプとの関連ということで、筆者が報告の責を負うこととなった。

さて、本節の報告は今帰仁タイプに焦点を絞るため、これに類似する資料、もしくはこれを考える上で必要な資料に限定している。遺跡では、今回紹介したものの以外にも様々なタイプの製品、例えば皿や壺などといった多様な器種、時代的にもかなりの幅のある製品が含まれていると考えられる。また、文様や器形から龍泉窯や同安窯の影響を受け生産されたと考えられる製品も多数確認することができた。つまり、様々な種類の製品が生産されている中で、あくまでも今帰仁タイプの生産地同定という目的達成のため、限定した資料をピックアップして紹介していることを付言しておく。以下調査で確認できた資料を個別に紹介する。

1.1. 上元山地点(1~25)

上元山地点は、中学校の付近の丘陵地にある。道路に面した法面や、中学校までに至る里道沿いの畑などを踏査した。今回の踏査で表採された資料が1~2・4~14である。また「上元山」と注記される連江県博物館に保管されていた3の資料。15~22の田中克子氏によって1997年に上元山地点付近で採集された資料の一部について紹介する。田中採集資料は、連江県博物館に保管されていると考えられたが、残念ながら今回の調査では実物を確認することはできなかった。既報告資料であり比較的今帰仁タイプと近似する特徴を持つ資料が含まれることから、併せて紹介する。

上元山地点の資料の特徴は、無文のものが多く。しかし現場では蓮弁文を描いた碗、あるいは貼付文の花瓶なども確認することができた。全体的に焼成が良く白~淡灰白色の磁質の素地で、釉は淡灰白色またはやや青味のある色で、概して釉は良く溶けて光沢がある。底部の造りに特徴があり見込を露胎し高台畳付に独特な削りを認めることができる。これは本地点を含む浦口窯に特徴的な技法と考えられる。具体的には、高台内の削り出しが、①外底の中心を斜め方向に削り高台の内側に沿って削り出すため、一条の溝がつくられること。②高台内の中心部が平坦に仕上げる作業が行われ、平坦となることの2点をあげることができる。窯跡資料を観察したところ、①の行程を行ってから②の作業によって平坦面をつくっているものと考えられたが、逆に②→①の可能性のあるものも認められた。このことから、作業の順序は限定することはできないものの、高台内壁の一条の溝と、高台内の平坦面の作成という高台削り出しを2段階の工程によって製作されている点に特徴があることが言える。底部に関してはもう一つ特徴がある。それは、畳付が斜位に削られるという点である。この畳付斜めの特徴は、重ね焼きに際してその接点となる重ねる側の製品との関係によるものと考えられる。即ち、重ねる側の見込側の器体のカーブに安定して接するように、畳付を斜位に削ったものと考えられる。

本地点で得られた今帰仁タイプ類似の製品は、器形的に大きく2種確認される。一つは小振りで直口し器高の浅いタイプの碗(1~3・15~17)。もう一つは、やや大振りで器高の高いタイプの碗

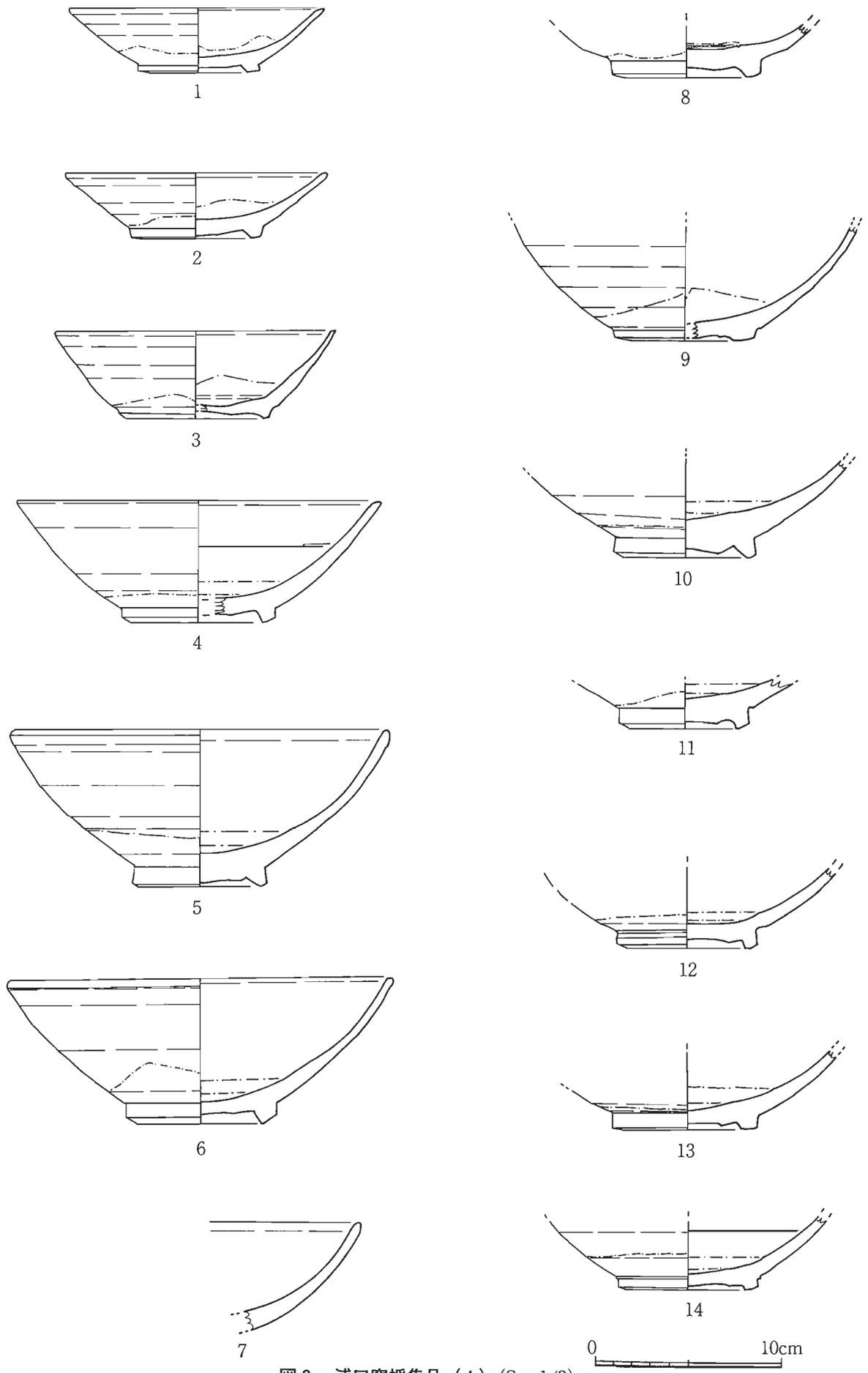


图2 浦口窯採集品 (1) (S = 1/3)
上元山地点 (1~14)



写真1 浦口窯跡上元山地点採集品(1)

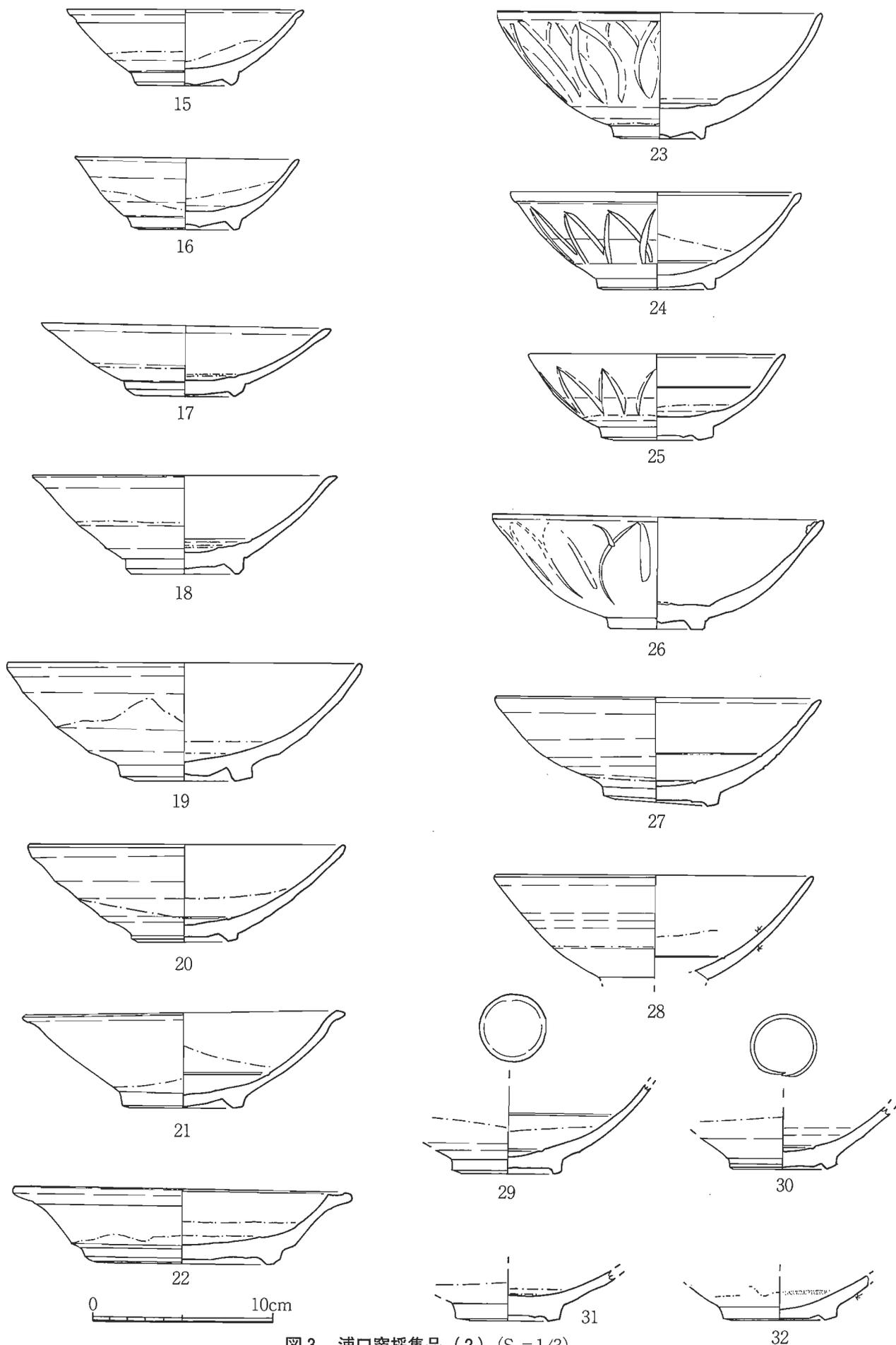


图3 浦口窰採集品(2) (S=1/3)
 上元山地点(1~25)、西山頂地点(26~32)



写真2 浦口窯跡採集資料（上元山地点・西山頂地点）

(4～6・18～19)である。前者の浅い器形の資料を仮に小碗とする。また、この他今帰仁タイプには見られない特徴をもつ、折縁の皿(22)、蓮弁を施す資料(23～25)などもあり、繰り返すが実際の現場では様々な特徴の資料が認められている。共通点を俯瞰して述べると今帰仁タイプ類似の浦口窯製品は、体部に文様の描かれない無文の碗・小碗で、見込を露胎とし、器形は底部から逆ハの字形に直線的に開くタイプを中心に口縁部のやや内傾する。

1～3は小碗で、高台の造り、器形、施釉方法、胎土、釉調等に今帰仁タイプに近い特徴を有する。反面若干の相違点も認められる。1・2は今帰仁タイプに比して器壁が厚くやや小振りな印象を残す。前者は口縁内面端部を平坦にしており今帰仁タイプにも共通する特徴をもつものがある。後者は口縁部が舌状となる点がやや異なる。3は高台脇削りが浅く器形的特徴が異なっている。これらの資料はいずれも見込は釉を掛け流し露胎としている。

一方、碗(4～14)は、今帰仁タイプの特徴である高台の造り、施釉方法、胎土、釉調等は近似する。しかし、いずれの資料も今帰仁タイプの特徴として指摘される薄手になるものではなく、やや厚手の資料となっている。また底部から口縁部までの立ち上がりも全体的に丸みをもっており、図示した資料のサイズは、平均で口径20cm前後×器高7cm前後×底径8cm前後となり、今帰仁城跡出土の今帰仁タイプ碗が口径19cm以内×器高6cm以内×底径6cm前後のサイズになることを考えると、今回の採集品はこれまで認識されている今帰仁タイプに比べると、サイズが大きいという印象を持つ。更に5に至っては、器高の高さに加えて高台のつくりが厚く、全体的に重厚な印象をもつ。このような特徴は琉球列島出土の今帰仁タイプにはあまり類例の無い特徴である。以上に紹介したように、細緻な点では相違点も認めることができる。7はこれらの口縁部資料で口縁端を舌状に仕上げしており、今帰仁タイプにも認められる特徴である。

底部資料を見ると、釉剥の方法に2通りの方法がある。一つは、10～14の見込を輪状に掻き取る方法(以下、「内底輪状釉剥ぎ」とする場合はこの方法を指す)。もう一つは、9に見られる釉を流し掛けし見込を露胎とさせる方法(以下、「内面露胎」という場合はこの方法を指す)である。これは重ね焼きの際の露胎部をつくり出す方法の相違からなるもので、今回報告の小碗は全て内面露胎を、碗については両手法によって製作されている。また、重ね焼きに際しては13・14に認められるように内底輪状釉剥ぎした後に白泥を塗り、器同士の釉着の防止を図ったものが見られる。しかし、これらが普遍的なものでもなく、9～12では白泥付着は認められなかった。あくまでも傾向であるが、内底輪状釉剥ぎ資料は白泥の付着が多く認められる。一方、内面露胎とする方法には白泥は散見的那种という傾向を確認することができる。

金武氏によって琉球列島における今帰仁タイプは3類に分類されている(本章第1節)。金武分類の基準は、口縁部端部の特徴と、見込の釉剥ぎの方法に着眼して分類されている。総じて口縁端部平坦+底部内底輪状釉剥ぎ=Ⅰ類。端部平坦+内面露胎=Ⅱ類。端部舌状+内面露胎(露胎せず)=Ⅲ類と分けられる。今回採集された資料は底部の形態は金武分類の今帰仁タイプのいずれとも共通するものである。また、Ⅱ類に類似する要素は上元山採集の1が最も近いが、口縁端の仕上げが平坦となる例は今回の踏査では4に図示した碗がこれに最も類似すると言える。一方、Ⅲ類に類似するものとして9の資料があげられるが口縁部を欠くため断定できない。

今回調査できた上元山地点踏査・採集品を中心に概観したが、加えて田中採集資料(15～22)の中には、今帰仁タイプとの多くの共通点を見出すことができる。15・16は小碗で前述した1・2に比して器高が高い。この資料は今帰仁タイプとは器形的にはやや異なる印象を持つ。17～18は口縁端を平坦にする傾向を見いだすことができ、見込みは内底輪状釉剥ぎの資料。19・20はやや内湾気味の碗で

19は内底輪状釉剥ぎ、20は内面露胎とするタイプで後者はより直線的な器形となる。当該資料はサイズ的にも現在報告されている今帰仁タイプに最も近い資料と言える。21は口縁端を平坦にする独特な資料で、見込みは内面露胎となり沈線が一条廻る。

以上、紹介した資料群は、底部の造り、見込みの露胎・施釉の方法、口縁端の調整、器形的な特徴など今帰仁タイプと多くの類似点を認める。結論として本地点を含む浦口窯製品は、採集資料に限って言えば若干の相違点も認めることはできるものの、総じて今帰仁タイプと共通点が多く、製品の特徴としては概ね同品と認めるに値するものである。既知の資料では、今帰仁タイプの生産として浦口窯の中でも上元山地点は最も類似する資料を出土する地点であり、今帰仁タイプの生産地の候補地として、慨然性が高いと言える。

1.2. 西山頂地点 (26~32)

西山頂地点は、錦山寺から西側の地点である。道路に面した法面を踏査した。今回の踏査で表採された資料は12~13世紀頃に生産されたと考えられる製品が多く、今帰仁タイプに近似する資料は見られなかった。しかし次項で紹介する錦山寺地点とともに本製品群は鷹島沖海底遺跡より出土した遺物群に類似する点が認められる。また今帰仁タイプの生産年代や相対的な位置づけを考える上で有益な資料になると思われる。全体的な特徴は上元山と同様に、焼成は良く白~淡灰白色の磁器質の胎土で精良、釉は淡灰白色またはやや青味のある色で、概して釉は良く溶けて光沢がある。底部の造りも高台内壁の一条の溝と、高台内の平坦面の作成という特徴は共通する。見込みを露胎方法も内底輪状釉剥ぎ、内面露胎の両者認められる。当該地点採集の多くの製品に明瞭な白泥の付着が認められる。この点では、白泥付着が散見された上元山地点とは異なる特徴である。

26は福建省博物院収蔵資料で西山頂と注記された資料で、蓮弁文を描くいわゆる大宰府分類の龍泉窯系青磁Ⅲ類の影響下に製作されたことが一見して分かる浦口窯製品である。27~32は無文の碗で器形的な特徴は底径の小さな底部から直線的に外側に広がる口縁で、口縁端を舌状に仕上げる。見込みに一条の圈線が廻り、体内面に沈線を一条施している。見込みの露胎方法には若干のバリエーションが認められ、29は内面露胎、30は内底輪状釉剥ぎとなるようである。外面の施釉も胴下半まで施釉されているものが多い、概して上元山地点のものよりも造りのしっかりとした印象を持つ。今帰仁タイプとの類似点は浦口窯製品の共通項である底部成形や素地、釉調程度で、器形的には異なるものが多い。

1.3. 錦山寺地点 (33~34)

錦山寺地点は、市街地から北にある寺の周辺である。位置的には西山頂地点と隣接する。寺から丘陵に延びる里道沿いで遺物を採集することができた。総じて外面に蓮弁のあるもの、無文のもの(33・34)が採集されている。本地点の資料も全体的に焼成は良く白~淡灰白色の磁質の素地で、釉は淡灰白色またはやや青味のある色で、概して釉は良く溶けて光沢がある。見込は露胎となるが、白泥の塗布が一般的に的に行われている点は、西山頂地点と類似する。両地点の資料群は基本的には同じような種類の製品で構成されていると見られる。33は底部から口縁部へ直線的に開く器形で見込みに圈線が廻るタイプ、内体面の沈線が無いこと底径が小さい点などは西山頂地点の資料との相違点であるがほぼ同種の製品と考えて差し支えないと思われる。34はやや内湾気味の器形で見込みは内底露胎とする資料である。採集資料の中には、今帰仁タイプに近い資料は認められない。

1.4. 窯庫 (35~36)

窯庫地点は、2007年に踏査で訪れた際にちょうど道路工事中であった地点である。市街地へ延伸される道路の途中、旧地形は丘陵であったと考えられ、工事によって削られた法面、あるいは道路敷の

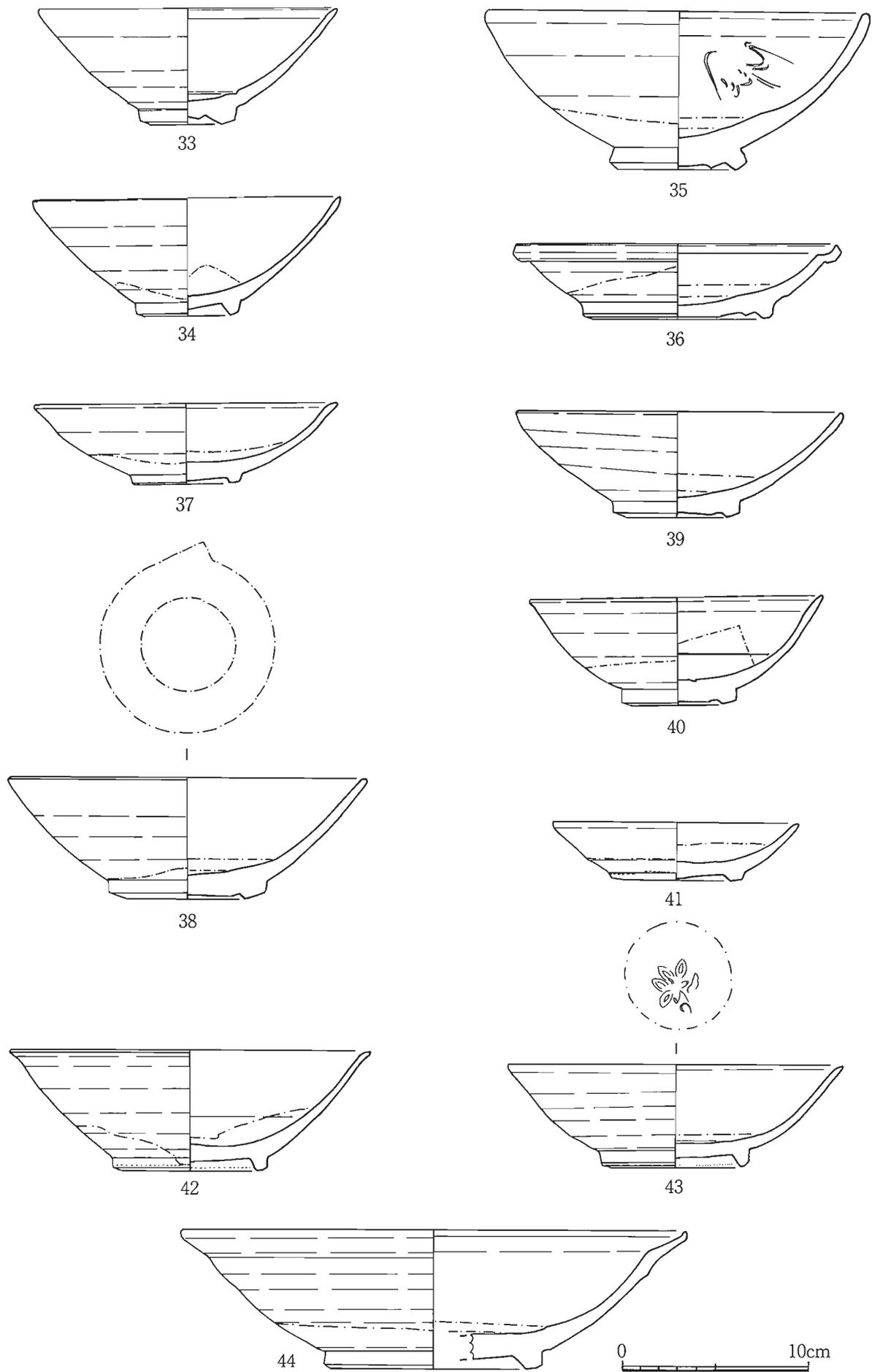


図4 浦口窯採集品及び庄辺窯採集品 (S = 1/3)

浦口窯：錦山寺地点 (33~34)、窯庫地点 (35~36)、その他 (37~40) 庄辺窯：(41~44)



写真3 浦口窯採集品・浦田窯採集品

路盤材には、おびただしい量の陶磁器が含まれていた。現場で確認した限りでは、12～13世紀頃に生産されたと考えられる製品が主体と考えられ、同安窯、龍泉窯などの影響下に製作されたと考えられる資料群が多く認められた。今帰仁タイプの類品は認められなかったが、採集された中で目に付いたものを紹介する。

35は高台内壁に沿って一条溝が認められるもので、内底輪状釉剥ぎとなる。器壁は全体的に厚く、口縁はやや内湾しながら立ち上がる特徴をもっている。釉は厚く施釉され内面にはヘラ描きの文様が見られる。厚手、内湾、内体面に文様など器形的な特徴は、ビロースクタイプと器形的な共通点を持つように思われる。36は龍泉窯系青磁皿類の皿に特徴的な折縁の皿で、高台の造りは他と共通する。

1.5. 碗窯山

碗窯山地点は、中学校から市街地へ向かう途中の碗窯山寺の付近の丘陵地である。道路に面した法面を踏査した。今回の踏査で表採された資料は12世紀頃に生産されたと考えられる製品が多く、今帰仁タイプに近似する資料は見られなかった。また見込みを露胎とするものはどれも高台に明瞭な白泥の付着が認められる。その他には、天目も確認されている。今回の調査では、今帰仁タイプと関連する遺物は含まれなかったため、本地点の遺物実測は行っていない。

1.6. その他 (37～40)

連江県博物館では、過去に採集されている資料の調査を行った。資料の出土状況の詳細は不明だが、一部の資料には採集地点名が記されている。

37・38は「加宅」と注記されていた資料で、連江県博物館の駱明勇館長によれば上元山に近い場所とされる。37は見込みが内底露胎となり、全体的に薄造りである点は今帰仁タイプと共通するが口縁が端反りとなる点は大きく異なる。38は今帰仁タイプと比して大振りの資料であるが、逆ハの字形に直線的に開く器形、高台の広さなど、器形的な特徴は近似点が多い。

39・40は注記の細かい地点名の注記の無い表採資料である。今帰仁タイプ碗にもいくつかのバリエーションが認められるが、39は高台の造りや器形的な特徴は類似点が多い。窯跡資料のため焼成が不良で胎土が赤褐色になるなどの特徴を有するが、今帰仁城跡出土資料にも類似する状況を示す資料が出土している。

2. 庄辺窯 (41～44)

最後に浦口窯製品とはまったく別の窯だが、庄辺窯跡の資料を実測できた4点に限り紹介する。当該資料を本項で紹介する理由は、今帰仁タイプと釉調、素地、器形的特徴が類似するところから、沖縄では今帰仁タイプとして概ね同種の製品として分類されてきた経緯があるためである。これまで浦口窯製品を通して今帰仁タイプとの類似点を探すことを行ってきたが、一方で浦口窯製品の特徴を明らかにするためにも、庄辺窯跡の資料を用い相対的に特徴をつかむことを目的とする。今帰仁タイプとの類似点を主題としながら、相違点を明らかにするために以下に紹介する。

庄辺窯製品は、無文の他、櫛目を入れたいわゆる同安窯系のもの、蓮弁文を描くいわゆる龍泉窯系の青磁を主に生産している(亀井1995)。全体的に焼成は良く、淡灰白色の磁器質の素地で、釉はうす緑色、あるいは青味を帯びて透明で、釉は良く溶けて光沢がある。底部の造りは高台内をほぼ平坦に一回で削り出しており、浦口窯製品とは明らかに異なる製作方法といえる。また畳付の外端を面取する特徴、露胎とする腰部下半にヘラ削りの跡が縦方向にシワとなって明瞭に残される点も特徴である。見込みの露胎方法は、内面露胎(41・42)と内底輪状釉剥ぎ(43・44)のもとが認められ、収蔵されていた資料中においては輪状釉剥ぎが優勢である。いずれも白泥が残る。見込みにはしばしば印

花文が施文されることがあるが、文様のモチーフは単純な花模様(43)が多く見られた。器形的には小碗のタイプと、大振りの碗もしくは鉢とも言うべき資料が見られ、他にも皿や壺なども確認されている。既に検討の結果今帰仁タイプⅣ類として金武氏によって分類された経緯があるものに、底部の削りだし、釉調、器形が近似しており本章第1節において今帰仁タイプからは除外している。

おわりに

これまでの4年間、4回にわたる福建省における窯跡採集品の調査を行ってきた。主な目的は、日本本州では出土例のほとんど見られない製品で、琉球において特徴的な出土を見せる今帰仁タイプとビロースクタイプの生産地の特定であった。日本における陶磁器分類は、博多や大宰府あるいは戦国城郭などを中心に整理されてきた。一方で、沖縄では日本本土の遺跡からはほとんど出土例の無い資料が発掘され注目されてきた。これらの資料の一部は沖縄で特徴的に出土することから、金武正紀によって「今帰仁タイプ」・「ビロースクタイプ」と型式設定され注意されてきた。既に田中克子氏によって今帰仁タイプは浦口窯が、ビロースクタイプは閩清義窯がその生産地として指摘されている(森本・田中2004)。

本節では、今帰仁タイプの古里と指摘された「浦口窯」を訪れ、改めて現地で踏査を行い、関係機関に保管されている採集資料の中から、より具体的に今帰仁タイプに近似するものを抽出し紹介してきた。本来的には、浦口窯跡の窯としての全体的な様相を確認することが先決と考えられるが、「今帰仁タイプ」に焦点を絞って比較するための作業を中心としており、この点ではかなり限定された資料の観察であったとも言える。それでも、浦口窯跡が琉球列島出土の今帰仁タイプの生産地の一つとして特定することができたものと考えられる。これは、筆者一人の所見ではなく、共同研究に参加した考古班の一致した結論である。また、併せて博多や鷹島沖海底遺跡で発掘された資料についても、具体的な関連資料を抽出でき、沖縄出土の浦田窯庄辺窯との比較についても一部言及することができた。

参考文献

- 亀井明徳 1995 『福建省古窯跡出土陶磁の研究』都北印刷
- 金武正紀 2007 「今帰仁タイプ白磁碗」『南島考古』No. 26 沖縄考古学会
- 曾凡 2001 『福建陶磁考古概論』福建省地図出版
- 田中克子 1996 「博多遺跡群出土の内面露胎の磁器の一群について」『博多研究会誌』第4号 博多研究会
- 田中克子 2002 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁(その二)福建省江流域、及び以北における窯跡出土陶磁」『博多研究会誌』第10号 博多研究会
- 田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁(その三)宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号 博多研究会
- 森本朝子・田中克子 2004 「沖縄出土の貿易陶磁の問題点—中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁—」『グスク文化を考える』新人物往来社



福建博物院収蔵資料の調査(2005年)



2005年浦口窯跡採集資料の確認状況(2006年)



浦口窯跡碗窯山寺(2005年)



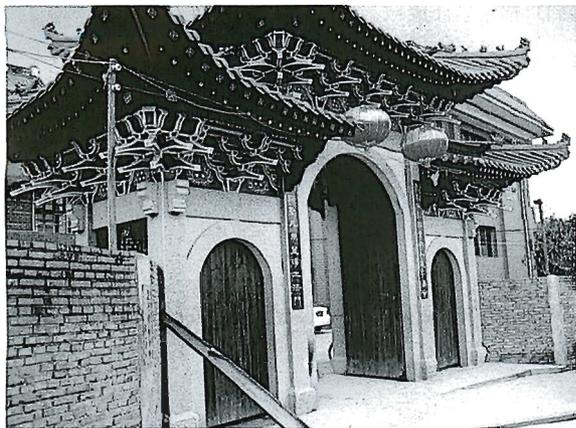
浦口窯跡上元山地点の踏査(2007年)



浦口窯跡窯庫地点の踏査遠景(2007年)



浦口窯跡窯庫地点の踏査近景(2007年)



調査地点にある錦山寺(2007年)



連江県博物館前で集合写真(2007年)

写真4 浦口窯の調査写真

ピロースクタイプに関わる窯跡とその製品

—福建省閩江流域窯跡の踏査と関連資料の調査—

田中克子
福岡市教育委員会

TANAKA Katsuko
Board of Education FUKUOKA City

筆者は、琉球諸島を中心として出土するピロースクタイプが、福建省閩江流域の窯の製品である可能性が極めて高いことを以前指摘した（田中・森本2004、357頁）。その生産地特定のため、2005～2008年福建博物院等関連機関所蔵品の調査、及び窯跡の踏査を行った。以下関連する生産窯とその出土・採集資料について報告する。なお生産地出土品ではあるが、便宜上第3章第1節の分類記号を使用する。

1. 閩清窯（図1～6、写真1～7・9・10）

福州市閩清県東橋鎮に所在する。閩江中流域に位置し、閩清県市街地から北西約8 km、閩江支流安仁溪が北から本流に合流する地点から安仁溪流域一帯にかけて窯跡が分布する。窯跡は1983年に厦門大学等により分布調査が行われ、大きく3つの窯群に分かれることがわかっている（閩清県文化局他1993）。1. 安仁溪と閩江の合流地点一帯の安仁溪窯、2. 安仁溪村から約5 km上流の義窯村までの安仁溪東側一帯の義窯、3. 義窯村からさらに上流へ約3 km遡った青窯村の南、安仁溪西岸に位置する青窯の3カ所である。製品の主体は白磁で、他に天目や明代竜泉窯系統の青磁等も焼かれている。特に北宋後半～南宋前半の白磁は日本へ大量に輸出されており、11世紀後半～12世紀中頃にかけて日本で出土する福建産白磁（第3章第5節2の図2、田中分類A・C類、田中2003）のほとんどがこの窯一帯の製品である。

1.1. 安仁溪窯（図2、写真1）

安仁溪・大箬村（旧大安村）等、閩江北岸に沿って6地点を踏査した。もともと閩江北側丘陵上に窯場が広がっていたと思われるが、現在は鉄道や道路によって分断され、製品や窯具等の散布や堆積が随所に見られる（写真9）。

この一帯ではピロースクタイプは確認できなかったが、形態的にI類に繋がると思われる碗（1～4）を採集した。また、これらと同類の製品はアモイ大学踏査時にも採集されている（写真1-72～74）。

やや黄色、或いは灰色がかった白色で磁質胎であるが小孔が多く、わずかに黄味、或いは青味を帯びた釉調でやや失透する。いずれも高台が低く畳付が水平に切られ、内底径が小さい等、I類と共通する点が見出せる。内底の様相は、浅く段が付く（1・74）・圈線が巡る（2）・凸状に小さく膨らむ（3・4・72・73）ものがあり、4・73・74は輪状に釉剥ぎする。沖縄県与那国町与那原遺跡・ピロースク遺跡出土のI類碗にもこのように釉剥ぎする類例がある（第3章第3節1の図6-79・91）。さらに、窯具が付着するため不明瞭ではあるが、3と同じと思われるタイプで内側面に櫛描文を施すものもある。しかし、器壁が薄かったり、I類の多くが体外面途中までしか施釉されないのに対し、高台畳付際まで施釉されているものが多い等、I類の範疇に入れるには違和感がある。

これらは形態的に、博多遺跡群で12世紀後半代～13世紀にかけて出土する閩清窯系白磁（田中分類D類、田中2003）の特徴をも有しており、この南宋期の白磁からピロースクタイプI類へと変化する移行期の製品と考える（第3章第5節2の図2参照）。

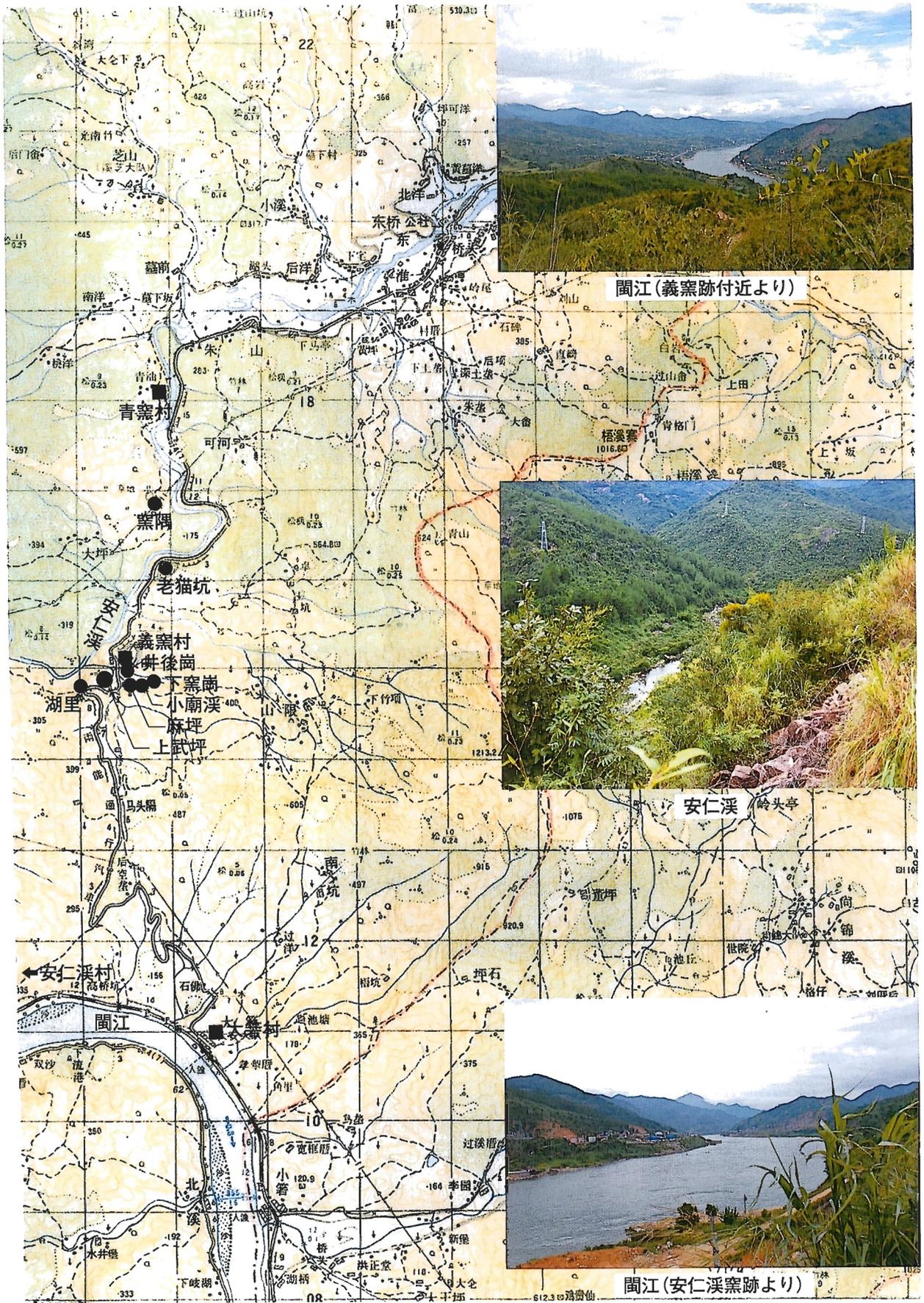


图 1 閩清寨踏查地点位置图

1.2. 義窯

大箸村から安仁溪上流方向へ、上武坪・湖里・麻坪・小廟溪・下窯崗・井後崗・老猫坑の地点を踏査した(写真9・10)。この地域は、特に大量の北宋後半～南宋初めの白磁の堆積や散布が至る所で認められ、この時期の白磁生産の中心であったことを窺い知ることができる。上武坪・下窯崗・井後崗・老猫坑でピロークスタップを確認した。

1.2.1. 上武坪(図3・写真2)

5・6は安仁溪窯採集品と同様、ピロースクタイプI類に先行すると思われる碗である。かなり白味の強い灰白色磁質胎で、やや黄味がかかった透明釉がかかる。いずれもI類碗に比べると小振りで、

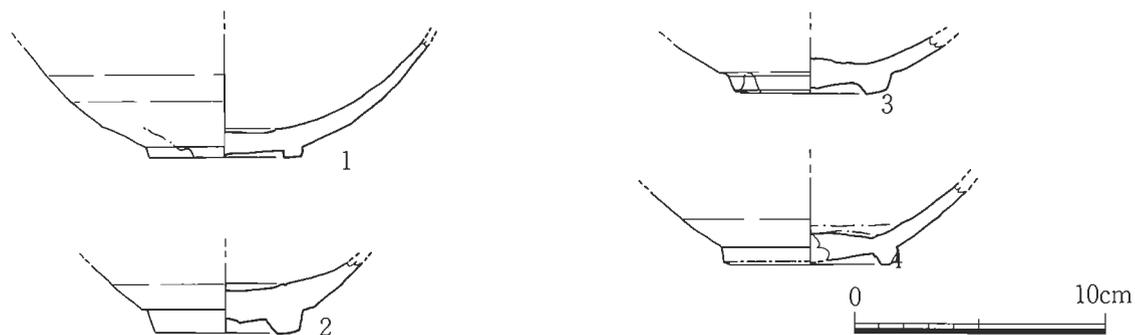


図2 閩清安仁溪窯採集品 (S = 1/3)

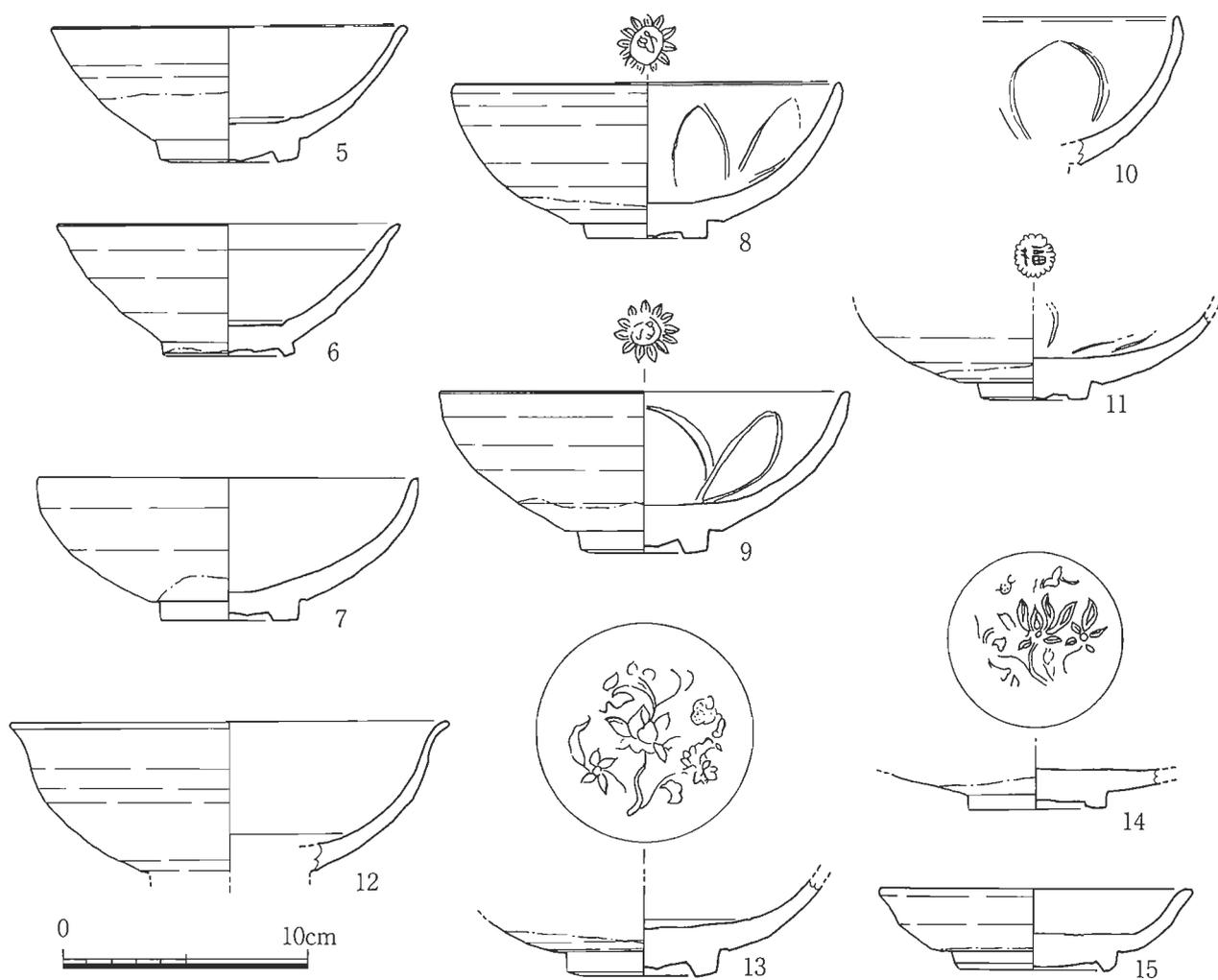


図3 閩清義窯上武坪採集品 (S = 1/3)

さらに内底面が広く平坦になっている点でI類とは大きく異なる。しかし、5は高台の太さ・形状や体外面途中まで施釉される等、基本的にはビロースタイルに近い特徴を持つ。また、6も口縁端部に強い横ナデ調整を加えやや反り気味になる点や内面口縁下に沈線が巡る等、かなりI類の特徴を見出せるが、高台が細く畳付際まで施釉される点ではI類と異なる。

ビロースタイル（7～15）は、わずかに灰色がかかった小孔の多い白色磁質胎で、釉はわずかに灰色味或いは青味を帯び、透明感のあるものと失透したものがある。いずれも、高台は一旦削り出した後、外底中央部分のヘソ状に突出した部分を雑に再度削り取り、畳付は水平に切られている。また、大きく張り出した腰部の高台脇を水平に削り込む特徴も共通する。

7～11はII類碗である。7は無文、他は内側面に2本単位の細いヘラ彫りによる蓮弁文と内底面に印花文を施す。11の印花文は花卉の中に「福」字を入れたもので、8・9も「福」のくずしと思われる。他に花卉のみのものと、花卉の中に「寿」字を入れたものもある（写真2-75・76）。

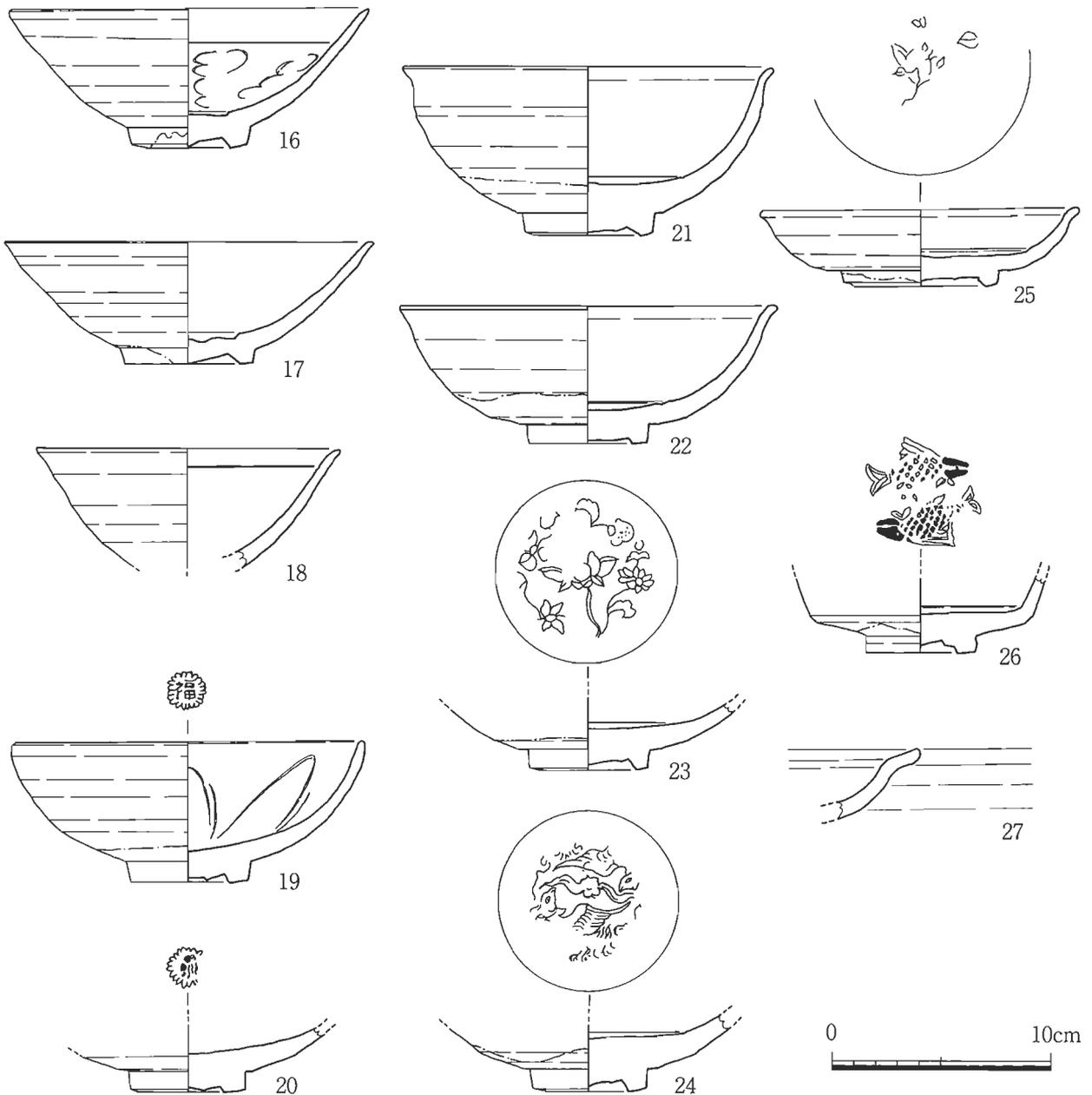


図4 閩清義窯下窯崗採集品 (S = 1/3)

12～15はⅢ類である。12・13は碗、14は内底面の広さから皿と思われる。13・14は内底面に蓮華文を型押しする。15は外反口縁皿で、畳付は水平に削りっぱなしにせず、再度外縁を面取りする。沖縄県首里城跡等でも類似した皿（第3章第3節1の図4-60）が出土している。

1.2.2. 下窯崗（図4・写真3・4）

16～18はⅠ類に先行すると思われる碗である。わずかに灰色がかった白色多孔質の磁質胎で、やや黄味或いは灰色味をおびた透明釉がかかる。内底が狭く段が付く点や高台の形状、また16・18のように内面口縁下に沈線が巡る等、Ⅰ類との類似点は見出せるが、全体に小振りで高台畳付際まで施釉される点で異なる。16は内側面に縦方向のらせん状のヘラ彫り文が施され、この他に同様のヘラ彫り文と櫛描文を併用したものもある。これらは安仁溪窯跡採集品と同類で、他に上武坪採集品（図3-5）と同じタイプの碗（写真3-77）も多く認められた。

19～25がピロースクタイプで、白味の強い磁質胎に、わずかに灰色或いは青味がかった透明釉がかかる。高台の削り出し方法・器形の特徴等は上武坪採集品（図3）と同じである。

19・20はⅡ類碗である。内側面の蓮弁文と内底面の印花文の組み合わせも上武坪採集品と同じで、20の印花文も「福」字のくずしと思われる。

21～25はⅢ類で、25が外反口縁皿、他は碗である。23～25は内底面に印花文を施すが、Ⅲ類に特徴的に見られる蓮華文（23・写真4-78・79）の他に、鳳凰文（24・写真4-80）もある。26は腰折れの碗、27は鐔状の口縁部片であるが、恐らく写真4の81のような鉢形を呈すると思われる。高台の形

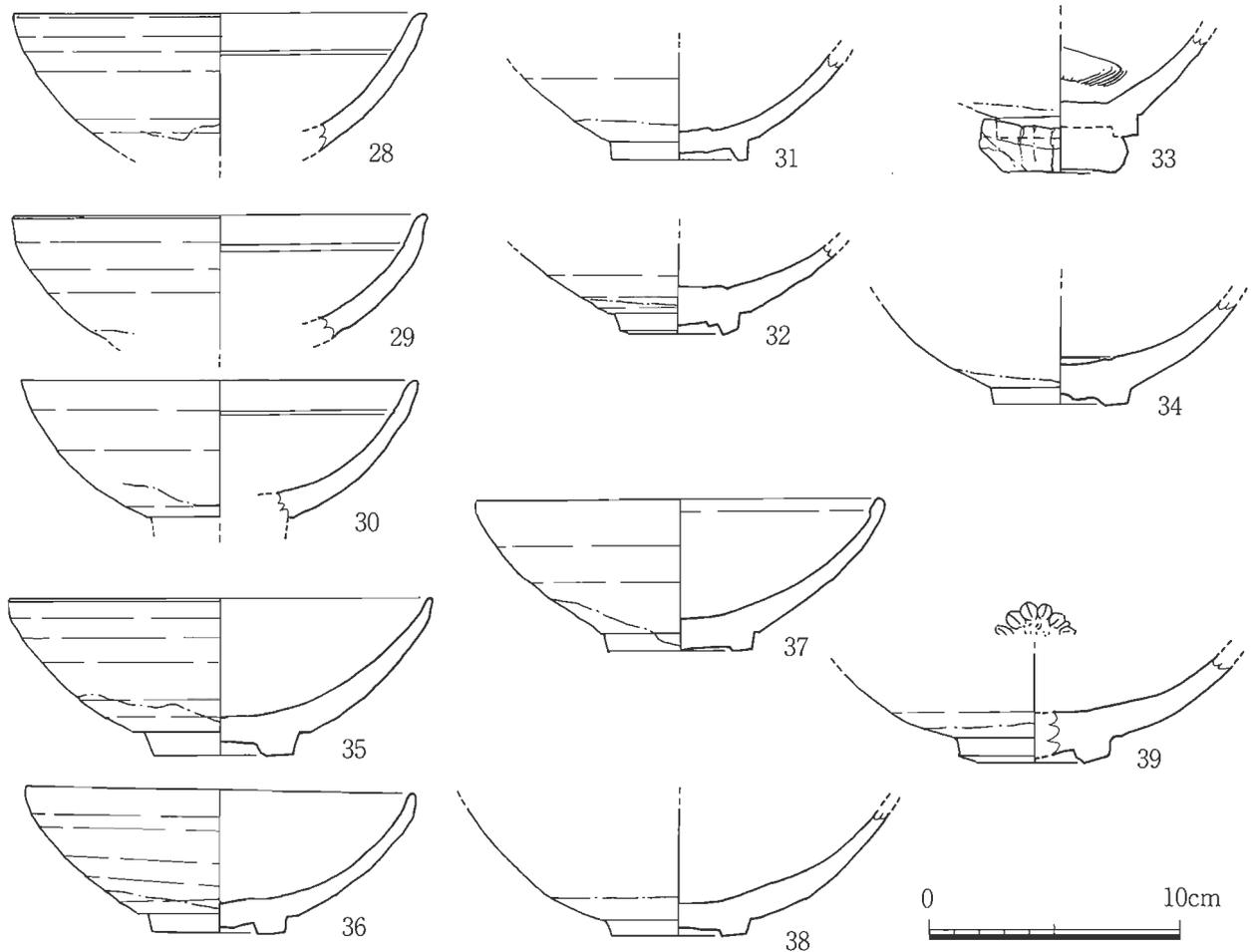


図5 閩清義窯老猫坑採集品 (S = 1/3)

状や器壁の厚さ・胎土・釉調等、ビロースクタイプの特徴と共通しており参考資料として掲載した。26は内底面に双魚文が型押しされる。この腰折れ碗のタイプにはⅢ類碗と同じ蓮華文が施されたものもあり(写真4-82)、与那国町与那原遺跡で類似品が出土している(第3章第3節1の図6-92)。また、26に見られる双魚文は連江県定海海底遺跡出土のビロースクタイプⅡ類碗(第3章第3節4の図1-4)や厦門大学採集品のⅢ類碗(閩清県博物館蔵)にも類例が認められた。

1.2.3. 井後崗(写真4)

安仁溪東側、義窯村後背の丘陵上に窯が広がる。踏査では宋代の白磁製品が多く、ビロースクタイプはⅢ類が1点のみ採集されたが、1983年の厦門大学による踏査では甲・乙・丙の3カ所の地点で、Ⅰ(83)・Ⅱ(84)・Ⅲ(85)類が確認されている(閩清県文化局他1993)。

Ⅰ類は内側面に尾の長い櫛描文、Ⅲ類はいずれも内底面に印花蓮華文が施されている。

1.2.4. 老猫坑(図5、写真5)

義窯村から安仁溪を約1 km 遡った安仁溪沿いの東側道路際に、約80mの長さにわたって遺物の散布が認められた。恐らく道路開設にあたって窯が破壊されたと思われる、河川東岸丘陵断面には匣鉢等の堆積が残る。他地域で見られた宋代の白磁はほぼ認められなかった。

ビロースクタイプ(28~39)はⅠ・Ⅱ類のみで、Ⅱ類が圧倒的に多い。胎土は小孔の多いものとよく締まった緻密なものがある。焼成不足による不良品が多く総体的ではないが、白味の強い淡灰色磁質胎で、釉調は乳白色で半透明なものが多い。いずれも器壁の厚さ・高台の削り出し方法や形状等、義窯の他地点の製品と同じ特徴を持つ。

28~34はⅠ類碗である。28~30は内面口縁下に太い沈線を巡らせ、特に28・29のように口縁端部に強いナデ調整を加え口唇外端が反り気味に尖る点は、琉球諸島出土のⅠ類碗の特徴と酷似する。31~34の底部片は内底が狭く、明瞭な深い段が付くもの(31~33)と、沈線を巡らす(34)ものがある。33は内面に櫛描文を施し、また高台内には円盤状のハマが付着する。

35~39はⅡ類碗である。内底に印花文を施すもの(39)が1点採集されたのみで他は全て無文である。また、印花文と併用されることの多い内側面に蓮弁文を持つものもない。

1.3. 青窯

1.3.1. 窯隔(図6、写真6・7)

義窯村より安仁溪をさらに上流へ約3 km 遡った青窯村から南へ約1.5km、安仁溪西岸の窯隔一帯を踏査した。義窯老猫坑がある丘陵とは安仁溪を挟んで対面する丘陵上に窯が広がっていたようである(写真10)。ビロースクタイプ以外では、宋代の白磁や明代竜泉窯系統の青磁細蓮弁文碗等が認められた。

40~59がビロースクタイプで、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類がある。わずかに灰色がかかった白色磁質胎で、小孔の多いものとよく締まった緻密なものがある。また釉調についても、わずかに青味を帯びよく熔けたガラス質透明釉のものと、乳白色の失透したものがある。いずれも器壁が厚く、高台畳付を水平に削り、また高台の削り出しは粗く、外底中央のヘソ状に突出した部分を雑に削り取る等、義窯の製品と同じ特徴を持つ。40・42・44・46・48は青窯村から窯隔に行く途中の路上で採集したものである。

40~46・写真6の86はⅠ類碗である。内面口縁下には細い沈線を巡らせ(40・41)、内面無文のもの(45)と尾の長い櫛描文を施すもの(40~44・46)がある。また、内底は狭くほとんどが丸く膨らむが、46は段が付かずⅡ類のように丸く凹む。

47~57はⅡ類碗である。内面無文(47~50)と施文するものがあり、後者は細いヘラ彫りによる2本単位の蓮弁文と印花文を組み合わせたもの(51~54)と、内底に印花文のみ施すもの(55~57)が

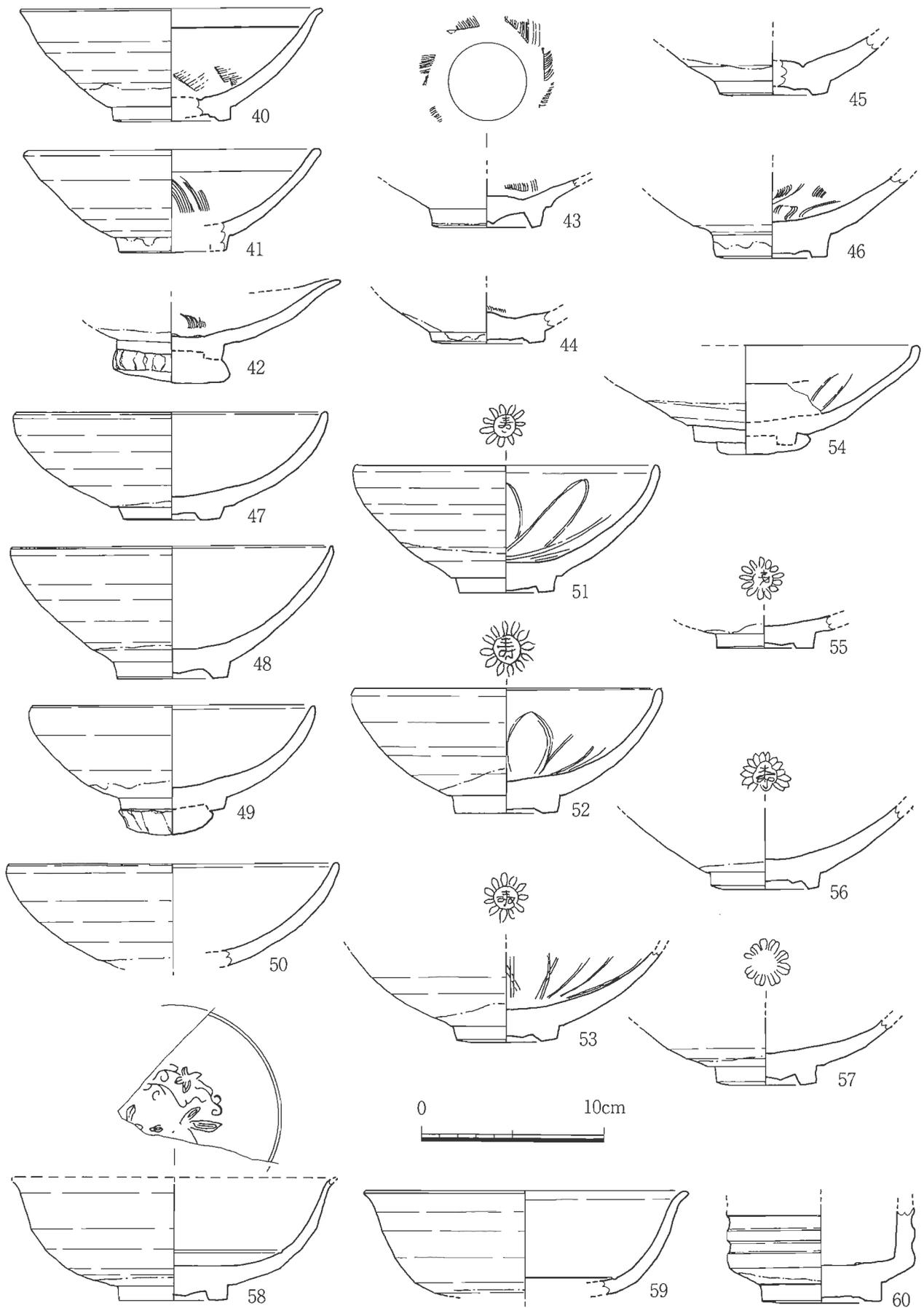


图6 闽清青窰採集品 (S = 1/3)

ある。さらに印花文は花卉のみと中に「寿」字を入れるものがある。

58・59は皿類碗で、内底に蓮華文を型押しする。この他に義窯下窯崗採集品（写真4-82）と同じく蓮華文を施した腰折れ碗（写真7-87）や、内側に縦方向の幅広ヘラ彫りを入れ、内底に蓮華文を型押しした外反口縁皿もある（写真7-88）。

60は内面露胎となっており香炉であろう。外面は有段状になっており、また器壁が厚く高台の様相もピロースタイプと同じ特徴を持つ。

42・49・54のように高台内にハマ、また内面に匣鉢が付着したものも多く、これらが1点ずつ匣鉢に納めた正置法で焼成されたことがわかる。また、60は内底に径の小さな高台痕が残っており、中に小さな器物を入れて焼成したのであろう。

2. 閩侯鴻尾窯（図7、写真8）

福州市閩侯県鴻尾に所在する。前述した閩清窯から約25km閩江下流に位置し、閩江本流へは南からそそぐ支流源里溪と繋がる。福建博物院による採集品で、所蔵品調査によってピロースタイプⅡ・皿類碗を確認した。他には北宋後半～南宋前半の白磁や同安窯系青磁も採集されている。

61は鴻尾公社付近（後窯）採集のⅡ類碗である。胎土は淡黄白色で未磁化、釉はやや灰色がかかった乳白色を呈するが、焼成不足による可能性もある。また素地に隙間の多い閩清窯の製品に比べると緻密である。さらに、口径に対し高台径が小さく器高も高い等全体的に不安定な形状は、安定感のある印象が強い琉球諸島出土品や閩清窯の製品とは若干異なる。しかし採集資料が少なく、これらがすなわちこの窯製品の特徴であるとは言い切れない。

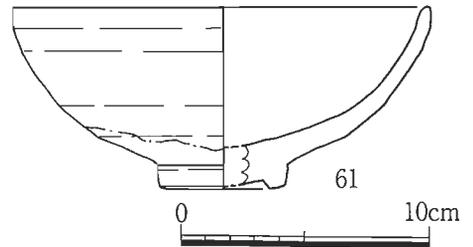


図7 閩侯鴻尾窯採集品（S=1/3）

3. 南平茶洋窯（図8、写真8）

南平市太平鎮葫蘆山村に所在する。福建省の西、江西省との堺にそびえる武夷山に源を発する水流は南平で合流し、福建省最大の河川である閩江を形成する。茶洋窯は南平市街地から東南約25kmに位置し、南に閩江を臨む丘陵上に窯場が広がる（写真10）。1950年代に発見されて以来断続的に分布調査が行われ、1995～1996年に大嶺干窯跡と安後山窯跡で発掘調査が行われた（福建省博物館2000）。62・63は発掘調査出土品である。製品は白磁、青白磁、同安・竜泉窯系青磁、天目碗、陶器等種類が

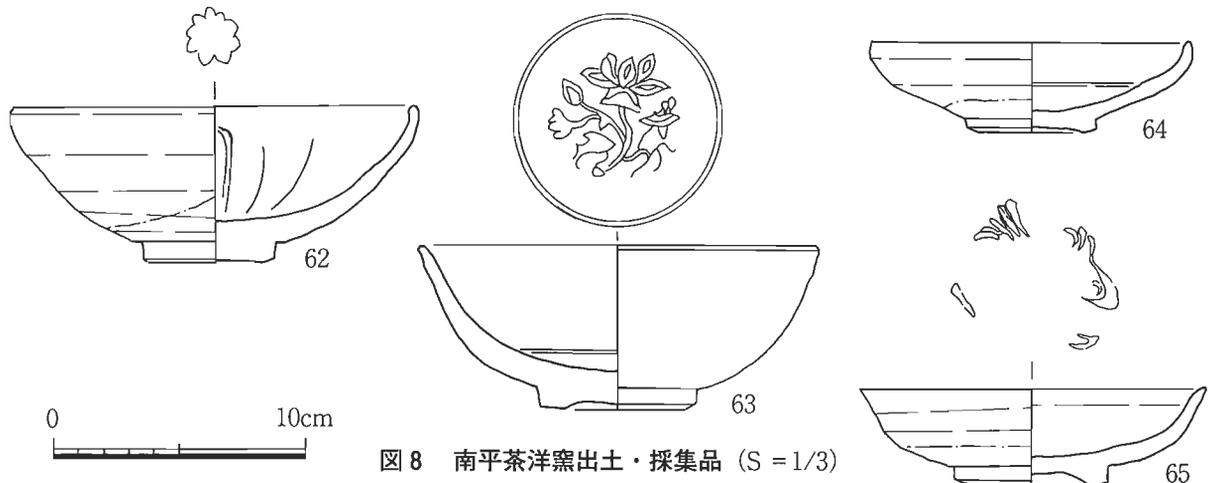


図8 南平茶洋窯出土・採集品（S=1/3）

※63は文献（福建省博物館2000）より再トレース

多く、中でも日本に輸出され関連の深いものに北宋～南宋前半の白磁と元～明代の天目碗がある。

この窯におけるピロースクタイプの特徴は円盤状高台にある。高台を輪状に削り出さずに、外底を上げ底気味に削る平底を呈する。碗と皿があり、それぞれに内碗口縁と外反口縁がある。胎土はわずかに灰色がかかった白色で夾雑物を含まず精良であるが、完全に磁化しきっていない。釉調はやや青味がかり、透明感がある。

62は内湾口縁碗である。高台脇を水平に削り込む。内側面に2本単位のへら彫りによる蓮弁文を入れ、内底面には花卉をスタンプする。この他、花卉の中に「卍」字・「金」字を入れ込んだ印花文(曾2001、112頁)と無文のものがある。63は外反口縁碗で、内底に圈線を巡らせ中には蓮華文を型押しする。64は内湾口縁皿、65は外反口縁皿で内底に施文するが、これは印花文でなくへら彫りと思われる。64の内湾口縁皿の類似品は沖縄県銘刈原遺跡・稲福遺跡から出土している(第3章第3節1の図4-56・57)。器形・文様から、内湾口縁碗はピロースクタイプⅡ類に、外反口縁碗はⅢ類に対応すると考える。

ピロースクタイプ製品に見られる円盤状高台はこの窯の天目碗にも共通した特徴である。この天目碗のうち、器高の低い内湾口縁の平茶碗は、韓国新安沖で発見された沈船より出土しており(文化財庁・国立海洋遺物展示館2006、330頁)、この船は至治三(1323)年、慶元(現・寧波)を出航したとされている。また、器高の深いものは茶の湯の世界では「灰被」天目と呼ばれるもので(茶道資料館他1994)、博多遺跡群では14世紀後半以降出土する天目碗の主流となっている。このことから、この高台の形状は茶洋窯の元～明代前半の製品の特徴を示すものと考えられ、この窯のピロースクタイプも14世紀前半～15世紀にかけて生産された可能性が高い。

4. 三明中村垵瑤窯

三明市三元区中村郷垵瑤に所在する。三明は閩江上流の支流である沙溪沿いにあり、窯跡は三明市街地より南8 kmに位置する。1993～1994年に草寮後山窯跡発掘調査されている(福建省博物館他1995)。

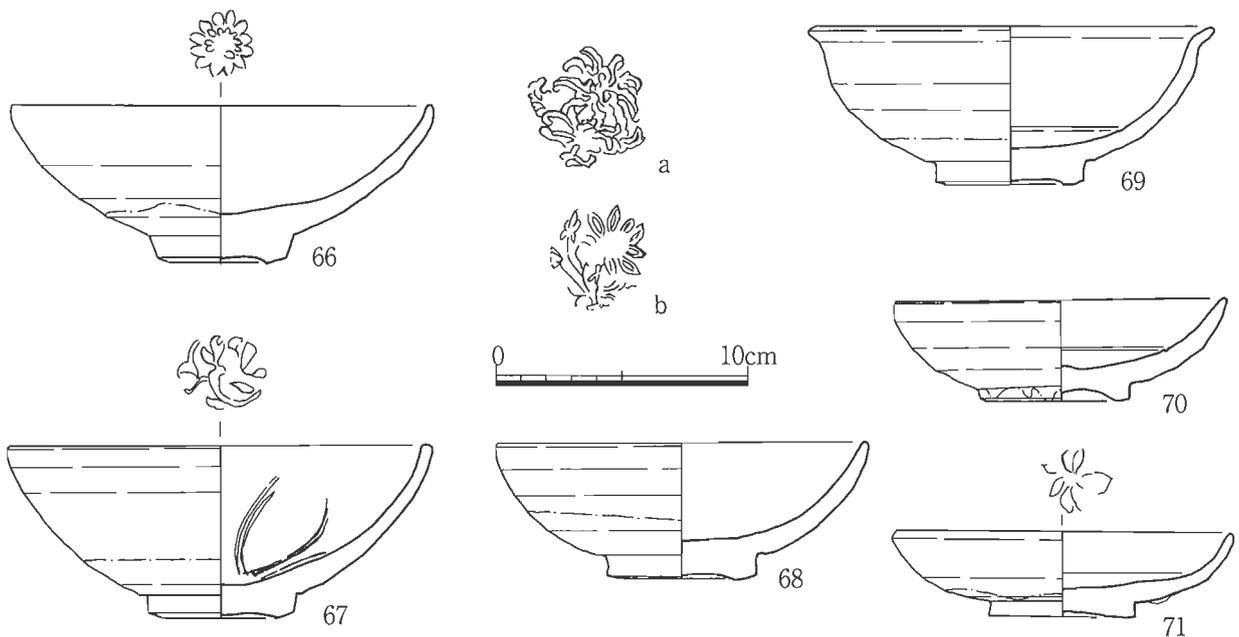


図9 三明中村垵瑤窯採集品 (S = 1/3)

4.1. 蛇頭山 (図9、写真8)

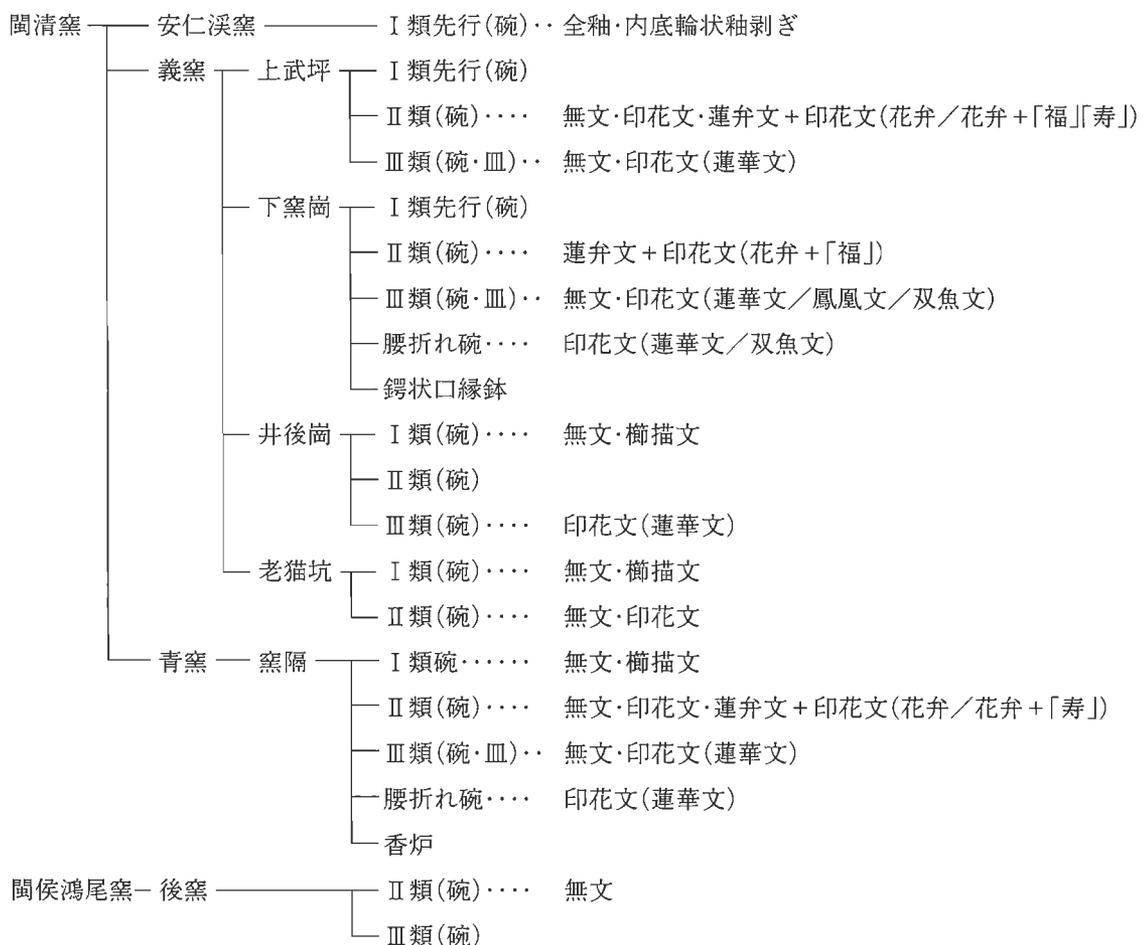
福建博物院採集・所蔵品である。製品は白磁が主体で、その他竜泉窯系統の青磁・天目碗等がある。白磁は南平茶洋窯と同様、全てが円盤状高台を呈する。ビロースタイルに類似する製品は、内湾口縁碗(66~68)・皿(70・71)と外反口縁碗(69)があり、前者は無文のもの、内壁に2本単位の細いヘラ彫りによる蓮弁文と内底面に印花文を施すものがある。

円盤状高台の他、非常に白くきめ細かな精良な胎土と青味が強くよく熔けた透明感のあるガラス質の釉調が、この窯の白磁の共通した特徴であるが、この点において粗製の印象が強い琉球諸島出土のビロースタイルとは大きく異なる。

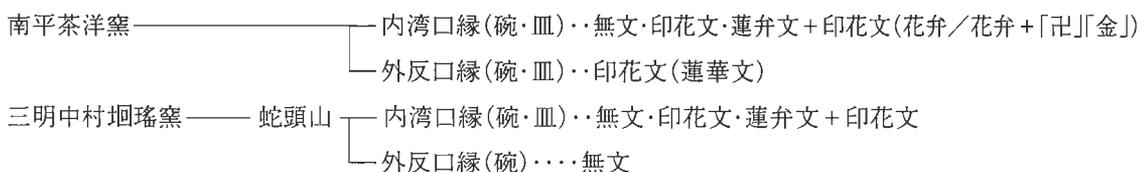
5. まとめ

調査対象とした資料が採集品であるため数量や種類等かなり限定されたもので、それぞれの窯製品の特徴を一概には言及できないが、以上より把握できた傾向を下記の如くまとめる。

①輪状高台



②円盤状高台



閩江流域では下流から上流にかけて広範囲に、肉厚のビロースクタイプに類する製品が生産されている。器種はかなり規格化された碗・皿が主体となっているが、腰折れの碗や鐔状口縁鉢のように規格からはずれたものや、香炉等食膳具以外の製品もある。さらに、その製品の形態的特徴から、①輪状高台を有する閩清窯を中心とした中・下流域と、②円盤状高台を有する南平茶洋窯を中心とした上流域、この大きな二つのグループに分けられそうである。しかし、①のグループの製品については、胎土・釉調・器形等極めて類似しており、それぞれを明確に区別する特徴は見出せない。ただし、内底面に施された印花文については、花卉や文字の種類・形状、さらには筆跡等、詳細な分析によって、今後ある程度窯の特徴を見出せる可能性はある。また、外反口縁皿類に見られる「蓮華文」は閩江流域でかなり普遍的に採用されている。詳細については後述するが、日本での出土年代からすると、明代初め頃に広く流行した文様であろう。

以上報告した窯跡資料との比較・検討の結果、日本で出土するビロースクタイプの生産地に、少なくとも閩清義窯・青窯が含まれることは確実である。

文献

曾凡 2001 『福建陶磁考古概論』福建省地図出版社、p. 112

田中克子・森本朝子 2004 「沖縄出土の貿易陶磁の問題点－中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁－」『グスク文化を考える』、p. 357、新人物往来社

田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁－（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号、博多研究会

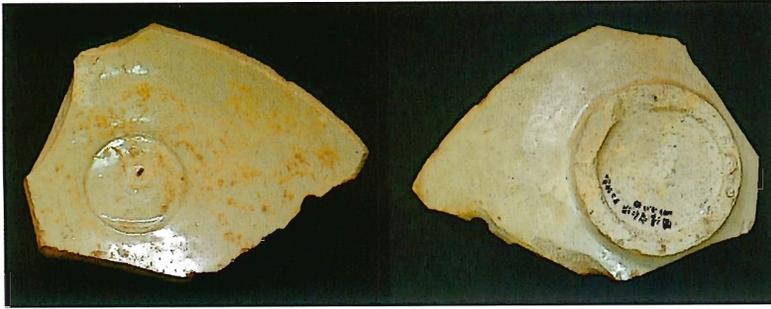
茶道資料館・福建省博物館 1994 『唐物天目－福建省建窯出土天目と日本伝世の天目』茶道資料館

閩清県文化局・厦門大学人類学系考古專業 1993 「閩清県義窯和青窯調査報告」『福建文博』1993年第1・2期合刊、福建省博物館

福建省博物館・三明市文管会・三明市博物館 1995 「三明中村垵瑤元代窯址発掘簡報」『福建文博』1995年第2期、福建省博物館

福建省博物館 2000 「南平茶洋窯址1995－1996年度発掘簡報」『福建文博』2000年第2期、福建省博物館

文化財庁・国立海洋遺物展示館 2006 『新安船 The SHINAN Wreck II』、p. 330、国立海洋遺物展示館、韓国



1



72



2



73



3



4



30.06.2008

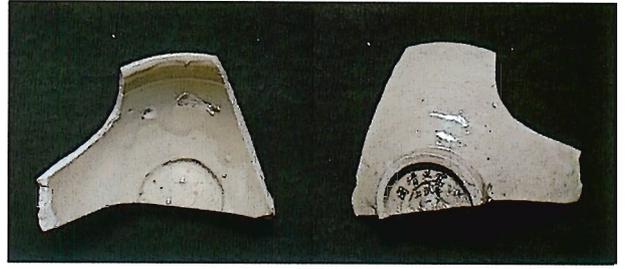
74

(72~74は閩清県博物館蔵、福建博物院考古研究所写真提供)

写真1 閩清安仁溪窯採集品 (縮尺不同)



5



6



7



9



8



75



76



11



14



13



15

写真2 閩清義窯上武坪採集品（縮尺不同）



16



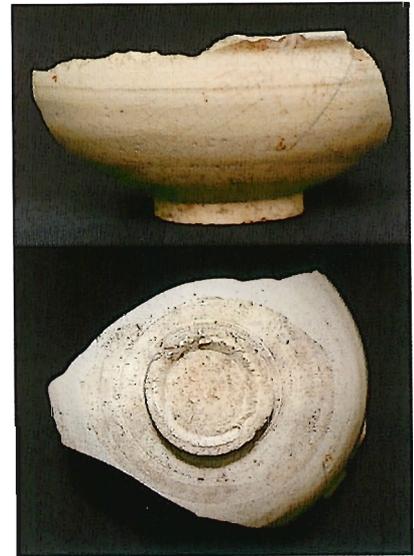
17



77



18



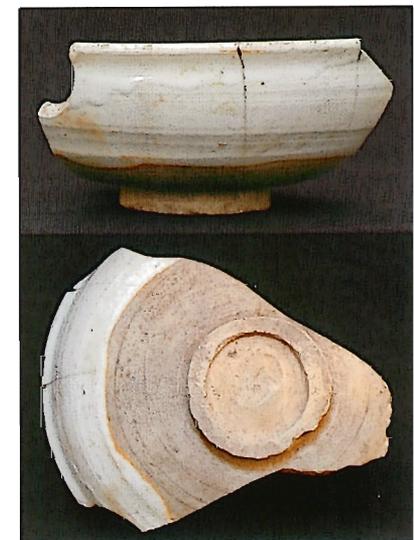
21



19



20



22

写真3 閩清義窯下窯崗採集品 (縮尺不同)



(下窯崗)
(井後崗)

写真4 閩清義窯下窯崗・井後崗採集品 (縮尺不同)

(80・81は閩清県博物館、83～85は厦門大学蔵・福建博物院考古研究所写真提供)



ピロースタイプⅠ類・口縁部①

33

ピロースタイプⅠ類・底部②③④



35

36

39



窯具の付着

ピロースタイプⅡ類・底部

写真5 関清義窯老猫坑採集品 (縮尺不同)



43



44



45



46



47



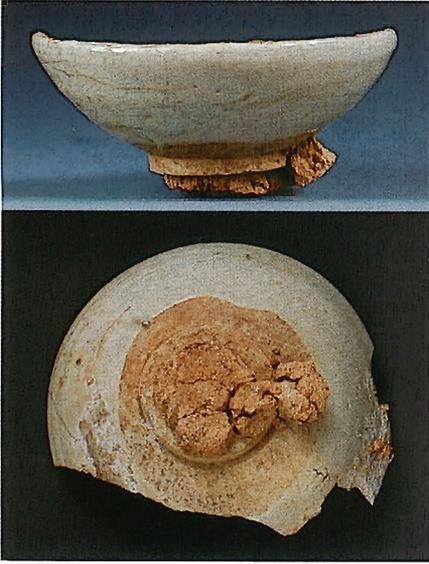
86

ピロースクタイプI類

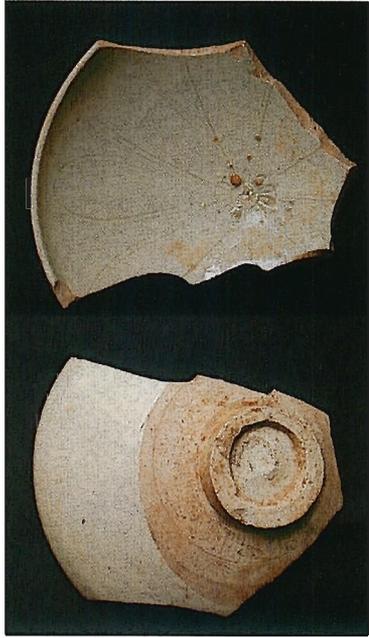


54

写真6 閩清青窯採集品(1)(縮尺不同)



49



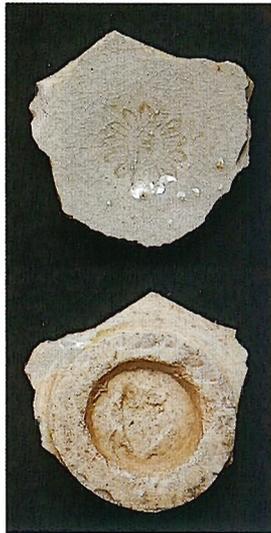
51



52



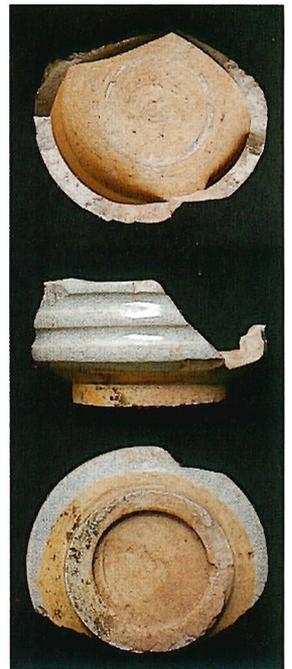
53



55



58



60



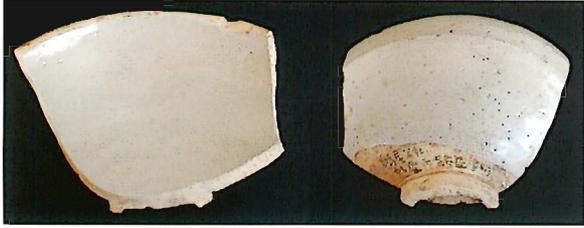
87

(86~88は閩清県博物館蔵、
福建博物院考古研究所写真提供)



88

写真7 閩清青窯採集品(2)(縮尺不同)



(閩侯鴻尾窯)

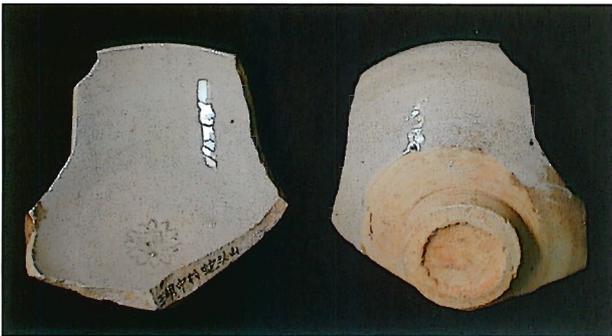
61



64



65



66

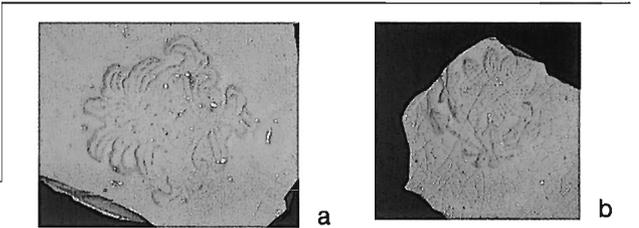


67



(南平茶洋窯)

62

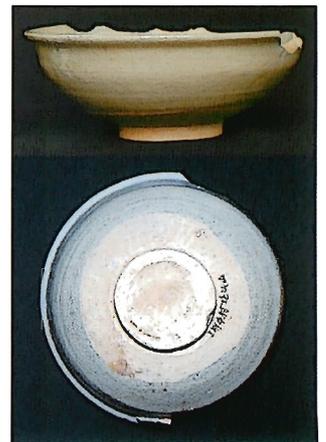


a

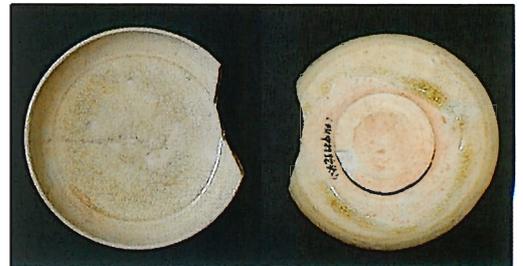
b



68



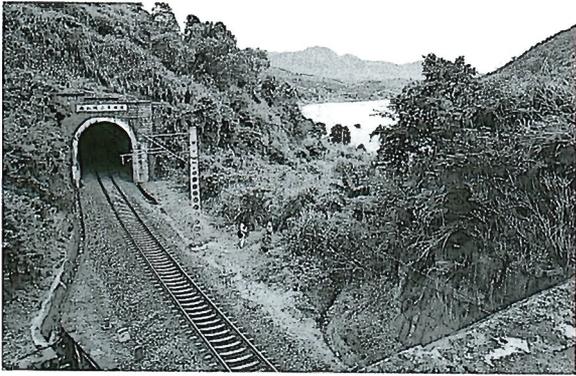
69



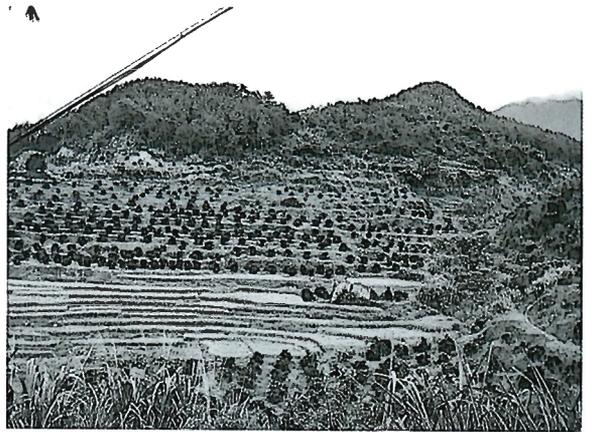
70

(三明中村窯)

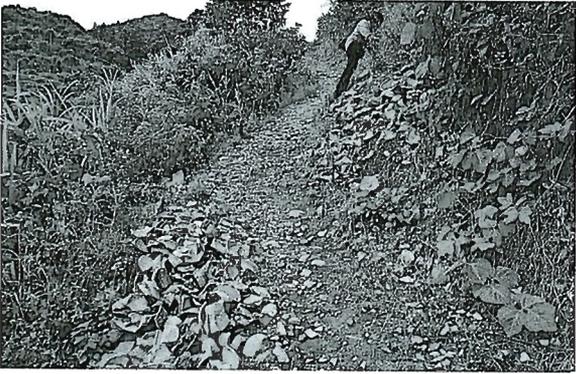
写真8 閩侯鴻尾窯・南平茶洋窯・三明中村窯採集品 (縮尺不同)



①



③



②



④

安仁溪窯 ①②
義窯上武坪 ③④



⑤



⑦



⑥



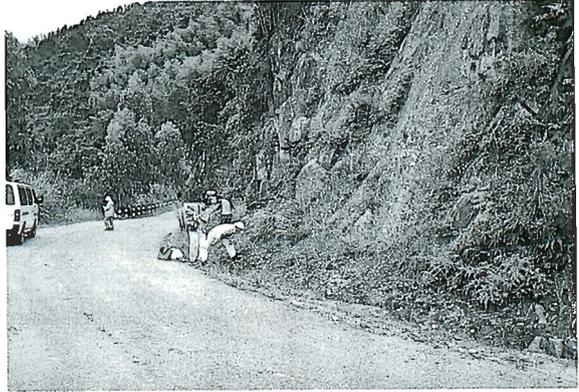
⑧

義窯下窯崗 ⑤⑥⑦
⑦ (小廟溪より下窯崗を望む)
義窯井後崗 ⑧

写真9 閩清窯



①



③



②

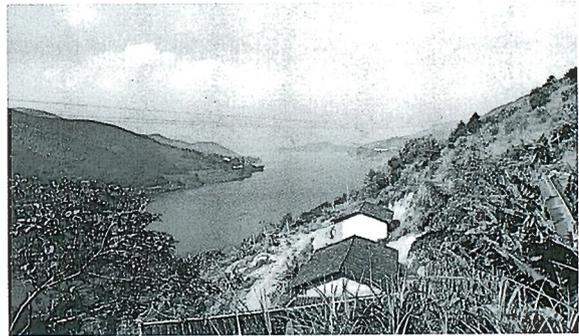


④

義窯湖里 ①②
義窯老猫坑 ③④



⑤



⑦



⑥

青窯窯隔 (手前は安仁溪) ⑤⑥



⑧

南平茶洋窯 ⑦⑧⑨
⑦ (窯跡より閩江を望む)



⑨

写真10 閩清窯・南平茶洋窯

琉球列島における出土状況

宮城弘樹

今帰仁村教育委員会

新里亮人

伊仙町教育委員会

MIYAGI Hiroki

Board of Education NAKIJIN Village

SHINZATO Akito

Board of Education ISEN Town

はじめに

琉球列島における、今帰仁タイプ、ビロースクタイプの分布や出土傾向を把握することを目的として、現在刊行されている報告書から対象資料の集成を行なった。集成の結果、琉球列島において両タイプの白磁を出土した遺跡は112遺跡（奄美諸島5遺跡、沖縄諸島75遺跡、宮古諸島10遺跡、八重山諸島22遺跡）であった。以下、これらの集成から判断される各諸島の出土傾向と琉球列島全域の消費状況について述べていきたい。なお、図1～6には、琉球列島各地で出土した両タイプの白磁碗を遺跡ごとに集成したが、これらの資料には既刊の調査報告書から転載したものと共同研究メンバーらによって実見、実測されたものを含んでいる。出土品の報告は沖縄、八重山諸島及び表の作成を宮城が、奄美諸島、宮古諸島を新里が担当した。

1. 集計の方法

まず、資料集成と遺物の集計について略記しておきたい。各報告書によって今帰仁タイプやビロースクタイプと判断できる分類を用いているものは集計のデータによって計数し、集計されていない場合は、図面などから掲載されている図面や写真を参考に判断した。また出土点数については不明なので、この場合は参考として図面の掲載数を出土数として計数している。このため実際の出土数は、これをはるかに上回ることが予測される。また、実資料を実見していないため、多少の誤認があるものと考えられる。精度については改めて実見し、再集計を行うなどの課題を残すものの、総じて全体的な出土傾向について抑えることができるものと考えられる。以下に奄美、沖縄、宮古、八重山の4つの島嶼群に分けて、資料の概略を述べたい。

2. 奄美諸島における出土状況（図1・表4）

資料集成の結果、奄美諸島においては今帰仁タイプの出土を確認することはできなかった。一方ビロースクタイプは、I類が徳之島川嶺辻遺跡で出土しており、II類とIII類は、奄美大島の喜瀬浦遺跡、喜界島川堀遺跡、徳之島川嶺辻遺跡、沖永良部島友竿遺跡など4遺跡（24点）で確認することができた。この中には共同研究者の実見によるものも含まれているが、破片数の集計が行なわれれば、実数は今後増加すると推定される。図1には、対象資料がまとまって出土している川嶺辻遺跡出土資料のビロースクタイプを掲載した。破片資料がほとんどで口径を復元できるものは少ないが、ある程度まとまった量の資料が得られている。総じて胎土は精良で、焼成も良い。青白色または灰白色の発色の良い透明釉が施釉されている。1はビロースクタイプI類の口縁部片である。細片のため、口径は復元できなかったが、胎土は精良で、釉の発色も良い。

2・3は同II類の口縁部である。両者とも口径の復元ができなかった。胎土は精良で、灰白色の釉が施された良質な資料である。

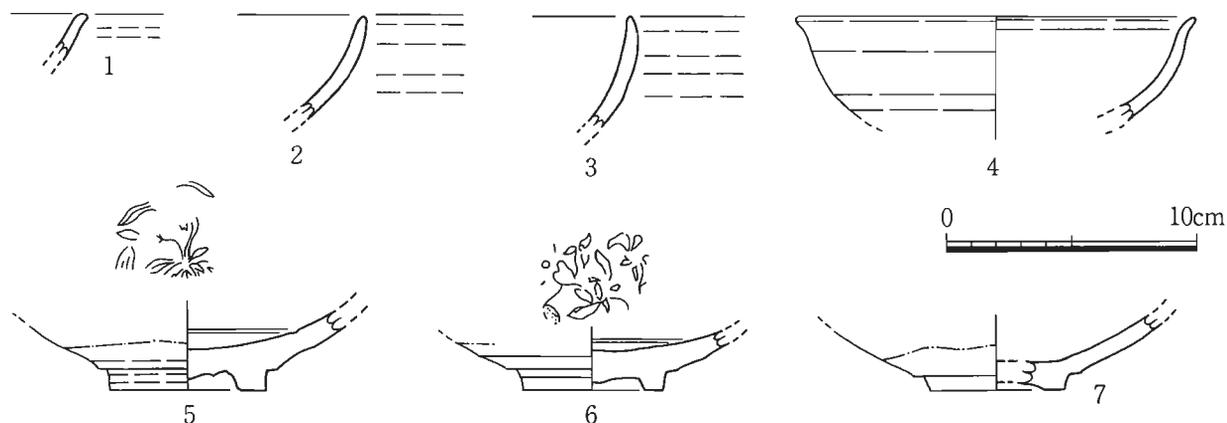


図1 奄美諸島出土品 (S = 1/3)
川嶺辻遺跡

4～7は同Ⅲ類である。5・6は内底に印花文に青白色透明釉が施されている。7は破片のため印花文が確認できないが見込み、高台の形状からビロースクタイプⅢに該当すると考えられる。

3. 沖縄諸島における出土状況 (図2～4・表5)

沖縄諸島における今帰仁タイプの出土は、既刊の報告書を参考に集成した結果12遺跡(114点)を確認することができた。一方ビロースクタイプの出土は、Ⅰ類が16遺跡(56点)、Ⅱ類が50遺跡(338点)、Ⅲ類が65遺跡(2,002点)を確認することができた。出土点数のうち今帰仁タイプ83点、ビロースクⅠ類10点、同Ⅱ145点、同Ⅲ1,544点は今帰仁城跡及び周辺遺跡における筆者実見の計数で、集計のおよそ半分を占めている。ただし、今帰仁城跡及び周辺遺跡のみにおいて多出していると理解するのは早計で、あくまでも集計方法の相違が反映されていることを記しておく。

さて、口縁部から底部まで観察できる良好な遺物を中心に確認していきたい。先ず今帰仁城跡から出土する今帰仁タイプを図2(8～17)、ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類を図2(20～31)、ビロースクタイプⅢ類を図3に図示した。また、図4に沖縄諸島で出土する主な今帰仁タイプ・ビロースクタイプの資料を既刊の報告書より転載した。

8～17は今帰仁タイプで、8・14は内底輪状釉剥ぎ、ほか内底露胎の資料である。いずれも灰白色の素地に灰緑色の薄い釉が施釉されている。また、釉調が類似するものとして、18の資料がある。今帰仁タイプに該当するものと従来考えてきたが、外底の削りなどに庄辺窯の特徴を認められるため今帰仁タイプとは別と考えたい。また19についても、釉調などから判断するとビロースクタイプに類似する点が認められるが、窯跡資料では同種の器形を確認することができなかった。一方庄辺窯には同種の器形が多数あり、これについても、暫定的ながら庄辺窯の可能性のある資料として図示し紹介する。

20～23はビロースクタイプⅠ類である。胎土は精良のものと焼成不良の陶胎のものが認められる。釉の発色は乳白色で発色は良い。20～22は内面にはいずれも櫛描文が施されている。24～31はビロースクタイプⅡ類に該当するものである。24は櫛描文によって蓮弁様の文様を施し、見込に卍を中央に配した印花文を施す。25～30は口縁部で内湾し、見込は凹み緩やかなカーブを描く。同種の底部に31のように、印花文の押印された資料を認めることがあるがこの種は稀である。

32～44はビロースクタイプⅢ類である。胎土はやや隙間が認められ粗いもの、焼成良好な磁質のものが見られる。いずれも灰白色半透明の釉が厚く施釉される。口縁部は外反し、平坦な見込みに印花

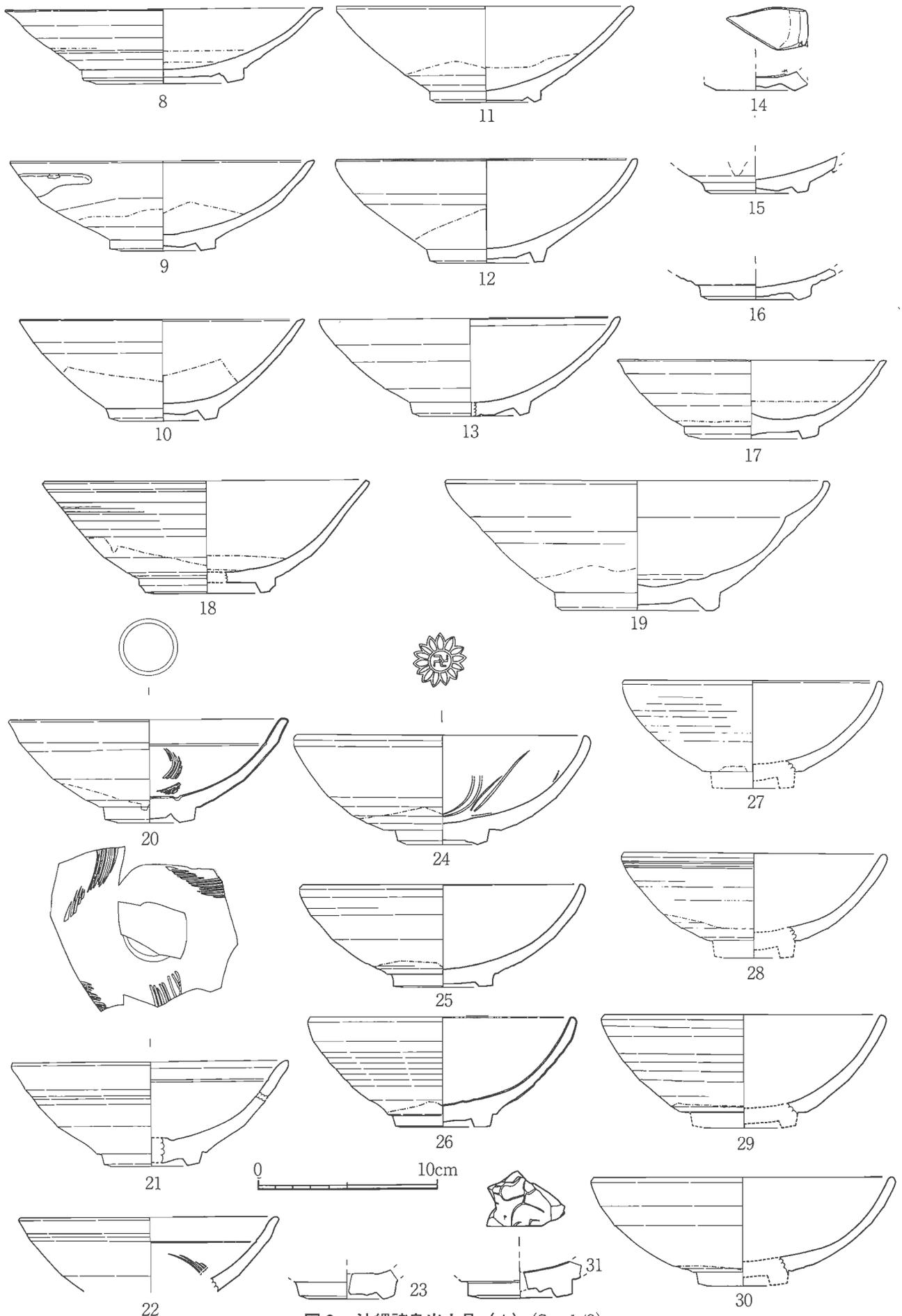


図2 沖縄諸島出土品(1) (S=1/3)
今帰仁城跡及び周辺遺跡

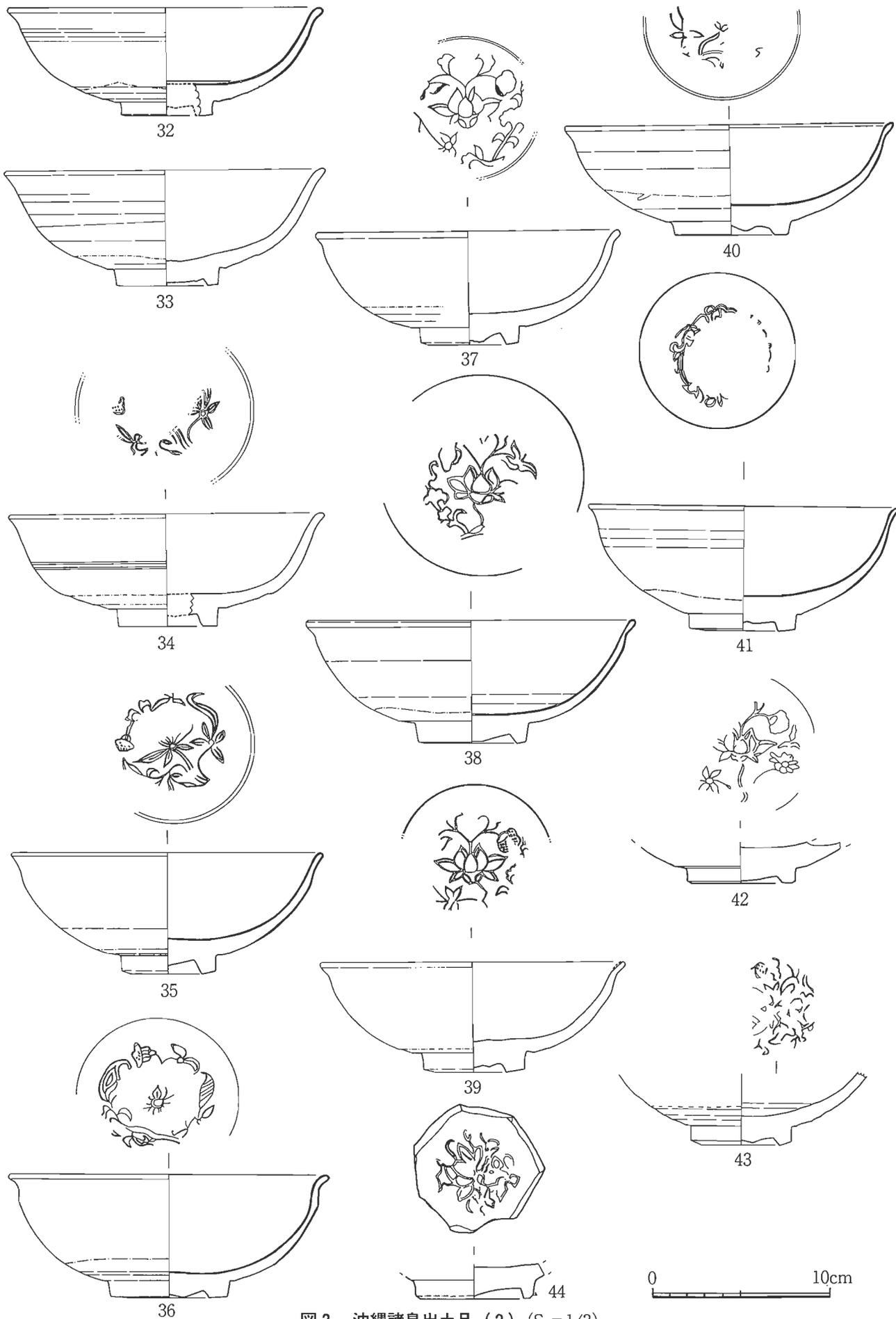


図3 沖縄諸島出土品(2) (S=1/3)
今帰仁城跡及び周辺遺跡

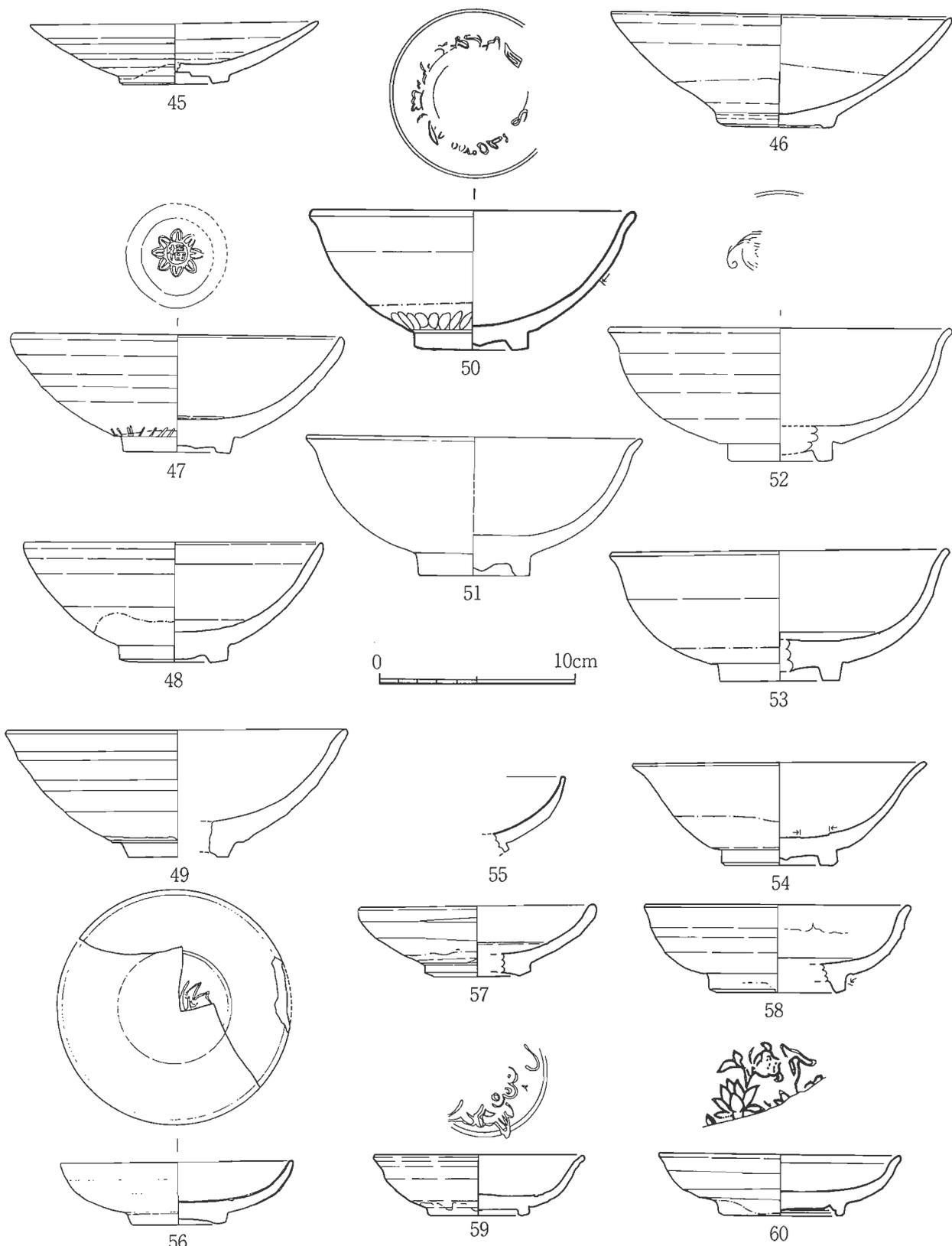


図4 沖縄諸島出土品(3) (S=1/3)

今帰仁タイプ：南風原古島遺跡(45)、ヒヤジョー遺跡(46)

ピロースクタイプⅡ類(碗)：屋良グスク(47)、南風原古島(48)、知花遺跡(49)

ピロースクタイプⅢ類(碗)：渡地村跡(50)、勝連城跡(51)、うるま市具志川グスク(52)、銘苅原遺跡(53)

ピロースクタイプⅡ類(皿)：北谷グスク(55)、稲福遺跡(56)、銘苅原遺跡(57)

ピロースクタイプⅢ類(皿)：銘苅原遺跡(58)、首里城跡(60)

参考資料：銘苅原遺跡(54)、久米島町具志川城遺跡(59)

文を明瞭に施すものが多い。32・33は印花文が見られない、もしくは不鮮明なもの。34～43はモチーフはいずれも花文と判断される資料。

図4は今帰仁城跡以外の沖縄諸島で出土する今帰仁タイプ、ビロースクタイプの主な資料である。全形が伺える資料を中心に掲載している。

45は南風原古島遺跡出土の薄手直口の浅皿である。報告者によれば粗製の皿で17世紀の中国産としており、今帰仁タイプとは異なる資料か判然としない。底部の造りなどに相違点も認められるため図示紹介に留める。46は銘苅原遺跡出土の今帰仁タイプで内底露胎とする。外底が地面に接するほど浅い削りである点など、今帰仁タイプに多く認められる特徴である。

47～49はビロースクタイプⅡ類。47は屋良グスク出土資料、福の字を中央に配した印花文が見込に施される。48は南風原古島遺跡出土、49は知花遺跡出土の資料でいずれも無文。

50～53はビロースクタイプⅢ類の資料。50は渡地村跡出土資料。見込が平坦にならず凹んでいるため印花文が中央で不鮮明になる。51は勝連城跡出土例。52はうるま市具志川城跡の出土例で底部中央が欠失するため見込の文様は不明だが印花文と考えられる。53・54は銘苅原遺跡出土の資料。53は見込文様が無文だが、典型的なビロースクタイプⅢ類。54は報告書では同種の分類となっているが、器形的な特徴に相違点がみられ、見込も輪状釉剥ぎを施すなど、いわゆる森田分類（森田1982）D群の碗とも推量される。参考資料として図示しておく。

55～57はビロースクタイプの内湾形の皿で、暫定的にⅡ類型の皿としておく。55は口径復元の困難な小片資料、北谷グスク出土。56は稲福遺跡出土の資料で外底面の削りは浅く円盤状高台となるのが特徴である。57は銘苅原遺跡出土資料で、やはり円盤状高台形となっている。

58～60はビロースクタイプの口縁外反形の皿で、暫定的にⅢ類型の皿としておく。58は銘苅原遺跡出土の資料。見込文様は欠失するためか認められない。59は久米島町具志川城跡の出土例で広い見込に印花文が施される森田D群。60は首里城跡出土例で、やはり見込には印花文が施されている。

4. 宮古諸島における出土状況（図5・表6）

既刊の報告書を参照した結果、宮古諸島においては、今帰仁タイプを7遺跡（12点）、ビロースクタイプⅠ類を4遺跡（8点）、同Ⅱ類を8遺跡（30点）、同Ⅲ類を7遺跡（20点）で確認することができた。図5には、2008年6月25日、26日に金武正紀と新里亮人が調査した宮古島市教育委員会保管資料を図示している。

61～70は住屋遺跡の出土品で、いずれも既報告の資料である。

61～63は今帰仁タイプで、61と63は内底輪状釉剥ぎ、63は内底露胎の資料である。いずれも灰白色の素地に灰緑色の薄い釉が施釉されている。

64、65はビロースクタイプⅠ類である。両者ともに胎土は精良で、釉の発色も良い。64は口縁部資料で、やや端反りになり内面に櫛描き文が施されている。65は同種の底部資料で、内面に櫛描文が描かれている。

66と67はビロースクタイプⅡ類である。いずれも胎土は精良で、緑白色半透明釉が施釉されている。66は全形の伺える無文の資料である。他の資料と比すると肉厚な印象を受ける。67は有文の資料である。内面にヘラ彫りによる蓮弁が描かれており、見込みには花文の中央に「福」の字を配した印花文が施されている。

68はビロースクタイプⅢ類である。胎土はやや粗く、隙間が多い。緑灰白色半透明釉が施釉されている。口縁部は外反し、平坦な見込み部には明瞭な印花文が施されている。

69と70は薄手直口碗として報告された資料であるが、ここで対象とした今帰仁タイプ、ビロースクタイプいずれとも判断しかねるものである。69の見込みが膨らむ形状はビロースクタイプI類に通じるところもあるが、器形、高台の形状、釉調はまったく異なる。70も見込みの形状はビロースクタイプI類と類似するが、丸みを帯びる高台の形状は異なるものである。両者ともに今回の分類からは除外されうる資料であるが、参考のために図示しておく。

71は尻川原遺跡から出土した今帰仁タイプで、内底を露胎とするものである。焼成はやや悪く、釉はあまり融けていない72は旧城辺町内の古墓（近世期の墓）で出土したとされるビロースクタイプII類である。素地は黄白色を呈し、胎土はやや粗い。釉は黄灰白色半透明で、気泡が多く入る。内面には貫入が多く認められる。

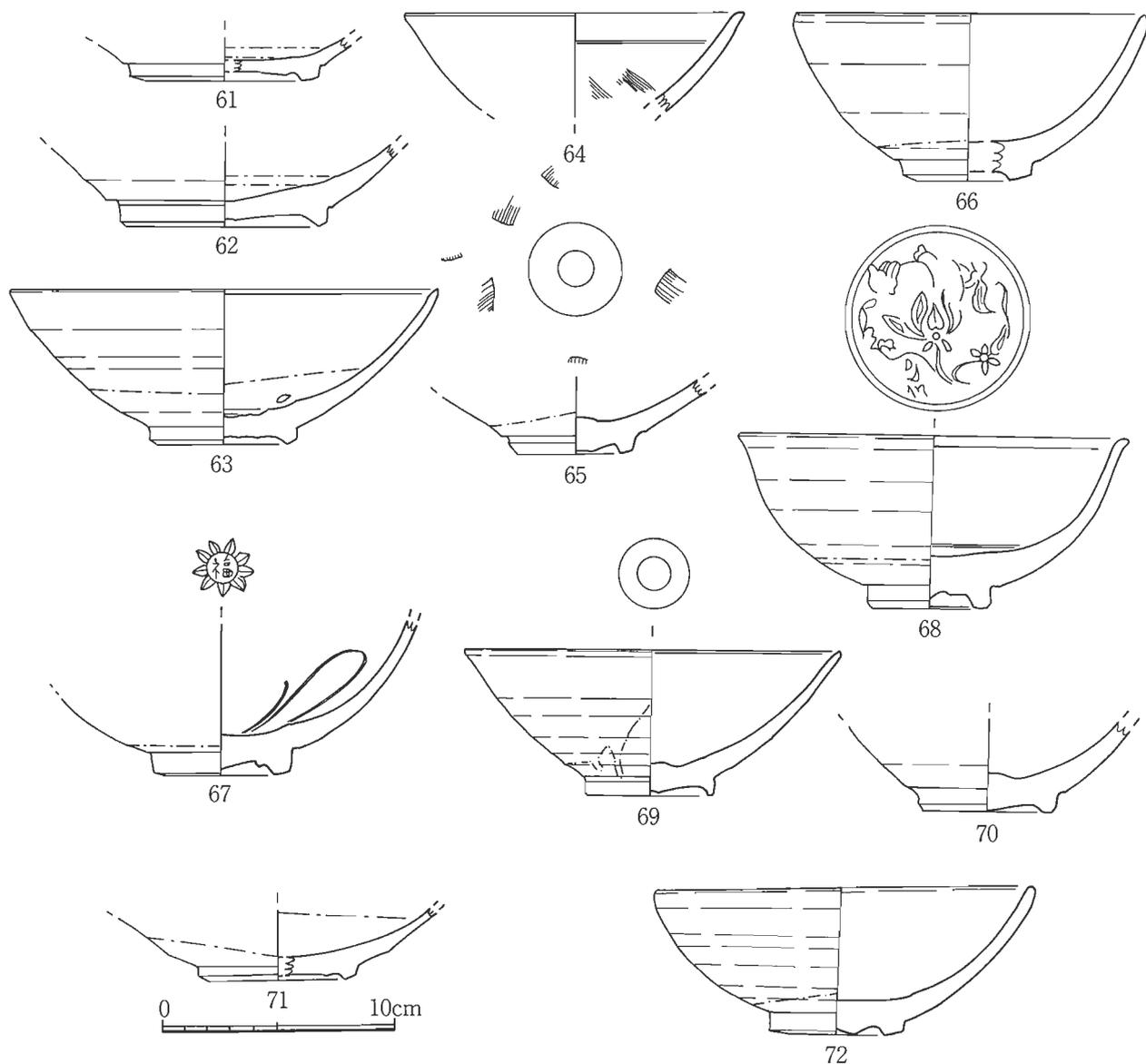


図5 宮古諸島出土品 (S = 1/3)
住屋遺跡(61~70)、尻川原遺跡(71)、旧城辺町内の古墓(72)

5. 八重山諸島における出土状況（図6・表7）

八重山諸島における今帰仁タイプの出土は、既刊の報告書を参考に集成した結果12遺跡（51点）を確認することができた。一方ピロースクタイプの出土は、Ⅰ類が8遺跡（16点）、Ⅱ類が13遺跡（123点）、Ⅲ類が17遺跡（111点）を確認することができた。

実物資料の確認を目的に2007年5月20日～21日にフルスト原遺跡等石垣市教育委員会保管の資料を実測した（図6）。またこの前に同年5月18日に沖縄県立埋蔵文化財センターの保管するカンドウ原遺跡、アラスク村遺跡、ウイヌスズ遺跡、竿若東遺跡、慶来慶田城遺跡、与那原遺跡、大泊浜貝塚、慶田崎遺跡の8遺跡の出土資料の資料も実施した。八重山の主要な遺物を図6に掲載した。

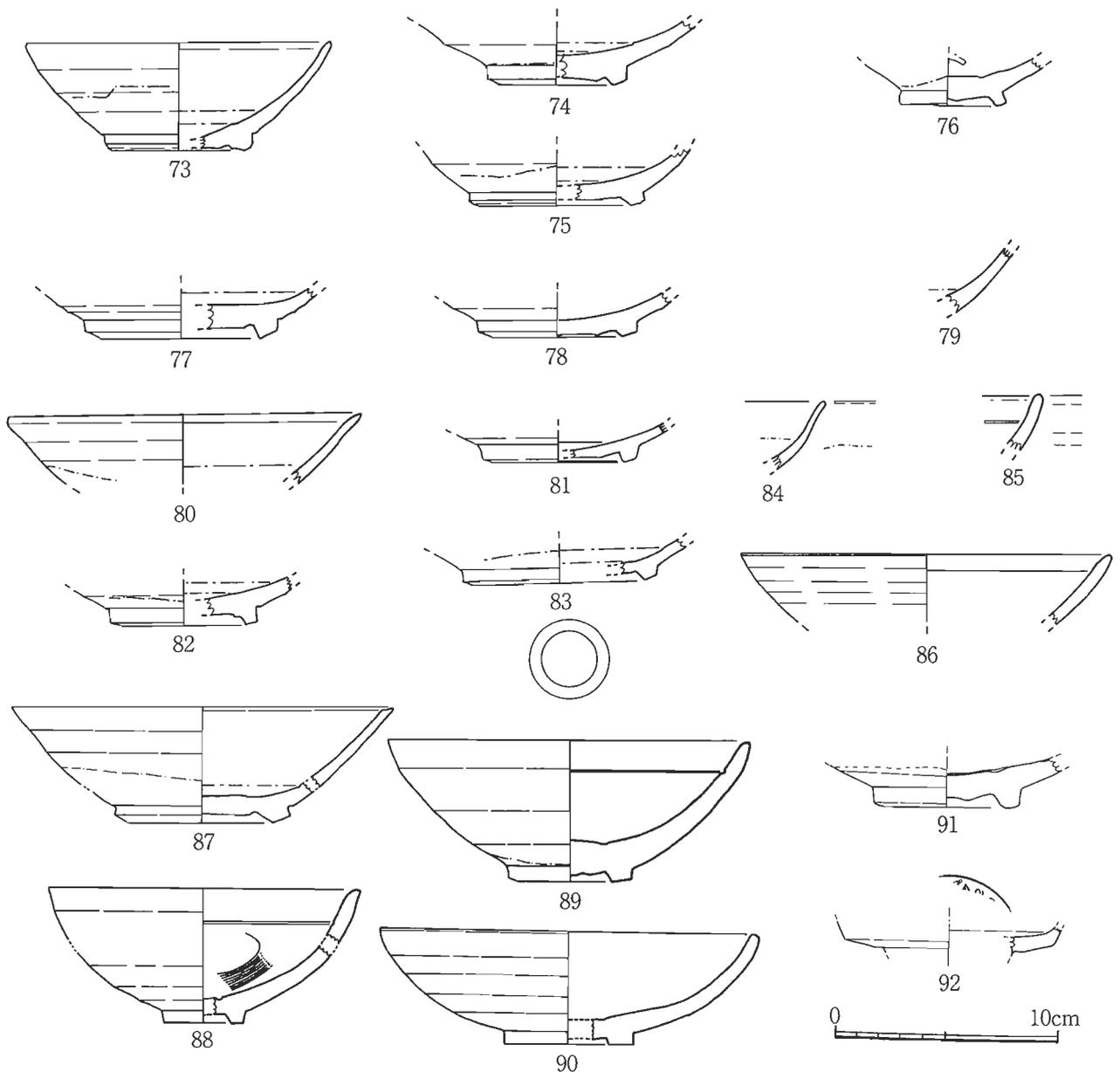


図6 八重山諸島出土品（S=1/3）

フルスト原遺跡(73～76)、ピロースク遺跡(77～79・87～90)、川原第1遺跡(80)
川花遺跡(81)、カンドウ原遺跡(82・83)、石垣貝塚(84)、藏元跡(85)、平川貝塚(86)
与那原遺跡(91～92)

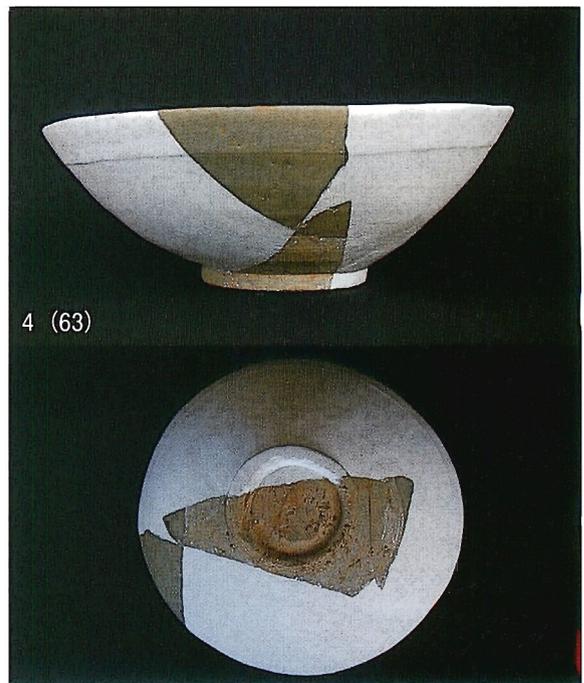
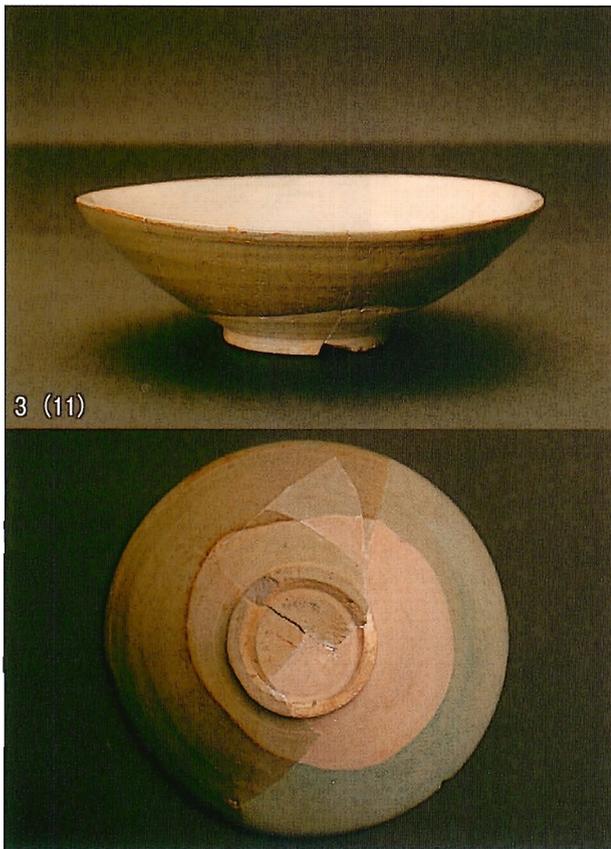
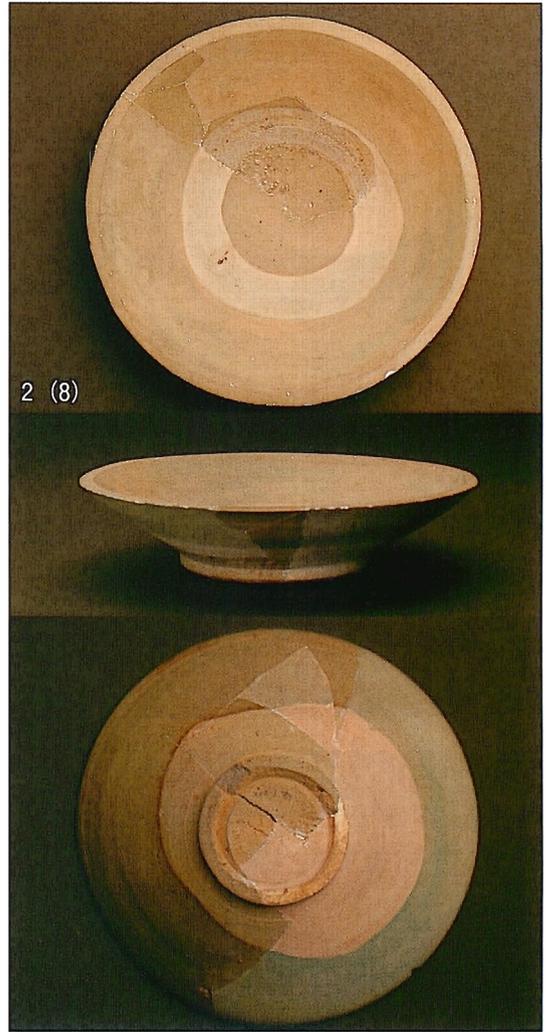
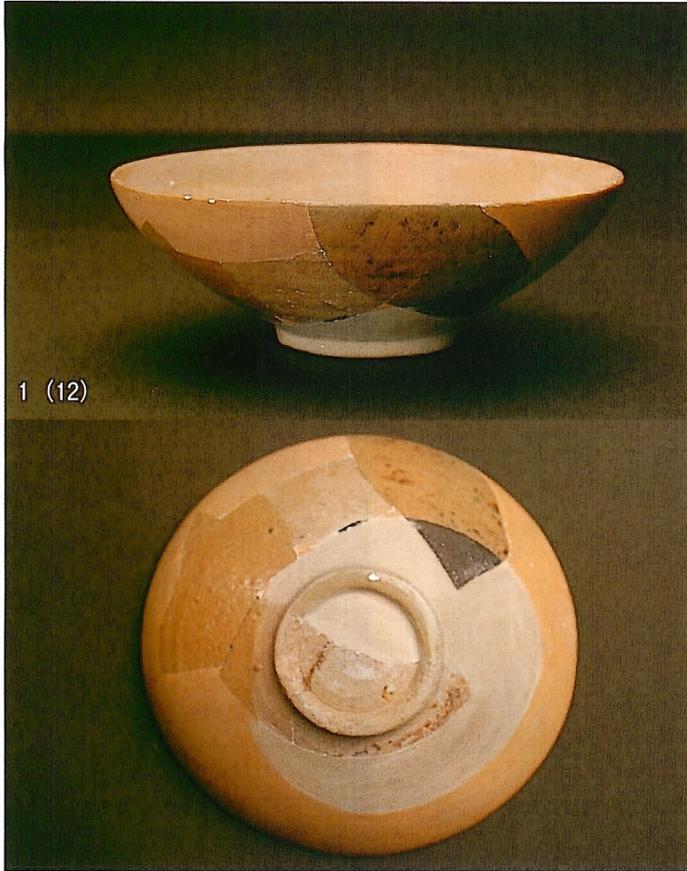
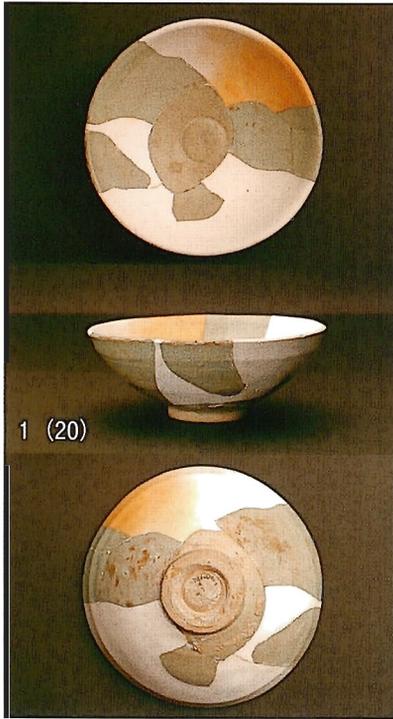


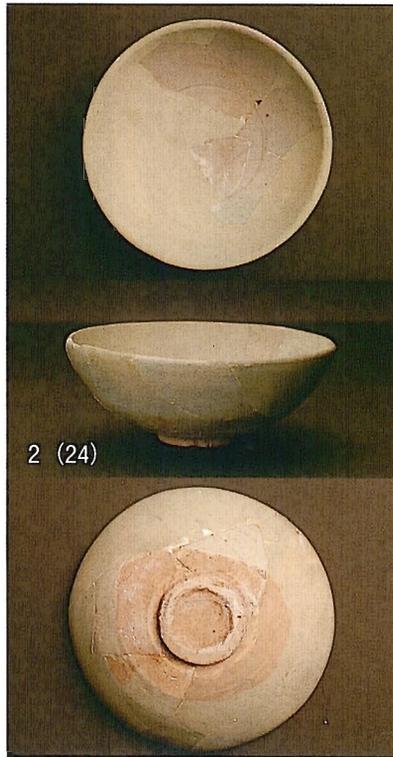
写真1 琉球列島出土の今帰仁タイプ

1～3 今帰仁城跡、4 住屋遺跡

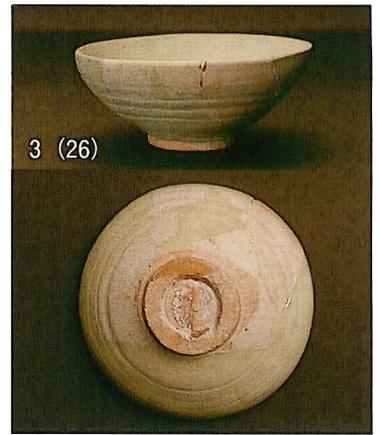
※ () 内は図番号



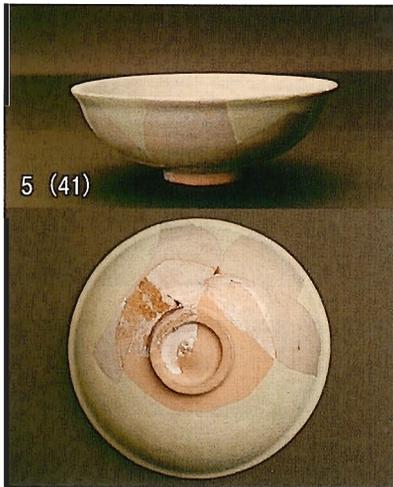
1 (20)



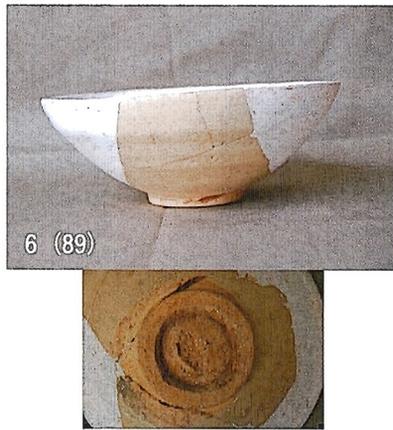
2 (24)



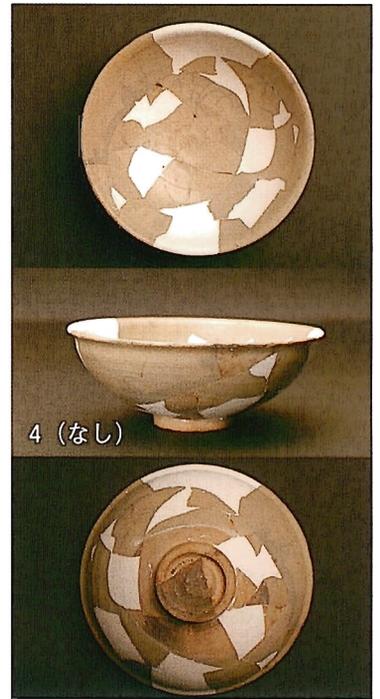
3 (26)



5 (41)



6 (89)



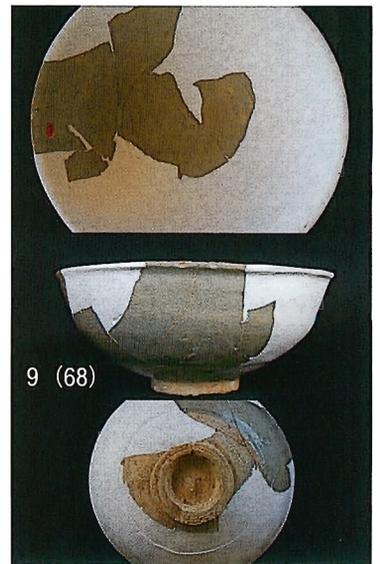
4 (なし)



7 (65)



8 (72)



9 (68)

写真2 琉球列島出土のピロースクタイプ

1～5 今帰仁城跡、6 ピロースク遺跡、7・9 住屋遺跡、8 旧城辺町内の古墓
※ () 内は図番号

73～76はフルスト原遺跡の出土資料で、73～75は今帰仁タイプいずれとも内底輪状釉剥ぎのタイプ。76はピロースクⅠ類の碗底部、内面に文様が描かれるがモチーフは不明。77～79はピロースク遺跡出土資料で、77・78は今帰仁タイプ。79はピロースクタイプの胴部片で、施釉後釉剥ぎを行っている特徴的なものである。後述するように同種のものが、与那原遺跡でも類品(91)が出土している。80は川原第1遺跡、81は川花遺跡、82・83はカンドウ原遺跡、84は石垣貝塚出土の今帰仁タイプ、薄手の口縁資料で、やや端反りになる特徴的な資料である。85は蔵元遺跡、86は平川遺跡出土のピロースクタイプで、いずれもⅠ類の口縁部資料である。

なお、参考に既刊の報告資料より転載して代表的な例を図示する。87～90はピロースク遺跡出土資料。87は薄手直口の資料で図上復元されたもの、口縁端部は平坦にし、見込は輪状釉剥ぎとなる今帰仁タイプ。88・89はピロースクⅠ類。90はピロースクⅡ類で、ピロースクタイプの標式資料として知られる。

91～92は与那国島与那原遺跡出土のピロースクタイプに類似する資料2例である。いずれも小片ながら、ピロースクタイプのバリエーションを伺う上で参考になるため図示した。91はピロースクタイプⅠ類に近似するが、見込を輪状釉剥ぎする点で異なっている。92は腰部に屈曲を認める資料で見込には印花文が施されているようである。同種のバリエーションは窯跡資料にも認められるため、今後当該資料が先島地域に限られたものか、宮古、沖縄島等においても認められるものか注視しておきたい。

6. 琉球列島における今帰仁タイプ白磁碗・ピロースクタイプ白磁碗の出土状況

今帰仁タイプ、ピロースクタイプのいずれかの資料が出土している遺跡は、奄美諸島5遺跡、沖縄諸島75遺跡、宮古諸島10遺跡、八重山諸島22遺跡で、最も遺跡数が多いのは沖縄諸島であった(表1)。この遺跡数の多寡は島の面積や、発掘調査件数、あるいは報告時における分類の精度によって影響されることが予測されるものの、少なくとも次の点を指摘することができる。

まず、現在のところ今帰仁タイプは奄美諸島では確認されておらず、その一方で沖縄諸島から先島諸島までの遺跡では多くの事例が確認されていることである(表2)。このことから今帰仁タイプ白磁碗は沖縄諸島から先島諸島で限定的に消費された陶磁器であったことがわかる。

次に、ピロースクタイプⅠからⅢ類は奄美諸島から先島諸島に至る広い範囲で確認されていることである。特に、ピロースクタイプⅢ類の碗は遺跡数、出土点数ともに最も多い。表2を見ても明らかなように今帰仁タイプ、ピロースクタイプⅠ、Ⅱ類と比べて、追隨を許さない程の圧倒的な量である。ピロースクタイプⅢ類は14世紀後半頃に位置付けられているので、(金武1988)三山と明が朝貢貿易を開始する時期の動向と関連した出土状況と推定される。さらに沖縄が先島地域等 비해輸入量、あるいは消費量が圧倒的に多いこともこのことを裏付けているのであろう。

それでは、今帰仁タイプやピロースクタイプⅠ・Ⅱ類についてはどうであろうか。数字の上では今帰仁タイプやピロースクタイプⅠ・Ⅱ類についても沖縄諸島が多いように見えるが、宮古諸島での10遺跡50点、先島諸島での22遺跡190点の出土遺跡数、出土量は見過ごせない数であると考えられる。

そこで、これら陶磁器類の数量を指数化して、相対的な搬入量の推移を島嶼別に見てみたい。指数の基準値をピロースクタイプⅡ類に設定し、その出土点数を「100」とした算出値を表3に示した。その算出値をもとに、今帰仁タイプ、ピロースクタイプの出土量を折れ線で表すと図7のようになる。これから以下の2点を指摘することができる。

一つ目は、各諸島ともピロースクタイプⅡ類はピロースクタイプⅠ類よりも多く出土する。ピロー

表1 出土遺跡数

	今帰仁 タイプ	ビロースク タイプ I	ビロースク タイプ II	ビロースク タイプ III
奄美諸島	0	1	2	5
沖縄諸島	12	16	50	65
宮古諸島	7	4	8	7
八重山諸島	12	8	13	17

表2 出土点数

	今帰仁 タイプ	ビロースク タイプ I	ビロースク タイプ II	ビロースク タイプ III
奄美諸島	0	1	3	21
沖縄諸島	114	56	338	2,002
宮古諸島	12	8	30	20
八重山諸島	51	16	123	111

表3 ビロースクⅡ類を100とした場合の指数値

	今帰仁 タイプ	ビロースク タイプ I	ビロースク タイプ II	ビロースク タイプ III
奄美諸島	0	33	100	700
沖縄諸島	34	17	100	592
宮古諸島	40	27	100	67
八重山諸島	41	13	100	90

※基準値

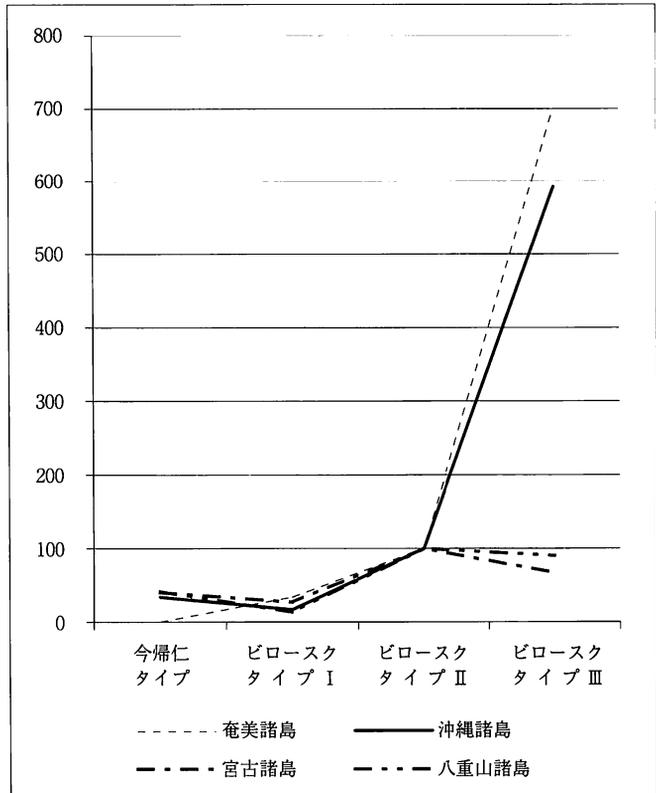


図7 各島毎の相対的な出土量

スクタイプⅡ類は各諸島で安定的に消費された白磁であると言える。

二つ目は、ビロースクタイプⅢ類は、奄美諸島、沖縄諸島では出土例が増加する一方、宮古諸島、八重山諸島では減少していく様子が読み取れる。このことからビロースクタイプⅢ類は沖縄諸島以北で多く消費され、とりわけ沖縄諸島での増加率が際立っていることがわかる。

7. 小結

以上、出土傾向を総括すると、

- ①今帰仁タイプの出土は奄美諸島では確認されず、沖縄諸島から先島諸島の遺跡で確認されている。
- ②今帰仁タイプ、ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は宮古・八重山諸島において比較的出土量が多い。
- ③ビロースクタイプⅢ類の出土は奄美諸島、沖縄諸島で増加する一方、先島は相対的に減少の一途をたどる。

以上のことから想定されるのは、今帰仁タイプ、ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は琉球列島において特徴的に出土する陶磁器であることは間違いがないが、琉球列島の南北で傾斜的な消費の様相が認められるといえる。

11世紀から13世紀中頃まで、貿易陶磁の基本的なセットは九州を介して琉球列島へと一貫してもたらされていたのに対し、九州以北ではほとんど出土例の無い「今帰仁タイプ」の出土をもって、先島諸島、沖縄諸島に独自の貿易陶磁の組み合わせが登場する。その特徴的な陶磁器である「今帰仁タイプ」は、出土遺跡数、出土量が調査例に比して先島諸島に多い傾向が認められる。これはいくつかの考え方が可能だが、日本を経由した搬入ルートから、先島諸島を経由した搬入ルートの検討という新たな交易・貿易ルートの問題についても考慮する必要があると考えられる。

いずれにせよ、今帰仁タイプを含む陶磁器のセットは日本列島においては、沖縄諸島及び先島諸島にのみ登場する特異なセットであることが言える。これに時間的に後続すると考えられるビロースクⅠ・Ⅱ類は先島諸島、沖縄諸島の特徴的なセットとなるが、奄美諸島でもこうした状況が把握されつつある。しかし今帰仁タイプ、ビロースクⅠ類の出土点数は、現状で把握できる数で100点程度であり、膨大・多量に出土しているという印象は無く、むしろ少ない点数だが沖縄－八重山において点々と出土しているという点に特徴がある。もちろんこれらの陶磁器を膨大に出土する局地的な遺跡が今後発見されないと限らない。

しかし現状では、これまで基本としていた日本を経由してもたらされた、あるいは日本側に貿易の拠点あるいは主導があった貿易システムの転換を遂げたのが、今帰仁タイプ・ビロースクタイプⅠ類が沖縄－先島に運ばれた時代であったと考えておきたい。更に、出土量が安定的になるのはビロースクⅡ類の段階を経て、圧倒的に増加するビロースクⅢ類が運ばれる頃であり、この頃に琉球列島の交易状況に大きな変化が起きたと推定することができる。即ち、琉球列島における中国貿易は今帰仁タイプ・ビロースクⅠ類の時期（13世紀後半～14世紀前半頃）に用意され、ビロースクⅡ類の時期（14世紀前半～中頃）に安定的となり、ビロースクⅢ類（14世紀中頃～15世紀初め）の時期に完成したものと考えられる。

文献

- 金武正紀 1988 「ビロースクタイプ白磁碗」『貿易陶磁研究』No. 8
- 金武正紀 2007 「今帰仁タイプ白磁碗」『南島考古』No. 26 沖縄考古学会
- 田中克子 1996 「博多遺跡群出土の内面露胎の磁器の一群について」『博多研究会誌』第4号 博多研究会
- 田中克子 2002 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）福建省江流域、及び以北における窯跡出土陶磁」『博多研究会誌』第10号 博多研究会
- 田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号 博多研究会
- 森本朝子・田中克子 2004 「沖縄出土の貿易陶磁の問題点—中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁—」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

表5-2 沖縄諸島における関連資料出土遺跡一覧

島名	番号	遺跡名	所在	調査地点等	浦口窯製品			関清窯									出典							
					今帰仁タイプ			ピロースクタイプ																
								碗Ⅰ			碗Ⅱ			碗Ⅲ				皿Ⅱ			皿Ⅲ			
					完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部		完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	
沖縄	22	中城城跡	中城村	北の郭西						1			3	3						38				
	23	新垣グスク	中城村	第1トレンチ							1										39			
				Aグリッド							1			1								40		
				Eグリッド											5								41	
				第2トレンチ											1								42	
				第3トレンチ								1			1								43	
	24	安仁屋トゥンヤマ遺跡	宜野湾市				1		2	1		5	2							44				
	25	伊佐前原遺跡	宜野湾市	県調査			8				2										45			
	26	真志喜ウンサクモ	宜野湾市				1						1	2							46			
	27	喜友名泉石畳道	宜野湾市							1											47			
	28	喜友名グスク	宜野湾市					2			13		29	5							48			
	29	宜野湾クシヌウタキ	宜野湾市									1			2						49			
	30	嘉数トゥンヤマ遺跡	宜野湾市				6		15					15	4						50			
	31	真志喜森川原第一遺跡	宜野湾市				2					7	1		12	2					51			
	32	嘉門貝塚	浦添市	A地点											1						52			
				B地点												1						53		
	33	親富祖遺跡	浦添市									3		3	2						54			
	34	浦添城跡	浦添市	A殿地区								1										55		
				SH01試掘							1	2		1									56	
				jh試掘					1															57
				SF01											2	1						1	58	
				コーグスク								1	1		2	1								59
				松林地区									1			1								60
	35	当山東原遺跡	浦添市	溜井東地										1	1							61		
																							62	
	36	浦添原遺跡	浦添市											2							63			
	37	城間遺跡	浦添市									1									64			
	38	拝山遺跡	浦添市	県調査									5	2		1						65		
				市調査		4	1		1		6	1		6	1								66	
	39	仲間遺跡	浦添市												1						67			
	40	我謝遺跡	西原町	個人住宅								1										68		
				分譲宅地									4	1		5	1						69	
	41	ヒヤジョー毛遺跡	那覇市				2	1				16	6		4	8					70			
	42	銘苅原遺跡	那覇市	区画整理								1	1	2	5	1	1	3		1	2	71		
				公園整備										3	1		1	1						72
	43	銘苅原南遺跡	那覇市												2							73		
	44	首里城跡	那覇市	御庭・奉神門											3	7						74		
				継世門												3	4						75	
				下之御庭												2	1						76	
				首里森御嶽												2								77
				城郭南側下												4								78
				東のアザナ										13	4		3	1						79
				御内原												3						1		80
				御内原西														1						81
				南殿北殿											1		5	1				1		82
				書院鎖之間													1	1						83
				上の毛					1								1							84
	45	綾門大道跡	那覇市	守礼門周辺											1	1						85		
	46	天界寺跡	那覇市	公園整備												1						87		
				街路整備					1						2	1							88	
				地下駐車場											1		1							89
				公園管理棟											1		3	1						90
	表5-2破片数小計					0	24	2	0	19	2	0	89	25	2	145	62	1	3	0	2	5	0	

表6 宮古諸島における関連資料出土遺跡一覧

島名	番号	遺跡名	所在	調査地点等	浦口窯製品																		出典
					今帰仁タイプ																		
					閩清窯																		
ピロースクタイプ																							
			碗Ⅰ			碗Ⅱ			碗Ⅲ			皿Ⅱ			皿Ⅲ								
			完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部			
宮古	1	住屋遺跡	宮古島市	市庁舎 範囲確認	1			1		1	1			1									135
	2	尻川遺跡	宮古島市		1								1			1							136
	3	尻並遺跡	宮古島市				1			2			1			4							137
	4	野城遺跡	宮古島市										1	1									138
	5	砂川元島遺跡	宮古島市				1						3			2	3						140
	6	高腰遺跡	宮古島市				5	1		2	1	1	4	5			1						141
	7	宮国元島	宮古島市													2						142	
	8	新里元島上方台地遺跡	宮古島市				1			1			5	1		1	4		1			1	143
	9	旧城辺町の古墓	宮古島市									1											143
多良間	10	多良間添道遺跡	多良間村																		144		
宮古諸島	破片数小計				2	7	3	1	4	3	3	18	9	1	8	11	0	1	0	0	1	0	
	破片数合計				12			8			30			20			1			1			
	遺跡数				7			4			8			7			1			1			

表7 八重山諸島における関連資料出土遺跡一覧

島名	番号	遺跡名	所在	調査地点等	浦口窯製品																		出典
					今帰仁タイプ																		
					閩清窯																		
ピロースクタイプ																							
			碗Ⅰ			碗Ⅱ			碗Ⅲ			皿Ⅱ			皿Ⅲ								
			完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部	完形	口縁	底部			
石垣	1	蔵元跡	石垣市													1							145
	2	喜田盛遺跡	石垣市													1							146
	3	平川貝塚	石垣市					1					1			6	1						147
	4	フルスト原遺跡	石垣市	1977報告													2						148
				実見資料																			149
				1984報告	1	2	1																150
	5	桃里恩田遺跡	石垣市										5			1							151
	6	アラスク村遺跡	石垣市										1			1							152
	7	ウイヌズ遺跡	石垣市																				153
	8	竿若東遺跡	石垣市							1			1	2			5						154
	9	ピロースク遺跡	石垣市				1	3		2	2		9	2		3	1						155
	10	仲筋貝塚	石垣市													1							156
	11	石垣貝塚	石垣市																				157
	12	カンドウ原遺跡	石垣市							2			6	2		4	3						158
	13	川原第一遺跡	石垣市																				159
14	川花遺跡	石垣市																				159	
15	富野岩陰遺跡	石垣市										1	1									160	
竹富	16	新里村遺跡	竹富町	東遺跡			2	3					11	2		1							161
				西遺跡			2	10			1	1	40	19		38	10						162
西表	17	上村遺跡	竹富町													1	1						163
	18	与那良遺跡	竹富町																				164
与那国	19	慶来慶田城遺跡	竹富町	I地区			1							1		1	2						165
				II地区									1	1									166
	20	慶田崎遺跡	与那国町				4	7		2	3		5	4		9	3						167
	21	島仲村跡遺跡	与那国町					1															168
	22	与那原遺跡	与那国町				4	8		1			6	2		8	7						169
八重山諸島	破片数小計				2	18	31	2	9	5	0	86	37	0	75	36	0	0	0	0	0	0	
	破片数合計				51			16			123			111			0			0			
	遺跡数				12			8			13			17			1			1			

表8 琉球列島における関連資料出土遺跡一覧

琉球列島	破片数総計				12	105	60	5	48	28	11	370	115	22	1,753	379	2	6	0	4	14	3	
	総計				177			81			496			2,154			8			21			
	遺跡数				31			29			73			94			5			9			

表4～表8 文献と出典頁(1)

文献	報告文献	報告書掲載箇所 今=今帰仁タイプ ビ=ビロースクタイプ
1	※田中克子氏実見	-
2	喜界町教委 1987『ハンタ遺跡』	p. 111 : 4図67
3	池畑耕一2009「喜界島の古代・中世遺跡」『古代中世の境界領域』高志書院	p. 242 : 2図
4	※筆者(新里)実見集計	-
5	※筆者(宮城)実見	-
6	伊是名村教委 1980『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』村報告5	p. 66 : 3図11~13, 16, 17
7	今帰仁村教委 1983『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』村報告9	※筆者(宮城)集計
8	今帰仁村教委 1991『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』村報告14	※筆者(宮城)集計
9	今帰仁村教委 2005『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』村報告20	※筆者(宮城)集計
10	今帰仁村教委 2005『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』村報告20	※筆者(宮城)集計
11	今帰仁村教委 2007『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』村報告24	※筆者(宮城)集計
12	今帰仁村教委 2005『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』村報告20	※筆者(宮城)集計
13	今帰仁村教委 2005『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』村報告20	※筆者(宮城)集計
14	今帰仁村教委 2008『今帰仁城跡発掘報告Ⅲ』村報告25	※筆者(宮城)集計
15	今帰仁村教委 2005『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』村報告20	※筆者(宮城)集計
16	今帰仁村教委 2005『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』村報告20	※筆者(宮城)集計
17	今帰仁村教委 2008『今帰仁城跡発掘報告Ⅲ』村報告25	※筆者(宮城)集計
18	今帰仁村教委 2004『シイナグスク』村報告17	p. 32 : 図18-17
19	名護市教委 1988『フガヤ遺跡・田井等遺跡・羽地間切番所遺跡・仲尾次上グシク遺跡』市報告8	p. 85 : 図11-2
20	宜野座村教委 1990『漢那ウェヌアタイ遺跡』村報告9	pp. 40-41 : 171図6, 11~20, 18図11
21	石川市教委 2003『伊波城跡』市報告5	p. 27, 29 : 16図5~11, 17図13~18
22	うるま市教委 2006『真志川グスクⅠ』市報告4	p. 76, 80 : 53図-12~15, 54図
23	勝連町教委 1984『勝連城跡』町報告6	p. 47 : 30図5, 8, 9, 11, 12
24	琉球政府文化保護委員会 1965『琉球文化財調査報告書』琉球政府	p. 40 : 27図
25	勝連町教委 1984『勝連城跡』町報告6	p. 137 : 55図4~9, 11, 12
26	うるま市教委 2008『国指定史跡勝連城跡環境整備事業報告書Ⅳ』市報告6	p. 109 : 16図12, 13
27	勝連町教委 1983『勝連城跡』町報告5	p. 51 : 25図1, 2, 4, 6
28	勝連町教委 2001『町内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』町報告21	p. 28 : 15図5, 6
29	うるま市教委 2008『南風原古島遺跡』市報告5	p. 12 : 12図11, 12 (図12-17今類品?)
30	勝連町教委 1991『平敷屋古島遺跡発掘調査報告書』町報告13	p. 74 : 38図13~15 (不明底部3点)
31	沖縄県教委 1996『平敷屋トウバル遺跡』県報告125	p. 139 : 65図2
32	読谷村教委 1986『座喜味城跡環境整備報告書Ⅱ』	p. 59 : 8図58
33	嘉手納町教委 1994『屋良グスク』町報告1	p. 61, 62 : 21図8~10, 11~19, 22図
34	北谷町教委 1985『北谷城北谷城第1次調査』町報告1	p. 18 : 10図2
35	北谷町教委 1985『北谷城北谷城第7次調査』町報告12	p. 28 : 9図27, 29
36	北谷町教委 1985『北谷城第7遺跡』町報告2	p. 20 : 10図11, 12
37	北谷町教委 1993『玉代勢原遺跡』町報告13	p. 35 : 19図13
38	北谷町教委 1997『後兼久原遺跡発掘展』	p. 133 : 79 図 51 ~ 53, 58 ~ 66, 80 図 68, 69, 72, 73, 76
39	沖縄県立埋文センター 2004『後兼久原遺跡』県報告22	p. 90, 91 : 43図17~19, 44図20, 21
40	沖縄県教委 1980『仲宗根遺跡』県報告33	p. 110 : II - 7図3, 5, 6
41	沖縄県市教委 1988『越来城』市報告11	p. 90 : 33図2~7, 11, 13~15
42	沖縄県教委 1978『知花遺跡群』県報告16	p. 126 : III - 13図10~14
43	中城村教委 2002『中城城跡』村報告4	p. 59 : 25図2, 4, 7~10, 12
44	中城村教委 2007『新垣グスク』村報告9	p. 25 : 14図6
45	中城村教委 2007『新垣グスク』村報告9	p. 44 : 22図2, 3
46	中城村教委 2007『新垣グスク』村報告9	p. 45 : 45図1~5
47	中城村教委 2007『新垣グスク』村報告9	p. 40 : 20図1
48	中城村教委 2007『新垣グスク』中城村の文化財9	p. 63 : 33図9, 10
49	沖縄県教委 1992『安仁屋トウンヤマ遺跡』県報告105	p. 37 : 15図8~10, 12~19
50	宜野湾市教委 1993『伊佐前原遺跡』市報告17	
51	沖縄県立埋文センター 2001『伊佐前原第一遺跡』埋文報告4	p. 59 : 34図24~29 (今=要確認)
52	宜野湾市教委 2002『真志喜ウンサクモ』市報告33	p. 40 : 12図1~4 (今=要確認)
53	沖縄県教委 2000『喜友名泉石畳道・喜友名山川原丘陵古墓群・伊佐前原古墓群』県報告137	p. 22 : 10図1
54	沖縄県教委 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク』県報告134	p. 64, 65 : 26図10~14, 27図19~23
55	宜野湾市教委 1997『宜野湾クシヌウタキ』市報告25	p. 66 : 27図32~34
56	宜野湾市教委 2008『嘉数トウンヤマ遺跡Ⅰ』市報告43	p. 34 : 18図3~12 (今, ビの分類は報告書分類に従うが要確認)
57	宜野湾市教委 1994『真志喜森川原遺跡』市報告18	p. 140, 141 : 48図6~22, 49図34~37
58	浦添市教委 1991『嘉門貝塚A』市報告18	p. 76 : 44図10
59	浦添市教委 1993『嘉門貝塚B』市報告21	p. 114 : 60図5
60	浦添市教委 1983『親富祖遺跡』市報告3	p. 38, 41 : 16図4~9, 17図5, 6
61	浦添市教委 1983『浦添城跡発掘調査報告書』市報告9	p. 16 : 5図21
62	浦添市教委 1983『浦添城跡発掘調査報告書』市報告9	p. 29 : 11図4~7
63	浦添市教委 1983『浦添城跡発掘調査報告書』市報告9	p. 61 : 23図23

表4～表8 文献と出典頁(2)

文献	報告文献	報告書掲載箇所
		今=今帰仁タイプ ビ=ビロースクタイプ
64	浦添市教委 1983『浦添城跡発掘調査報告書』市報告9	p. 70 : 28図13～15
65	浦添市教委 1983『浦添城跡発掘調査報告書』市報告9	p. 81 : 33図1～3, 5, 6
66	浦添市教委 1983『浦添城跡発掘調査報告書』市報告9	p. 105 : 43図1, 2
67	浦添市教委 1983『浦添城跡発掘調査報告書』市報告9	p. 116 : 48図1, 2, 5
68	浦添市教委 2003『当山東原遺跡』市33	p. 80 : 69図1～5
69	浦添市教委 2005『当山東原遺跡』市報告	p. 89 : 89図122, 123
70	浦添市教委 1992『城間遺跡』市報告19	p. 71 : 図29図1
71	沖縄県教委 1987『拜山遺跡』市報告83	p. 64, 23
72	浦添市教委 2007『市内遺跡発掘調査報告書(1)』市報告	p. 12 : 12図2～9
73	浦添市教委 2007『市内遺跡発掘調査報告書(1)』市報告	p. 87 : 46図16
74	西原町教委 1983『我謝遺跡』町報告4	p. 39 : 26図22
75	西原町教委 1983『我謝遺跡』町報告5	p. 121, 122 : 52図, 53図1, 2
76	那覇市教委 1994『ヒヤジョー毛遺跡』市報告26	p. 17, 18 : 17図5～11, 18図1～5
77	那覇市教委 1997『銘苺原遺跡』市報告35	p. 42, 44 : 19図1, 2, 6～13, 20図1～3, 6～8 (薄手直口碗は庄辺窯と判断)
78	那覇市教委 2002『銘苺原遺跡』市報告53	p. 15 : 8図2～6, 8
79	那覇市教委 2002『銘苺原遺跡』市報告54	p. 9 : 5図9, 10
80	沖縄県教委 1998『首里城跡』県報告133	p. 47 : 22図2～4, 11～17
81	沖縄県立埋文センター 2001『首里城跡』埋文報告1	p. 44 : 16図1～8
82	沖縄県立埋文センター 2001『首里城跡』埋文報告3	p. 37 : 24図4, 5, 7
83	沖縄県立埋文センター 2008『首里城跡』埋文報告47	p. 35 : 23図1, 2
84	沖縄県立埋文センター 2004『首里城跡』埋文報告19	p. 36 : 16図2
85	沖縄県立埋文センター 2004『首里城跡』埋文報告20	p. 43 : 18図1～4, 10, 11
86	沖縄県立埋文センター 2006『首里城跡』埋文報告34	p. 46 : 35図3～5, 17
87	沖縄県立埋文センター 2007『首里城跡』埋文報告44	p. 70 : 48図312
88	沖縄県教委 1995『首里城跡』県報告120	p. 91, 126 : 40図2～4, 7, 58図1～4
89	沖縄県立埋文センター 2005『首里城跡』埋文報告第28集	p. 18, 98 : 17図10, 110図82
90	沖縄県立埋文センター 2005『首里城跡』埋文報告第27集	p. 28 : 9図1, 2
91	沖縄県立埋文センター 2003『首里城跡』埋文報告14集	p. 31 : 16図1, 2
92	沖縄県立埋文センター 2003『綾門大道跡』埋文報告13集	p. 136 : 107図1, 3
93	那覇市教委 2000『天界寺跡』市報告43	p. 40 : 25図2
94	那覇市教委 2000『天界寺跡』市報告42	p. 24, 28, 37 : 18図1, 22図2, 24図3, 6, 7
95	沖縄県立埋文センター 2002『天界寺跡(Ⅰ)』埋文報告2	p. 45 : 26図6, 10 (ビII円盤状高台「寿」字押印)
96	沖縄県立埋文センター 2002『天界寺跡(Ⅱ)』埋文報告8	p. 44, 45 : 21図3～6, 22図10
97	沖縄県立埋文センター 2007『真珠道跡(Ⅱ)』埋文報告42	p. 24 : 7図1
98	那覇市教委 1991『御細工所跡』市報告18	p. 29 : 11図4, 5
99	那覇市教委 1993『尻川原遺跡』市報告24	p. 23 : 7図2～4
100	那覇市教委 1995『牧志御願東方遺跡』市報告28	p. 26 : 12図1, 2
101	那覇市教委 1997『識名シーマ御嶽遺跡』市報告34	p. 35 : 18図5～7
102	那覇市教委 2001『識名シーマ御嶽遺跡』市報告49	p. 19 : 8図1～3, 5, 6
103	那覇市教委 1999『ハナグスク』市報告41	p. 18 : 9図1, 2
104	沖縄県立埋文センター 2007『渡地村跡』埋文報告46	p. 18 : 62図4
105	那覇市教委 2003『銘苺直祿原遺跡』市報告57	p. 17 : 8図2～5
106	与那原町教委 1996『与那原町の遺跡』町報告1	p. 74 : 19図2
107	豊見城市教委 2008『瀬長グスク他範囲確認調査報告書』市報告8	p. 117 : 76図65, 66
108	豊見城市教委 1990『高嶺古島遺跡』村報告4	p. 62, 64 : 19図2～10, 20図23, 24
109	豊見城市教委 2003『宜保アガリヌ御嶽』村報告6	p. 39 : 18図3～5, 8～10
110	南風原町教委 2005『津嘉山古島遺跡・仲間村跡A地点・仲間村跡B地点・津嘉山クボ遺跡』町報告4	p. 35 : 14図1, 3, 4
111	南風原町教委 2005『津嘉山古島遺跡・仲間村跡A地点・仲間村跡B地点・津嘉山クボ遺跡』町報告4	p. 162 : 48図3, 9
112	南風原町教委 1996『クニンドー遺跡』町報告	p. 91 : 27図7
113	南風原町教委 1997『クニンドー遺跡(Ⅱ)』町報告	p. 29 : 10図4～9
114	佐敷町教委 1980『佐敷グスク』	p. 49, 50 : 26図4～9, 27図1～3
115	佐敷町教委 2000『佐敷町の文化財-遺跡詳細分布調査報告書-』町報告2	p. 57, 64 : 20図8, 11, 23図5, 7
116	南城市教委 2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書』市報告1	p. 22 : 14図3, 4
117	南城市教委 2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書』市報告1	p. 37 : 25図8, 9
118	南城市教委 2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書』市報告1	p. 48 : 35図14
119	南城市教委 2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書』市報告1	p. 58 : 42図23
120	南城市教委 2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書』市報告1	p. 62 : 45図7
121	南城市教委 2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書』市報告1	p. 73 : 54図4
122	南城市教委 2006『佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書』市報告1	p. 82 : 61図1
123	沖縄県教委 1983『稲福遺跡発掘調査報告書』県報告50	p. 36 : 14図12～20, 23～33
124	大里村教委 1998『大里城跡』村報告3	p. 46 : 25図26～29
125	大里村教委 1998『大里城跡』村報告3	p. 59 : 29図3, 11
126	大里村教委 1998『大里城跡』村報告3	p. 63 : 32図4

表4～表8 文献と出典頁(3)

文献	報告文献	報告書掲載箇所 今=今帰仁タイプ ビ=ビロースクタイプ
128	大里村教委 1998『大里城跡』村報告3	p. 81, 82 : 43図22, 44図6
129	大里村教委 1998『大里城跡』村報告3	p. 100 : 55図1, 2
130	大里村教委 2001『大里城跡』村報告4	p. 21 : 9図15
131	大里村教委 2001『大里城跡』村報告4	p. 45 : 19図5
132	玉城村教委 1991『糸数城跡』村報告1	p. 91 : 14～21 (集計: 今18点、ビI・II類21点、ビIII類141点)
133	沖縄県教委 1986『伊原遺跡』県報告73	p. 35 : 16図3～5
134	沖縄県教委 1983『阿波根古島遺跡』県報告96	p. 60 : 18図10, 11, 18, 19
135	糸満市教委 1994『佐慶グスク・山城古島遺跡』市報告8	p. 69, 70 : 26図5～9, 14～17, 27図18, 19, 26
136	糸満市教委 1994『佐慶グスク・山城古島遺跡』市報告8	p. 133 : 62図6
137	糸満市教委 1995『里東原遺跡』市報告10	p. 41 : 17図6, 11 (類品あるが図からは不詳)
138	糸満市教委 1996『真栄里貝塚ほか発掘調査報告』市報告12	p. 62 : 28図15
139	糸満市教委 2007『大里前原遺跡』市報告21	p. 36 : 17図1, 2, 5
140	久米島町教委 2005『具志川城跡発掘調査報告書I』町報告2	p. 52 : 24図7, 9
141	平良市教委 1999『住屋遺跡(I)』平良市報告4	p. 90 : 49図103～105, 50図107 (※報告(101)は浦口窯製品とは異なる)
142	平良市教委 1983『住屋遺跡(俗称・尻間)発掘調査報告』	p. 21 : 2図1～4
143	平良市教委 2003『尻川遺跡』市報告5	p. 63 : 24図1～4, 6～9
144	沖縄県立埋文センター 2003『尻並遺跡』埋文報告15	p. 22 : 14図1, 2
145	城辺町教委 1987『大牧遺跡・野城遺跡』村報告2	p. 61 : 20図1～6
146	城辺町教委 1989『砂川元島』村報告4	p. 23 : 12図2～4, 8～13
147	城辺町教委 1989『高腰城跡』村報告5	p. 42, 43, 46 : 20図6～13, 21図1～11, 23図11 (図中に類するものまだ有り)
148	上野村教委 1980『宮国元島』	p. 74 : 33図12, 13
149	沖縄県立埋文センター 2002『新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡』埋文報告7	p. 49 : 22図3, 9～14, 18～22, 24～26
150	多良間村教委 1996『多良間添道遺跡』村報告11	
151	石垣市教委 1997『蔵元跡発掘調査報告書』市21	p. 46 : 14図3
152	石垣市教委 2006『喜田盛遺跡』市報告28	p. 79 : 23図30
153	石垣市教委 1993『平川貝塚』市報告18	p. 80 : 47図
154	石垣市教委 1977『フルスト原遺跡』市報告1	p. 62
155	石垣市教委 1984『フルスト原遺跡発掘調査報告書』市報告7	p. 29 : 5図5～8
156	石垣市教委 1982『桃里恩田遺跡』市報告5	p. 13 : 4図1～6
157	沖縄県教委 1985『アラスク村跡遺跡・ウイヌズ遺跡発掘調査報告書』県報告62	p. 22 : 12図2, 19 (※他にも類品有り。掲載図からは不明。)
158	沖縄県教委 1985『アラスク村跡遺跡・ウイヌズ遺跡発掘調査報告書』県報告62	p. 44 : 25図に類品有り。掲載図からでは不詳のため計数不明とした。
159	沖縄県教委 1978『竿若東遺跡緊急発掘調査報告書』県報告13	p. 44 : 10図9～17
160	石垣市教委 1983『ビロースク遺跡』市報告6	p. 48, 49 : 13図5～13, 14図1～12 (集計数の部位は不明、計数ビI 13, II 73, III 24)
161	同遺跡調査団 1979『仲筋貝塚発掘調査報告』	p. 22 : 11図1
162	石垣市教委 1993『石垣貝塚』市報告17	p. 147, 149
163	沖縄県教委 1984『カンドウ原遺跡』県報告58	p. 55, 56 : 23図3～14, 24図1～5
164	石垣市教委 2000『石垣島の岩陰遺跡』市報告25	p. 86 : 16図7, 9, 10
165	沖縄県教委 1990『新里村遺跡』県報告97	p. 46 : 16図8～10, 12～15
166	沖縄県教委 1990『新里村遺跡』県報告97	p. 158, 160 : 51図6～13, 52図1～11
167	沖縄県教委 1991『上村遺跡』県報告98	p. 32 : 11図1, 5
168	与那良遺跡調査団 1982『与那良遺跡発掘踏査概報』	p. 12 (写真の為に不詳数点あり)
169	沖縄県教委 1997『慶来慶田城遺跡』県報告131	p. 36 : 15図2, 4～7
170	沖縄県教委 1997『慶来慶田城遺跡』県報告131	p. 104 : 60図1, 2
171	与那国町教委 1988『慶田崎遺跡』村報告1	pp. 48～50 : 16～18図 (今には一部庄辺窯のものを含む?)
172	与那国町教委 2002『島仲村跡遺跡』町報告3	p. 25 : 10図7
173	与那国町教委 1988『与那原遺跡』村報告2	pp. 87～89 : 28～29図, 30図24～36 (今には一部庄辺窯のものを含む?)

備考

※報告文献名は発行編集者名・発行年・書名・シリーズ番号の順で記している。「教委」は教育委員会の略記。「埋文」は埋蔵文化財センターの略記。市・町・村報告○は編集市町村名のシリーズ番号を示す。

※基本的には実見を通して分類を行っているが、なお相当数は報告書の記載内容や図版などに拠っている。

博多遺跡群における出土状況

田中克子
福岡市教育委員会

TANAKA Katsuko
Board of Education FUKUOKA City

はじめに

中世国際貿易都市として栄えた博多では、30年にわたる発掘調査によって多岐にわたる交易品が出土している。中でも貿易陶磁器の出土量は全国的にも群を抜いており、この地が当時の貿易港であったことは明白である。博多へ荷揚げされた輸出品はこの地から当時の日本国内や琉球へと運ばれていた。実際、琉球列島一帯で出土する朝貢貿易開始以前の貿易陶磁器は、日本各地における内容とそれ程の差があるわけではない⁽¹⁾。しかし、琉球諸島では13世紀後半頃から、このような全国的に流通した貿易陶磁器に混じって、本土ではほとんど出土することのない今帰仁タイプ・ビロースクタイプといった白磁が存在し、朝貢貿易が開始される前にも、当時の中国と琉球との間に何らかの直接的な関わりがあったことを示唆している。これら白磁が、博多を介さずに直接琉球へもたらされたものであるのかどうか、まず当時の貿易拠点であった博多遺跡群での出土状況を明らかにせねばならない。本項では、博多遺跡群に関する既刊報告書の検索により全ての関連資料を抽出し、中でも関連性の強い資料について報告する。博多遺跡群以外での詳細な出土状況については、新里の報告（資料篇2）を参照していただきたい。

1. 今帰仁タイプとその関連資料（図1、表1、写真1）

全形を知り得る資料が少なく、琉球諸島出土の今帰仁タイプの典型と思われる資料は確認できなかったが、1～4の4点にかろうじてその特徴を見出せる。1・2は口縁から釉液に浸し内底まで施釉せずに露胎として残し、3・4は施釉後内底を輪状に釉剥ぎする。いずれも、灰色がかった白色の緻密な磁質胎土にやや青味の強い透明釉がかかり、よく焼けているものについてはかなり透明感がありガラス質である。内底は丸く凹み段が付かず、体部はやや内湾気味に大きく外に開く。3・4の高台は一旦削り出した後、外底中心部分を比較的広い範囲で再度平坦に削り取るため、外底周縁に沿って断面三角形の溝が一周しており、これは今帰仁タイプの典型的な特徴でもあり、また浦口窯製品の特徴でもある。しかし、1は全体に小振りで高台を一度に削り出す点で異なっている。畳付はいずれも斜めに削られる。また、2は内底に沈線が巡り、連江浦口窯では類似品も確認されている（第3章第2節2の図3-21・28他）。これらの出土年代は概ね13世紀後半～14世紀代に納まる。

5～10は、体部が外に大きく開き内底が丸く凹む点・高台畳付が斜めに削られる点・外底の削り出し方法等は今帰仁タイプに類似するが、口径・高台径・器高の比率や体部が直線的である等、全体的に今帰仁タイプとはやや違和感のある器形である。また、内側面に沈線が巡る点や高台畳付に重ね焼き時の熔着防止の白泥が付着する等、今帰仁タイプには見られない特徴も有する。特に畳付に白泥が付着させて重ね焼きする焼成方法は、12世紀中～後半時期博多に大量に輸入された福建産白磁（第3章第5節2の図1 田中分類F類、田中2003）によく見られる現象である。5～10のタイプはこの焼成方法を踏襲したもので、出土年代等を考え合わせると今帰仁タイプに先行するものかもしれない。或いは浦口窯の製品ではない可能性もあるが、浦口窯の今帰仁タイプ類似資料の中には畳付に白泥が付着するものも少量ながら確認されていることから、一概には否定できず、これらを「類今帰仁タイ

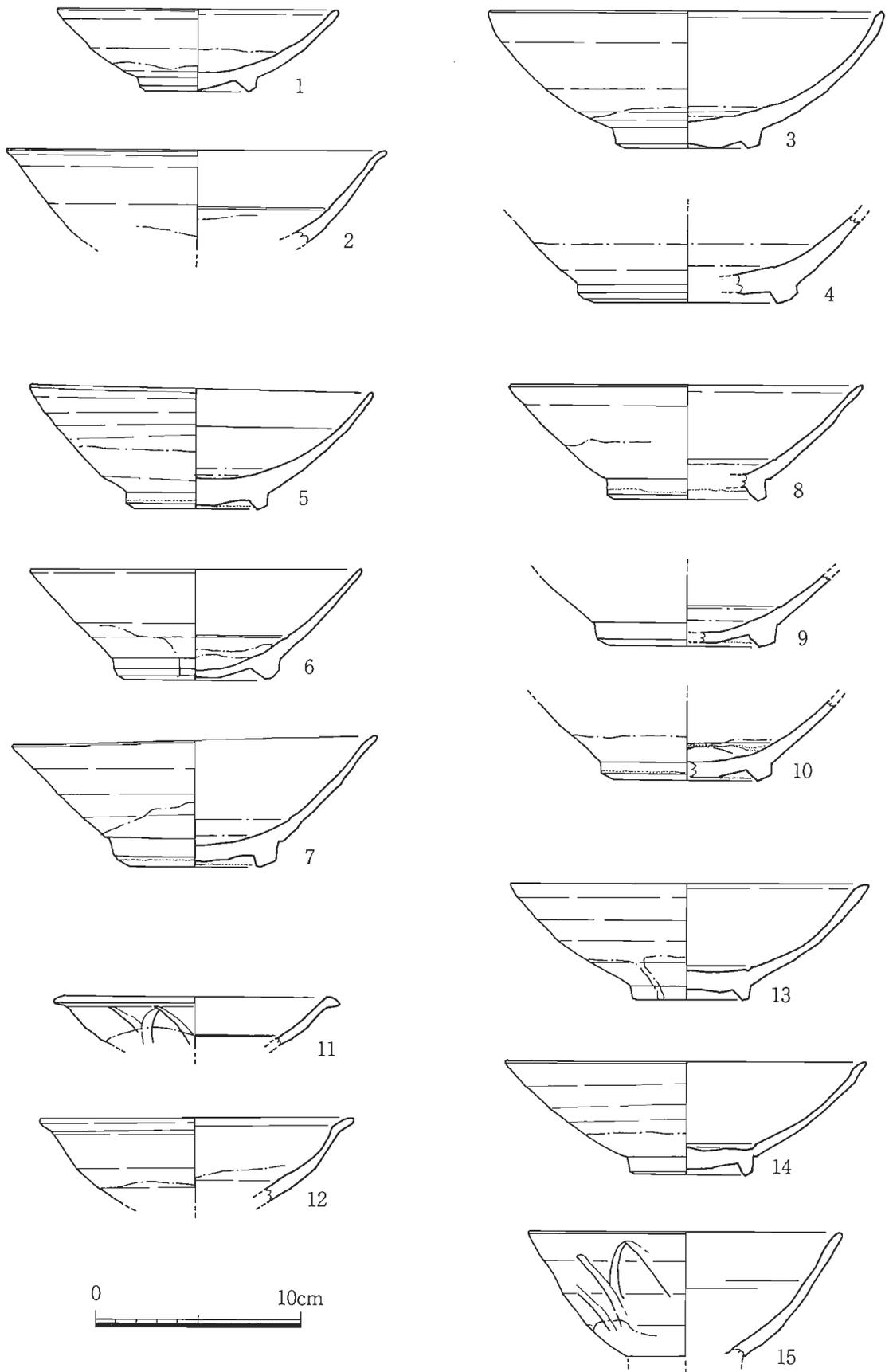


図1 博多遺跡群出土の今婦仁タイプとその関連資料 (S = 1/3)

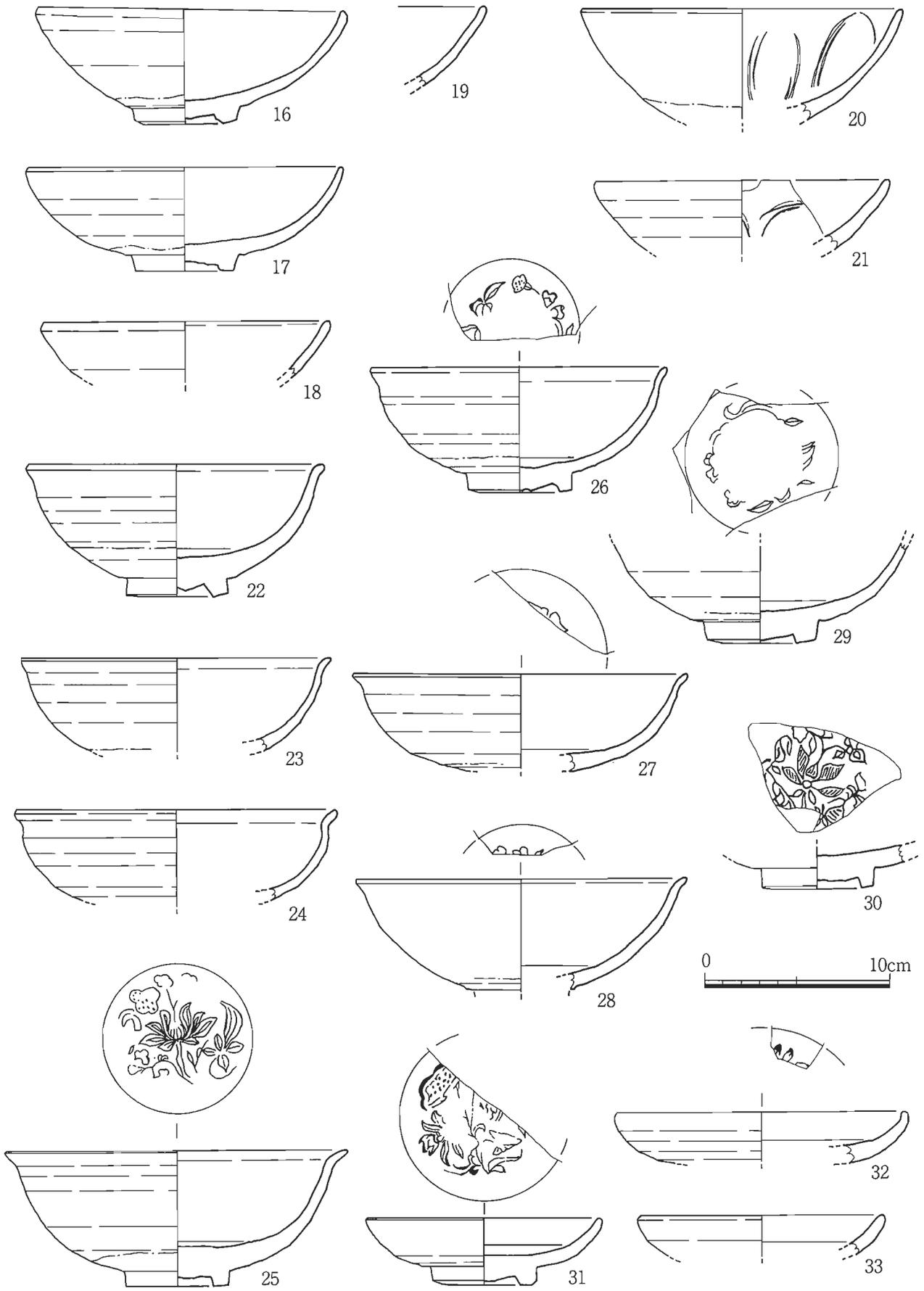
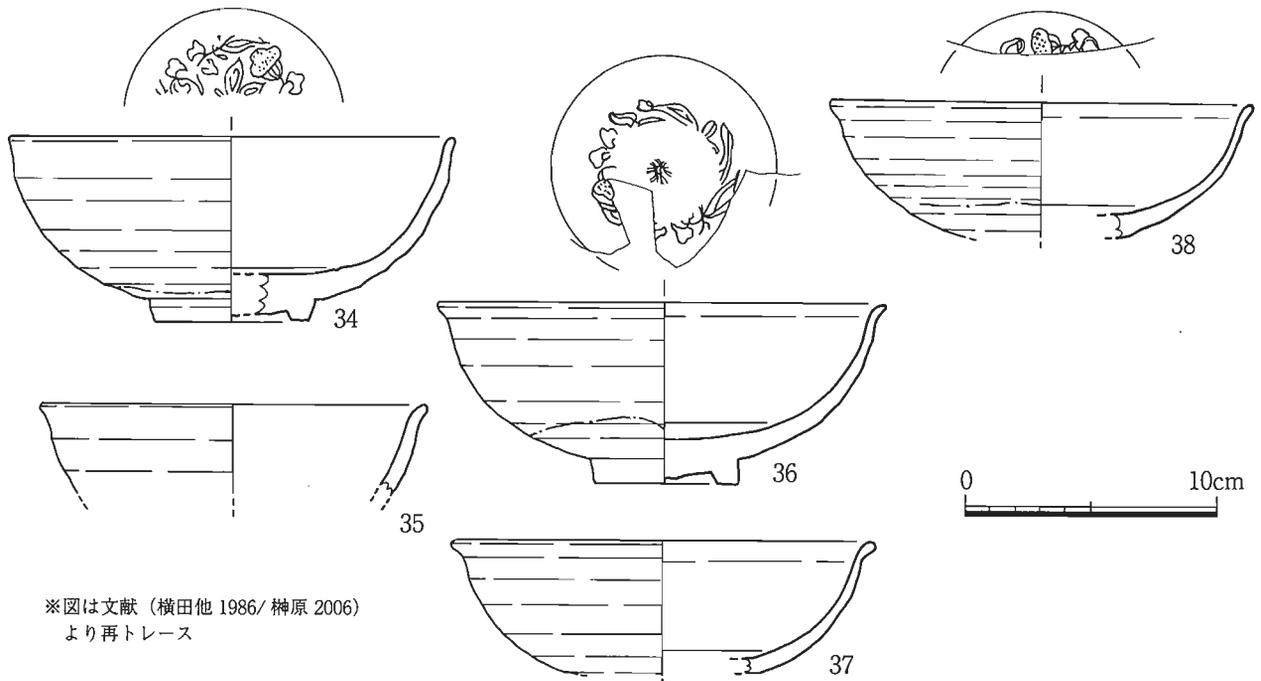


図2 博多遺跡群出土のビロースクタイプ (S = 1/3)



※図は文献（横田他 1986/ 榊原 2006）
より再トレース

図3 大宰府史跡・十三湊遺跡出土のピロースクタイプ (S=1/3)

プ」とし、今後の参考資料として掲載した。

以上の他、参考資料として今帰仁タイプの範疇には入らないが浦口窯と思われる代表的なものを挙げる(11~15)。ただし、11・12の口縁部片については福建省莆田庄辺窯にもかなり類似した製品があり、この限りではない⁽²⁾。胎土・釉調は上記1~4とほぼ同じである。器形・文様等から南宋期同安・竜泉窯製品の影響を受けたものと思われる。11は外面に片切彫りによる蓮弁文を施す小形の皿で、12~15は碗である。12は内底を露胎とする。13・14は内底に段を有し平坦になっており、体部は大きく外に開くが、もう少し立ち気味のものもある。15は11と同様外面に片切彫りによる蓮弁文を施す。13~15と同類の製品は後述する元寇関連の遺跡とされる長崎県鷹島海底遺跡でも多数出土している。博多遺跡群でも散見できる程度の頻度で出土し、その年代も元寇時期とほぼ重なる。これらの出土年代は早いもので12世紀後半代であるが、13世紀前半~14世紀前半に納まるものが多い。

2. ピロースクタイプ (図2・3、表2、写真2)

博多遺跡群で確認したピロースクタイプは20点である。Ⅱ類が6点、Ⅲ類が14点で、Ⅰ類はない。胎土はやや黄味、或いは灰色がかった白色で、磁質であるが小孔が多い。釉は総じて失透したものが多く釉層は厚い。器壁、特に底部は厚い。高台は低く肉厚でかなり雑に削り出され、一旦削り出した後、外底中央部のヘソ状に突出した部分を再度簡単に削り取っている。畳付は水平に削られる。

16~21はⅡ類碗である。内底は段が付かず丸く凹み、体部は内湾しながら大きく外に開く。20・21は内側面に細いへら彫りによる2本単位の蓮弁文を施す。17は14世紀前半代の遺構から出土、他は包含層出土のため明確な時期は不明であるが、共伴する中国産陶磁器等から概ね15世紀前半までにはもたらされたと思われる。

22~30はⅢ類碗である。内底が広く平坦で沈線が巡る。腰が大きく張り出し、高台脇を水平に削りこむ。内底面が無文のもの(22)、印花文を施すもの(25~30)があり、印花文は不明瞭なものも

あるが、恐らく全て蓮華文と思われる。

31～33は内湾口縁皿である。31・32は内底面が広く平坦で沈線が巡ることと、Ⅲ類碗と同様の蓮華文が施されることから、外反口縁ではないがⅢ類碗とセットとして捉える。33については小片のためⅡ類、或いはⅢ類のいずれかは不明である。出土年代については、33が14世紀前半～中頃、他は15世紀前半頃を主体としそれ以降と考えられる。特に、ビロースクタイプが最もまとまって出土した築港線3次調査では、包含層出土ではあるが、他の共伴中国産陶磁器は概ね15世紀前半代の様相を呈する。

以上博多遺跡群出土以外に、日本本土でその出土年代が比較的明確な資料を挙げる(34～37)。

34・35は大宰府史跡出土のⅢ類碗である。34は嘉元二年(1304年)、35は元徳カ二年(1330年)銘を有する卒塔婆出土遺構から出土した(横田他1986、15～25頁)。36～38は青森県十三湊遺跡出土のⅢ類碗である。14世紀中～15世紀前半の陶磁器一括廃棄土坑から出土した(榊原2006)。

3. まとめ

博多には、12世紀後半位から14世紀の早い段階にかけて、浦口窯と思われる製品がもたらされているものの、琉球諸島で出土する今帰仁タイプはほとんど皆無に等しい状況と言える。かろうじて今帰仁タイプの特徴を持つ極少量の製品は、13世紀後半～14世紀に位置づけられる。また、ビロースクタイプについては、Ⅰ類はなく、Ⅱ類も極めて少なく、早いもので14世紀前半には見られる。これに対してⅢ類はⅡ類に比べると倍増しており、その時期は15世紀前半頃と考えられる。なお、大宰府出土の資料については、紀年銘資料の時期とⅢ類を同一時期として捉えていいのか、遺構の一括性についても考慮すべきであり、現時点でⅢ類の出現時期を14世紀前半まで遡らせることは控えたい。

以上、それぞれの出土年代については、琉球列島と概ね同じと言える。また、その出土量は極めて少なく、この状況をどう捉えるかは、琉球列島等での出土状況と合わせて後述する。

注

- (1) 進貢貿易が開始されて以後、特に14世紀後半～15世紀にかけての沖縄諸島における貿易陶磁器の豊富さは、質・量ともに日本本土のそれを凌駕しており、これはまさに琉球と明との直接交易を物語るものである。
- (2) 庄辺窯の製品については、既に宮城により報告されている(第3章第2節2)が、浦口窯の製品とは、胎土・釉調が極めて類似しており、肉眼観察による分別はかなり困難である。また、内底を露胎のまま残したり、或いは輪状釉剥ぎして重ね焼きをする焼成方法も両者ともに同じであり、さらに器形的にもかなり似たものがある。両者の最も大きな違いは底部の形状に見出すことができる。庄辺窯は内底が広く比較的平坦で、特に高台の削り出し方法に浦口窯との顕著な違いがある。浦口窯の特徴である二度にわたる削りが、庄辺窯の製品には見られず、いずれも一度に平坦に丁寧削り出されている(第3章第2節2の図4-41～44参照)。従って、底部を欠く資料ではその区別が困難なものが多い。

文献

- 榊原滋高 2006 「十三湊遺跡の一括資料と基準資料」『貿易陶磁研究』No.26、日本貿易陶磁研究会
- 田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁－(その三) 宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号、博多研究会
- 横田賢二郎・森本朝子・山本信夫 1986 「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器－森田勉氏の研究成果によせて－」『貿易陶磁研究』No.9、pp.15～25、日本貿易陶磁研究会

表1 博多遺跡群出土の今帰仁タイプとその関連資料一覧

番号 (登録番号)	調査地点	遺構	種類	胎土・釉調他	遺構の年代	報告書名 (集)
1 (783301398)	地下鉄(4) 祇園町工区 H区	SK49	今帰仁タイプ ／露胎・碗	淡灰白色磁質、淡灰オリ ーブ色透明釉	13C後半～14Cか？(口禿白磁 など)	地下鉄Ⅶ (193)
2 (955410953)	博多95次	SE128	今帰仁タイプ ／露胎・碗	淡灰白色磁質、青色帯透 明釉	14C前半～中頃をやや下る	博多 86(757)
3 (955411360)	博多95次	3～4面包含 層	今帰仁タイプ ／輪剥ぎ・碗	淡灰白色磁質、やや青灰 色帯透明釉	14C代(新安沈船出土関連陶磁 多い)	博多 86(757)
4 (056600344)	博多159次	2～3面包含 層	今帰仁タイプ ／輪剥ぎ・碗	灰色磁質、やや青味帯淡 灰色半透明釉	不明(14～16C)	博多 116(946)
5 (772500560)	地下鉄(2) 店屋町工区 C・D区	SK132 (廃棄土坑)	類今帰仁タイ プ／輪剥ぎ・ 碗	白色磁質、やや黄味帯淡 灰色半透明釉、高台に白 泥	12C中～後半？(同安・竜泉窯 青磁など)	地下鉄Ⅴ (126)
6 (832700028)	博多22次	SK357	類今帰仁タイ プ／輪剥ぎ・ 碗	白色磁質、淡灰白色透明 釉、高台に白泥	13C中～14C初頭？(口禿白磁、 南宋後半竜泉窯青磁など)	博多Ⅲ (118)
7 (911100322)	博多71次	SK471	類今帰仁タイ プ／輪剥ぎ・ 碗	白色磁質、やや灰色帯透 明釉、高台に白泥	13C初～前半？(竜泉窯青磁蓮 弁文碗など)	博多 53(450)
8 (886200333)	博多45次	SE2004 (土師器大 量一括廃 棄)	類今帰仁タイ プ／輪剥ぎ・ 碗	灰白色磁質、灰白色不透 明釉、高台に白泥	13C中～14C初頭(口禿白磁、南 宋後半竜泉窯青磁、元代磁窰窯 壺など)	博多 20(248)
9 (886200331)	博多45次	SE2004 (土師器大 量一括廃 棄)	類今帰仁タイ プ／輪剥ぎ・ 碗	淡黄褐色完全磁質でない、 やや黄味帯淡灰白色 不透明釉	13C中～14C初頭(口禿白磁、南 宋後半竜泉窯青磁、元代磁窰窯 壺など)	博多 20(248)
10 (886200332)	博多45次	SE2004 (土師器大 量一括廃 棄)	類今帰仁タイ プ／輪剥ぎ・ 碗	灰白色磁質、淡灰白色透 明釉、高台に白泥	13C中～14C初頭(口禿白磁、南 宋後半竜泉窯青磁、元代磁窰窯 壺など)	博多 20(248)
11 (874010220)	博多37次	SK788 (木桶墓か)	浦口窯？・小 形皿(外面蓮 弁文)	淡灰白色磁質、やや青灰 色帯透明釉	12C後半～13C	博多 16(244)
12 (896350464)	博多62次	SK3677 (大量一括 廃棄土坑)	浦口窯？・露 胎碗	灰色磁質、灰青色透明釉	13C初頭(輸入陶磁器は12C中 ～後半が主体)	博多 48(397)
13 (832700030)	博多22次	SK357	浦口窯・碗	淡灰白色磁質、淡青緑色 不透明釉	13C中～14C初頭？(口禿白磁、 南宋後半竜泉窯青磁など)	博多Ⅲ (118)
14 (832700029)	博多22次	SK357	浦口窯・碗	淡灰白色磁質、やや黄味 帯透明釉	13C中～14C初頭？(口禿白磁、 南宋後半竜泉窯青磁など)	博多Ⅲ (118)
15 (995201106)	博多120次	SK94 (溝状土坑)	浦口窯・碗(外 面蓮弁文)	灰色磁質、ややオリーブ 色帯透明釉	14C前半	博多 80(706)

※番号は図1に対応

※報告書は福岡市埋蔵文化財調査報告書(福岡市教委)

表2 博多遺跡群出土のビロースクタイプ一覧

番号 (登録番号)	調査地点	遺構	種類	胎土・釉調	遺構の年代	報告書名 (集)
16 (884305417)	博多42次	SK735	Ⅱ類碗	淡黄白色磁化していない、淡黄白色半透明釉	16C代? (出土輸入陶磁器は15C前半～中頃が主体)	博多 17(245)
17 (047500243)	博多149次	SK5201	Ⅱ類碗	灰白色磁質、乳白色半透明釉	14C前半代	博多 110(940)
18 (840405645)	築港線3次	包含層Ⅲ面	Ⅱ類碗	灰白色磁質、灰青色透明釉	不明(14C中～15C前半頃主体か? 元青花、ベトナム白磁、元代竜泉窯青磁端反碗など)	築港線V (221)
19 (884305419)	博多42次	SK735	Ⅱ類碗	白色磁質、やや青味帯淡灰白色半透明釉	16C代? (出土輸入陶磁器は概ね15C前半～中頃が主体)	博多 17(245)
20 (024400200)	博多141次	1面包含層	Ⅱ類碗	淡灰白色磁質、青味帯透明釉	不明	博多 100(809)
21 (840405588)	築港線3次	包含層Ⅱ面	Ⅱ類碗	淡灰白色磁質、乳白色不透明釉	不明(15C代が主体か? 15C前半明青花、明代邵武窯白磁・白磁腰折れ皿、竜泉窯青磁雷文帯碗など)	築港線V (221)
22 (840405648)	築港線3次	包含層Ⅲ面	Ⅲ類碗	淡灰白色磁質、灰色透明釉	不明(14C中～15C前半頃主体か? 元青花、ベトナム白磁、元代竜泉窯青磁端反碗など)	築港線V (221)
23 (840405649)	築港線3次	包含層Ⅲ面	Ⅲ類碗	淡灰白色磁質、やや黄味帯透明釉	不明(14C中～15C前半頃主体か? 元青花、ベトナム白磁、元代竜泉窯青磁端反碗など)	築港線V (221)
24 (840405584)	築港線3次	包含層Ⅱ面	Ⅲ類碗	淡灰白色磁質、やや青味帯淡灰白色半透明釉	不明(15C代が主体か? 15C前半明青花、明代邵武窯白磁・白磁腰折れ皿、竜泉窯青磁雷文帯碗など)	築港線V (221)
25 (864800710)	博多35次	包含層2層	Ⅲ類碗	淡黄白色磁化していない、やや青味帯透明釉	不明確(輸入陶磁器から14C前半～15C前半?)	博多 47(396)
26 (850900315)	博多29次	包含層3層	Ⅲ類碗	淡灰色磁質、淡灰色透明釉	不明(14C～16C代)	博多Ⅷ (148)
27 (840405585)	築港線3次	包含層Ⅱ面	Ⅲ類碗	白色磁質、やや青味帯淡灰白色不透明釉	不明(15C代が主体か? 15C前半明青花、明代邵武窯白磁・白磁腰折れ皿、竜泉窯青磁雷文帯碗など)	築港線V (221)
28 (000600069)	博多124次	SK189 (方形木室)	Ⅲ類碗	淡黄白色磁化していない、淡黄白色透明釉	16C代後半	博多 87(758)
29 (000600771)	博多124次	SK119 (方形木室)	Ⅲ類碗	淡黄白色磁質、淡黄白色半透明釉	16C後半	博多 87(758)
30 (050900066)	博多152次	SK079	Ⅲ類碗	灰白色磁質、やや黄味帯透明釉	不明	博多 111(941)
31 (840405582)	築港線3次	包含層Ⅲ面	Ⅲ類皿	淡灰白色磁質、青味帯淡灰白色不透明釉	不明(14C中～15C前半頃主体か? 元青花、ベトナム白磁、元代竜泉窯青磁端反碗など)	築港線V (221)
32 (840405593)	築港線3次	包含層Ⅱ面	Ⅲ類皿	淡灰白色磁質、灰青色半透明釉	不明(15C代が主体か? 15C前半明青花、明代邵武窯白磁・白磁腰折れ皿、竜泉窯青磁雷文帯碗など)	築港線V (221)
33 (884305579)	博多42次	SK709	ⅡorⅢ類皿	淡灰白色磁質、やや青味帯透明釉	14C前半～中頃	博多 17(245)
(840405646)	築港線3次	包含層Ⅲ面	Ⅲ類碗	灰白色磁質、やや黄味帯透明釉	不明(14C中～15C前半頃主体か? 元青花、ベトナム白磁、元代竜泉窯青磁端反碗など)	築港線V (221)
(864800153)	博多35次	SD30(1面 道路側溝)	Ⅲ類碗	淡灰白色磁質、やや黄味帯透明釉	15C前半～中頃(輸入陶磁器の年代は概ねこの時期)	博多 47(396)

※番号は図2に対応

※報告書は福岡市埋蔵文化財調査報告書(福岡市教委)



写真1 博多遺跡群出土の今帰仁タイプとその関連資料（縮尺不同）



写真2 博多遺跡群出土ピロースタイプ (縮尺不同)

長崎県鷹島海底遺跡における出土状況

田中克子
福岡市教育委員会

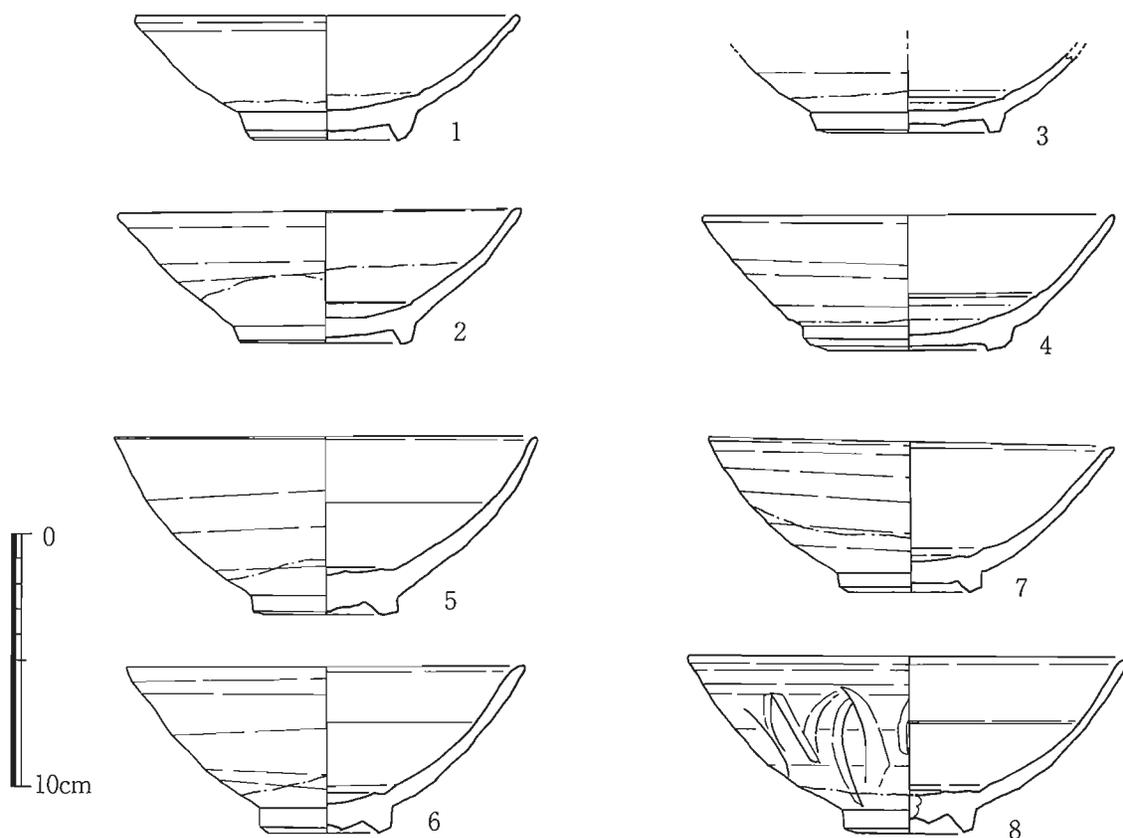
TANAKA Katsuko
Board of Education FUKUOKA City

はじめに

長崎県松浦市所在の鷹島は伊万里湾開港部に位置する。この島の南岸沖は九州西北部を襲った二度にわたる元寇のうち、弘安の役（1281年）の際の大暴風雨によって元軍船が沈没した場所とされている。通説の通り、島内には古くから海揚がりの「唐壺」と呼ばれる中国産陶器や碇石が残されている。1980年以降神埼港や床浪地区において断続的な潜水調査や発掘調査が行われ、元軍のものと思われる船体の一部や碇石・武器等の他、中国産陶磁器も多数出土し、元寇関連の周知の遺跡となった（鷹島町教委1984他）。森本は出土陶磁器のうち、沖縄で特徴的に出土する薄手直行碗「今帰仁タイプ」類似品があることを指摘した（森本朝子1993）。鷹島海底遺跡出土品は元軍の携行品であることは明白であり、一定期間使用、或いは所有した後廃棄される消費地遺跡で出土する貿易陶磁とは異なり、その出土年代はより生産年代に近いと考えられる。実年代が明白な当遺跡出土の遺物は今帰仁タイプの年代を考える上で重要である。2006年8月、資料調査を行った。

1. 今帰仁タイプとその関連資料（図1・写真1）

今帰仁タイプに類似する資料は1～3の3点のみで、いずれも床浪地区での出土品である。海底出



※図は1991年九州大学考古学研究室（代表 西谷正教授）の調査において、森本朝子による実測図を修正・再トレース

図1 鷹島海底遺跡出土の今帰仁タイプとその関連資料（S = 1/3）

土品のため本来の胎土・釉調は不明確であるが、総じて灰色がかった白色の磁質胎で、青味がかった釉調である。いずれも内底が大きく凹み、段が付かない。高台の削り出し方法は一旦削り出した後、外底中央部分を広く削り取っており、これは今帰仁タイプを含めた浦口窯の製品に認められる特徴である。1・2は内底を露胎として残し、3は施釉後輪状に釉剥ぎする。1は浦口窯上元山採集品の小振り碗（第3章第2節2の図3-15）と類似し、宮城はこのタイプは今帰仁タイプとは器形的にやや異なると指摘する。博多遺跡群出土品（第3章第3節2の図1-1）もこれと類似する。2・3は内底に沈線が巡り、どちらかと言えば博多遺跡群出土の「類今帰仁タイプ」としたものに類似する（第3章第3節2の図1-5～10）。4は全体の器形は今帰仁タイプに類似するが、かなり緑がかった釉調を呈し、見込みに明瞭な段が付く点や高台が低く非常に丁寧に一度で削り出している点で琉球諸島出土品と異なり、浦口窯以外の窯の製品の可能性もある。参考資料として掲載した。

5～8は今帰仁タイプではないが、浦口窯の製品と思われるもので、特に錦山寺や西山頂等で採集された碗（第3章第2節2の図3-23・26・27、図4-33）と同じタイプである。器形・文様などの特徴から南宋期同安・竜泉窯の影響を強く受けたものと思われる。同類のものは博多遺跡群でも出土している（第3章第3節2の図1-13～15）。これらは当遺跡出土の食膳具の大半を占めている。

2. まとめ

海底遺跡出土遺物については、船内出土以外は一括資料として扱うには問題がある。しかし、発掘調査に長年携わってきた小川は、当遺跡出土品については共時性の高いものと指摘し、この出土遺物群の中に、上記福建産陶磁器も含めている。特に5～8の資料については、出土地点や状況から鷹島沖に碇泊した船団の徴用地構成と物資供給地を示すとす（小川2004）。つまり、この浦口窯製品は、当時現地では日用品としてかなり普及していたものと言え、元軍船の兵や乗組員の所持品として多く持ち込まれたものであろう。しかし、同じ浦口窯の製品でありながら、この中に今帰仁タイプに類する製品がほぼ含まれていないのは、言い換えれば、この時期今帰仁タイプがまだ本格的に生産を開始していなかったとも解釈できる。これは、今帰仁城跡主郭で13世紀後半に今帰仁タイプが出現し始める状況によっても裏付けられ、今帰仁タイプの生産開始時期をこの頃に求めることは可能であろう。

文献

- 小川光彦 2004 「鷹島海底遺跡出土の舶載陶磁－元軍携行の南宋末・元初の中国陶磁器－」東洋陶磁学会西日本地区研究会資料（於金沢大学）
- 鷹島町教育委員会・床浪海底遺跡発掘調査団 1984 「床浪海底遺跡－長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書」
- 鷹島町教育委員会 1992～2003 「鷹島海底遺跡Ⅰ～Ⅷ」鷹島町文化財調査報告書2～7集
- 森本朝子 1993 「長崎県鷹島海底出土の「元寇」関係の磁器について」『博多研究会誌』第2号、博多研究会

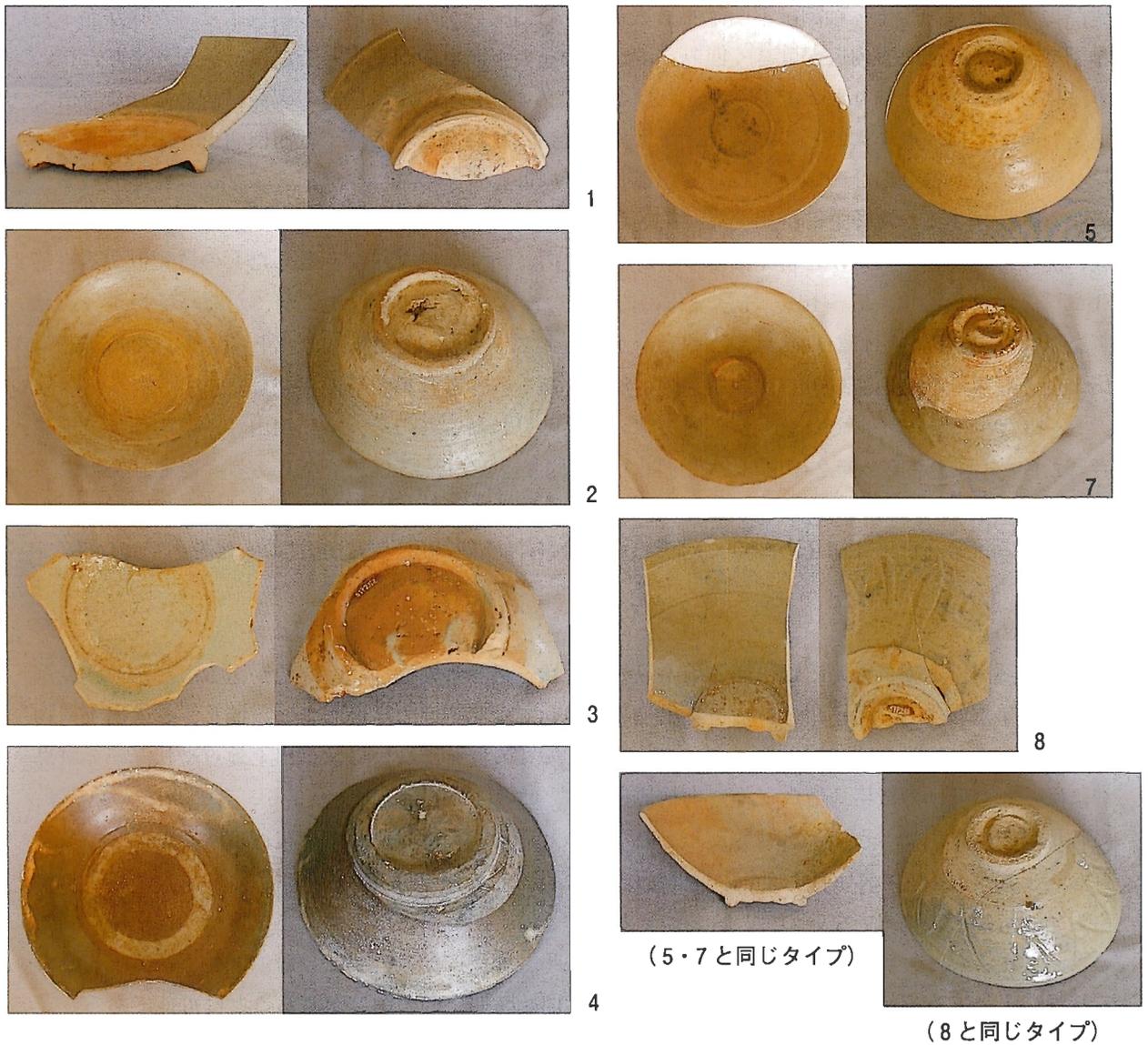


写真1 鷹島海底遺跡出土の今帰仁タイプとその関連資料（縮尺不同）

今帰仁タイプ・ビロースクタイプ関連白磁の胎土分析

—中国窯跡・今帰仁城跡・博多遺跡群出土白磁の比較検討—

田上勇一郎
福岡市教育委員会

TAGAMI Yuichiro
Board of Education FUKUOKA CITY

はじめに

金武正紀が設定した、琉球で特徴的に出土する今帰仁タイプ・ビロースクタイプの白磁（金武1988・2007）は田中克子によりそれぞれ浦口窯・閩清窯が生産地として指摘されていた（森本・田中2004）。今回の福建省における窯跡出土品の調査により、その指摘の妥当性が示されたといえる。

本稿ではその指摘を別視点で確認する目的で行った胎土分析の結果について報告する。

資料は今帰仁城跡出土の今帰仁タイプ・ビロースクタイプの白磁とその生産地と考えられる中国窯跡出土品である。また、今帰仁タイプには該当しない資料であるが今帰仁城跡出土のNA.01を加えている。宮城も指摘するように（第3章第2節2）、釉調や焼成方法等今帰仁タイプと類似しており、従来混同されがちであったが、莆田庄辺窯に同種のもので確認でき、今回確認のために莆田庄辺窯碗窯壟（PUT.14）出土品と共に分析資料に加えた。さらに博多遺跡群出土品の今帰仁タイプ・ビロースクタイプ関連白磁を分析した。

中国窯跡資料は中国で、博多遺跡群資料は福岡で分析し、今帰仁城跡資料は同一のものを両方で分析した。

資料の選定・観察は田中が行い、中国での分析を中国科学院上海珪酸塩研究所に依頼し、福岡での分析を田中・田上が福岡市埋蔵文化財センターにて行った。

分析値の検討は田上が行った。分析値からの類似度の比較や分類は多変量解析のクラスター分析を用いた。データの数値は標準化し、平均ユークリッド距離係数でWard法によりクラスター化した。多変量解析ソフトは小椋将弘「Excelで簡単多変量解析」付録の『三毛猫』を用いた（小椋2006）。

1. 中国科学院上海珪酸塩研究所による中国窯資料・今帰仁城跡資料の胎土分析

福建省の窯跡より採集された白磁24点と今帰仁城跡出土白磁7点（図1・表1）を中国科学院上海珪酸塩研究所に依頼し胎土と釉薬の化学組成の測定を行った。詳細な測定方法・測定条件は不明であるが、使用機器はEDAX社製、Eagle-3型の蛍光X線分析装置である。ロジウム管球で、測定雰囲気は真空、一つの資料に対して、二種のエネルギー照射（高・低）をおこなっている。

結果は表2・3の通りである。胎土について図2、釉について図3のデンドログラムを得た。釉薬については層が薄く測定不能なPUK.08と、釉表面から測定したNA.02・NA.05がある。

1.1. 胎土

胎土について、閩清窯、浦口窯もしくはビロースクタイプ、今帰仁タイプと単純に二分することはできなかった。しかし、距離2.2付近で切断すると5つのクラスターに分類することができる。

まず、第1クラスターには窯跡出土品をみると閩清義窯下窯崗（MIQ.01～03）、閩清安仁溪（MIQ.04・05）、閩清義窯上武坪（MIQ.06）、のビロースクタイプと浦口窯錦山寺2資料のうちの1点（PUK.09）、浦口窯西山第2地点3資料のうちの2点（PUK.24・26）の今帰仁タイプ・今帰仁関連タイプに莆田庄辺窯碗窯壟（PUT.14）が含まれており、ビロースクタイプ、今帰仁タイプが混在する。今帰仁城跡資料では内底輪状釉剥ぎのNA.01とビロースクタイプのNA.04・06が含まれた。

表1 胎土分析資料一覧表

資料名	出土・採集地点	タイプ／形態（焼成方法・文様等）	器種・部位	図番号
NA. 01	今帰仁城跡今本大庭東側土溜沿Ⅱ層（黒色土層）	莆田庄辺窯か？内底輪状釉剥ぎ	碗・底部	第3章第4節 図1
NA. 02	今帰仁城跡今本大庭東側土溜沿Ⅱ層（黒色土層）	今帰仁タイプ／内底輪状釉剥ぎ	碗・底部	第3章第4節 図1
NA. 03	今帰仁城跡4次今本東へキⅠ層0219	ビロースクタイプⅢ類／内底印花蓮華文	碗・底部	第3章第4節 図1
NA. 04	今帰仁城跡今志第6R Ⅲ0-5、6A Ⅱ10-15	ビロースクタイプⅡ類	碗・底部	第3章第4節 図1
NA. 05	今帰仁城跡今本D-3第Ⅶ層	今帰仁タイプ／内底露胎	碗・底部	第3章第4節 図1
NA. 06	今帰仁城跡今志第5B Ⅳ層0-8	ビロースクタイプⅠ類	碗・口縁部	第3章第4節 図1
NA. 07	今帰仁城跡	今帰仁タイプ／内底露胎	体部	第3章第4節 図1
				(同タイプの資料番号)
MIQ. 01	閩清義窯下窯崗	ビロースクタイプⅢ類	碗・口縁部	第3章第2節3 図4-21
MIQ. 02	閩清義窯下窯崗	ビロースクタイプⅡ類	碗・口縁部	第3章第2節3 図4-19
MIQ. 03	閩清義窯下窯崗	ビロースクタイプⅠ類先行タイプ	碗・底部	第3章第2節3 図4-17
MIQ. 04	閩清安仁溪窯	ビロースクタイプⅠ類先行タイプ	碗・底部	第3章第2節3 図2-1
MIQ. 05	閩清安仁溪窯	ビロースクタイプⅠ類先行タイプ／内面櫛描文	碗・底部	第3章第2節3 図2-3
MIQ. 06	閩清義窯上武坪	ビロースクタイプⅢ類	碗・底部	第3章第2節3 図3-13
PUK. 07	浦口窯上元山	今帰仁タイプ／内底露胎・小形	碗・底部	第3章第2節2 図2-1
PUK. 08	浦口窯上元山	今帰仁タイプ／内底露胎	碗・底部	第3章第2節2 図2-9
PUK. 09	浦口窯錦山寺	内底露胎・体外面に縦方向の幅広へら彫り・竜泉窯系統	浅碗・底部	未実測
PUK. 10	浦口窯錦山寺	鷹島海底遺跡出土類似品、同安・竜泉系統	碗・底部	第3章第2節2 図4-33
PUK. 11	浦口窯碗窯山	今帰仁タイプ／内底輪状釉剥ぎ	碗・底部	第3章第2節2 図2-10
SAM. 12	三明中村垵瑤窯蛇頭山	ビロースクタイプ／円盤状高台・内湾口縁・内壁蓮弁文	碗・口縁部	第3章第2節3 図9-67
NAP. 13	南平茶洋窯	ビロースクタイプ／円盤状高台・内湾口縁	皿	第3章第2節3 図8-64
PUT. 14	莆田庄辺窯碗窯壘	内底輪状釉剥ぎ・鏝状口縁	碗	第3章第2節2 図4-44
MIQ. 20	閩清義窯老猫坑	ビロースクタイプⅠ類	碗・底部	第3章第2節3 図5-32
MIQ. 21	閩清義窯老猫坑	ビロースクタイプⅠ類	碗・口縁部	第3章第2節3 図5-28
MIQ. 22	閩清義窯老猫坑	ビロースクタイプⅡ類／無文	碗・底部	第3章第2節3 図5-35
MIQ. 23	閩清義窯老猫坑	ビロースクタイプⅡ類／無文	碗・口縁部	第3章第2節3 図5-35
PUK. 24	浦口窯西山第2地点	今帰仁タイプ／内底露胎	碗・底部	第3章第2節2 図3-32
PUK. 25	浦口窯西山第2地点	今帰仁タイプ／内底露胎	碗・口縁部	第3章第2節2 図3-28
PUK. 26	浦口窯西山第2地点	今帰仁タイプ／内底露胎	碗・口縁部	第3章第2節2 図3-28
MIQ. 27	閩清青窯窯隔	ビロースクタイプⅡ類／印花文	碗・底部	第3章第2節3 図6-57
MIQ. 28	閩清青窯窯隔	ビロースクタイプⅡ類／内壁蓮弁文	碗・口縁部	第3章第2節3 図6-51
MIQ. 28	閩清青窯窯隔	ビロースクタイプⅢ類	碗・口縁部	第3章第2節3 図6-59

博多遺跡群出土資料は第3章第3節2 表1・2. を参照

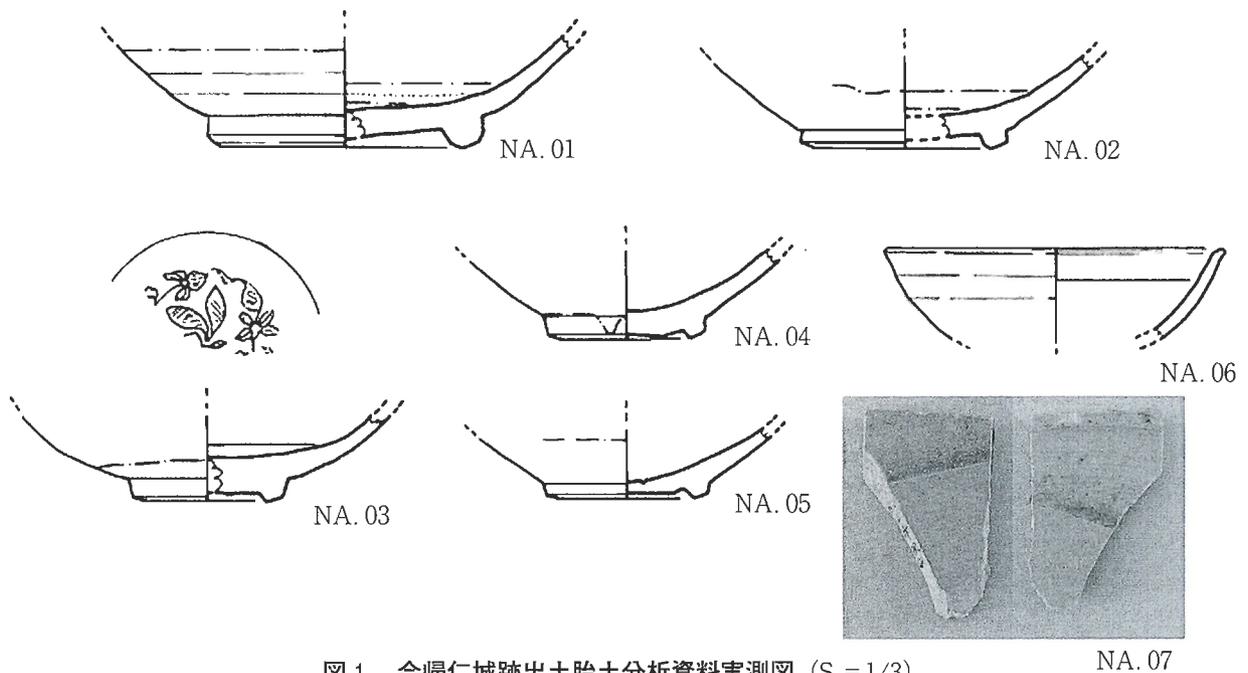


図1 今帰仁城跡出土胎土分析資料実測図 (S = 1/3)

このうち、形態が莆田庄辺窯と類似している NA. 01は莆田庄辺窯碗窯壘 (PUT. 14) ともとても類似する結果となった。

第2クラスターには三明中村垣瑶窯蛇頭山 (SAM. 12)、閩清青窯窯隔 (MIQ. 27~29) と閩清義窯老猫坑4資料のうちの2点 (MIQ. 21・22) が含まれ、三明中村垣瑶窯と閩清窯の全てピロースクタイプ of 白磁であった。今帰仁城跡出土品は含まれなかった。

第3クラスターには窯跡出土品では浦口窯上元山 (PUK. 07・08)、浦口窯碗窯山 (PUK. 11) と浦口窯西山第2地点3資料のうちの1点 (PUK. 25)、浦口窯錦山寺2資料のうちの鷹島海底遺跡出土類似品1点 (PUK. 10) が含まれ、浦口窯の今帰仁タイプ・今帰仁関連タイプのみ of クラスターになった。今帰仁城跡出土品は NA. 05・07 of 今帰仁タイプ of 白磁がこのクラスターに含まれ、胎土分析と形態分類とが矛盾しない結果となった。

第4クラスターには窯跡資料では閩清義窯老猫坑4資料のうちの2点 (MIQ. 20・23) of ピロースクタイプが含まれた。今帰仁城跡出土品はピロースクタイプ of NA. 03と、類似度は低いが、今帰仁タイプ of NA. 02が含まれている。

第5クラスターはクラスターにならず、単独であるが南平茶洋窯 (NAP. 13) of ピロースクタイプで浦口窯や閩清窯と異なる胎土であることが示された。

以上をまとめると窯跡資料では第1クラスターは閩清窯 of ピロースクタイプ、浦口窯 of 今帰仁タイプ・今帰仁関連タイプ、莆田庄辺窯碗窯壘が混在するという結果となり、閩清窯、浦口窯もしくはピロースクタイプ、今帰仁タイプと大きく二分することはできなかったものの、第2・第4クラスターに閩清窯 of ピロースクタイプ、第3クラスターに浦口窯 of 今帰仁タイプ・今帰仁関連タイプ、第5クラスターに南平茶洋窯が分類できることがわかった。ただし浦口窯錦山寺、浦口窯西山第2地点、閩清義窯老猫坑の資料は一部が別クラスターに分類されており、これが胎土分析の方法の問題や、分析機器の精度の問題、資料数の少なさによるものか、それとも同一の窯でも複数の胎土を使用するのかなど不明の点が残された。

今帰仁城跡資料では今帰仁タイプ of NA. 05・07が浦口窯のクラスターに入った。宮城が、今帰仁

表 2 中国科学院上海硅酸盐研究所による胎土の分析値

	wt%										μg/g									
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	As ₂ O ₃	MnO	CuO	ZnO	PbO ₂	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	P ₂ O ₅		
NA. 01	0.07	0.32	22.74	71.18	2.33	0.16	0.20	2.01	70	340	40	80	70	180	20	40	270	40		
NA. 02	0.53	0.33	21.00	69.45	4.33	0.22	0.31	2.84	60	480	70	180	30	210	110	50	170	40		
NA. 03	0.52	0.29	21.06	71.06	3.76	0.15	0.19	1.97	50	210	70	110	0	220	40	30	110	10		
NA. 04	0.55	0.38	21.94	71.48	2.49	0.17	0.12	1.88	50	180	50	60	20	170	20	30	100	60		
NA. 05	0.42	0.50	18.57	73.70	2.99	0.17	0.24	2.42	40	390	70	160	0	190	30	40	130	60		
NA. 06	0.29	0.19	20.92	72.62	2.86	0.17	0.11	1.84	70	180	50	90	80	200	30	50	130	0		
NA. 07	0.49	0.38	17.67	74.36	3.21	0.19	0.24	2.46	40	340	10	110	0	180	30	40	220	10		
MIQ. 01	0.14	0.30	22.22	71.33	2.62	0.10	0.26	2.03	70	270	70	70	100	170	0	40	110	40		
MIQ. 02	0.19	0.06	20.77	73.18	2.82	0.10	0.14	1.74	70	300	40	70	100	170	30	30	110	0		
MIQ. 03	0.28	0.01	19.41	74.04	3.32	0.09	0.14	1.71	70	200	0	60	70	180	20	40	110	10		
MIQ. 04	0.07	0.24	23.00	71.10	2.39	0.07	0.15	1.99	70	150	60	100	60	180	30	50	180	0		
MIQ. 05	0.37	0.26	19.49	73.98	2.66	0.10	0.15	1.97	70	190	40	50	80	200	20	30	140	10		
MIQ. 06	0.20	0.24	21.19	72.10	2.73	0.10	0.23	2.22	70	250	50	90	110	170	30	40	100	10		
PUK. 07	0.23	0.26	21.49	70.96	3.39	0.35	0.17	2.15	50	320	70	80	10	210	60	70	240	50		
PUK. 08	0.23	0.32	18.49	74.57	3.04	0.13	0.20	2.02	50	480	30	40	0	200	50	40	150	60		
PUK. 09	0.23	0.30	19.22	74.41	2.83	0.14	0.10	1.78	60	270	30	120	60	210	60	40	150	50		
PUK. 10	0.24	0.55	19.89	73.21	2.35	0.18	0.22	2.37	50	320	60	90	40	170	30	40	180	100		
PUK. 11	0.17	0.27	20.60	72.50	3.19	0.19	0.15	1.93	70	290	100	110	70	210	40	40	250	100		
SAM. 12	0.57	0.03	18.23	74.10	4.29	0.10	0.11	1.57	70	430	30	70	90	310	20	40	100	0		
NAP. 13	0.34	1.01	28.26	63.10	2.76	0.21	0.24	3.09	60	170	50	60	80	250	10	20	340	40		
PUT. 14	0.20	0.47	22.48	71.13	2.27	0.22	0.22	2.01	60	420	40	70	80	190	30	30	100	10		
MIQ. 20	0.53	0.00	22.11	69.98	4.24	0.14	0.16	1.89	30	310	70	140	0	240	70	50	120	0		
MIQ. 21	0.27	0.01	22.34	69.64	4.57	0.12	0.15	1.89	70	230	70	100	70	250	40	90	110	20		
MIQ. 22	0.33	0.12	20.59	71.50	4.19	0.10	0.16	2.02	70	220	40	80	70	240	40	70	130	0		
MIQ. 23	0.25	0.17	22.19	70.64	3.54	0.10	0.15	1.96	50	260	80	90	20	210	40	50	100	30		
PUK. 24	0.27	0.31	19.89	73.64	2.82	0.10	0.13	1.83	60	300	30	80	40	210	20	50	160	30		
PUK. 25	0.29	0.35	18.66	74.83	2.64	0.18	0.17	1.88	70	270	100	110	80	220	40	40	190	90		
PUK. 26	0.72	0.36	21.59	71.43	2.66	0.13	0.15	1.96	70	310	50	80	110	200	40	50	170	20		
MIQ. 27	0.49	0.09	21.33	71.20	4.04	0.08	0.09	1.70	60	210	0	70	60	240	60	70	100	0		
MIQ. 28	0.26	0.06	20.97	71.82	4.05	0.11	0.13	1.61	50	190	0	60	0	220	30	50	110	0		
MIQ. 29	0.21	0.13	22.27	70.12	4.33	0.11	0.14	1.69	60	160	30	80	20	260	50	60	130	0		

表3 中国科学院上海硅酸盐研究所による釉薬の分析値

	wt%											μg/g										
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	As ₂ O ₃	MnO	CuO	ZnO	PbO ₂	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	P ₂ O ₅				
NA. 01	0.37	0.29	14.98	69.47	2.79	9.26	0.10	1.74	70	710	0	100	80	150	80	50	140	390				
NA. 02-表面	1.34	0.43	21.76	66.54	5.13	0.38	0.22	3.21	70	900	60	110	80	210	80	20	180	0				
NA. 03	0.93	0.18	13.45	70.59	4.41	8.08	0.08	1.30	70	400	20	90	50	190	150	70	100	330				
NA. 04	0.58	0.00	13.97	72.57	4.58	6.38	0.07	0.90	70	550	20	70	30	220	130	70	80	390				
NA. 05-表面	1.10	0.33	17.25	73.84	3.44	0.18	0.26	2.59	70	490	80	120	30	170	20	60	160	0				
NA. 06	0.35	0.19	15.80	69.22	4.44	7.81	0.07	1.11	60	610	20	90	20	220	150	160	80	390				
NA. 07	0.81	0.31	14.68	70.51	4.31	5.76	0.10	2.53	70	1060	10	120	40	170	150	80	160	240				
MIQ. 01	0.31	0.01	14.39	71.44	3.69	7.56	0.08	1.52	70	650	10	100	40	160	130	100	100	350				
MIQ. 02	0.25	0.15	14.16	72.60	3.92	6.64	0.06	1.21	70	760	10	90	80	190	180	50	100	280				
MIQ. 03	0.62	1.05	19.26	67.69	4.77	4.18	0.08	1.34	70	2610	10	110	170	210	100	80	60	980				
MIQ. 04	0.06	1.54	14.35	72.61	3.01	5.57	0.13	1.73	70	3290	60	130	70	180	410	50	90	1030				
MIQ. 05	0.28	0.28	14.72	72.25	2.98	7.32	0.07	1.10	70	850	0	80	210	160	220	20	70	630				
MIQ. 06	0.02	0.51	16.25	67.27	4.25	10.04	0.07	0.58	70	880	20	110	40	160	150	90	110	1620				
PUK. 07	1.10	0.20	14.44	69.78	4.19	7.91	0.08	1.29	60	450	60	100	10	200	200	80	170	370				
PUK. 08	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
PUK. 09	0.41	0.31	14.02	71.59	3.15	7.87	0.06	1.60	70	830	0	130	40	200	190	40	110	420				
PUK. 10	0.25	0.25	13.71	68.84	3.10	10.93	0.11	1.82	70	370	30	100	60	160	240	20	80	600				
PUK. 11	0.51	0.51	14.76	68.46	3.41	10.13	0.06	1.15	70	460	20	110	40	190	260	50	170	420				
SAM. 12	0.42	0.35	15.41	70.22	3.90	6.66	0.04	1.99	70	910	30	120	90	260	40	40	90	250				
NAP. 13	1.01	1.11	14.76	71.96	3.52	5.38	0.12	1.15	60	2240	90	110	30	190	180	60	150	850				
PUT. 14	0.57	0.27	13.99	69.39	2.91	10.12	0.08	1.66	70	810	30	80	20	160	110	20	150	490				
MIQ. 20	0.72	0.12	15.39	71.98	4.64	4.65	0.06	1.43	60	880	60	120	50	220	150	90	100	330				
MIQ. 21	0.72	0.00	13.64	69.36	4.90	8.98	0.05	1.38	70	850	10	60	80	230	140	80	90	440				
MIQ. 22	0.50	0.03	14.93	69.73	4.51	7.48	0.06	1.76	60	800	20	130	50	200	150	170	60	370				
MIQ. 23	0.50	0.00	13.28	72.86	4.11	7.07	0.05	1.15	60	480	50	100	10	170	170	100	100	360				
PUK. 24	0.26	0.46	15.77	70.87	3.51	6.24	0.09	1.78	70	870	30	110	50	190	130	90	130	280				
PUK. 25	0.29	0.07	13.33	71.87	3.08	9.23	0.07	1.06	20	560	0	520	310	200	260	30	100	450				
PUK. 26	0.25	0.27	14.64	73.80	3.57	4.72	0.08	1.67	60	820	20	100	70	210	110	50	140	270				
MIQ. 27	0.44	0.04	17.91	68.53	4.60	6.25	0.08	1.14	70	860	40	140	90	230	140	110	90	390				
MIQ. 28	0.25	0.07	14.34	72.01	4.61	6.22	0.11	1.38	40	650	0	110	0	220	150	130	90	310				
MIQ. 29	0.34	0.00	14.80	71.82	5.11	5.79	0.07	1.18	70	480	40	120	40	230	170	120	120	240				

NA. 02・NA. 05は表面からの分析、PUK. 08は釉層薄く分析不能

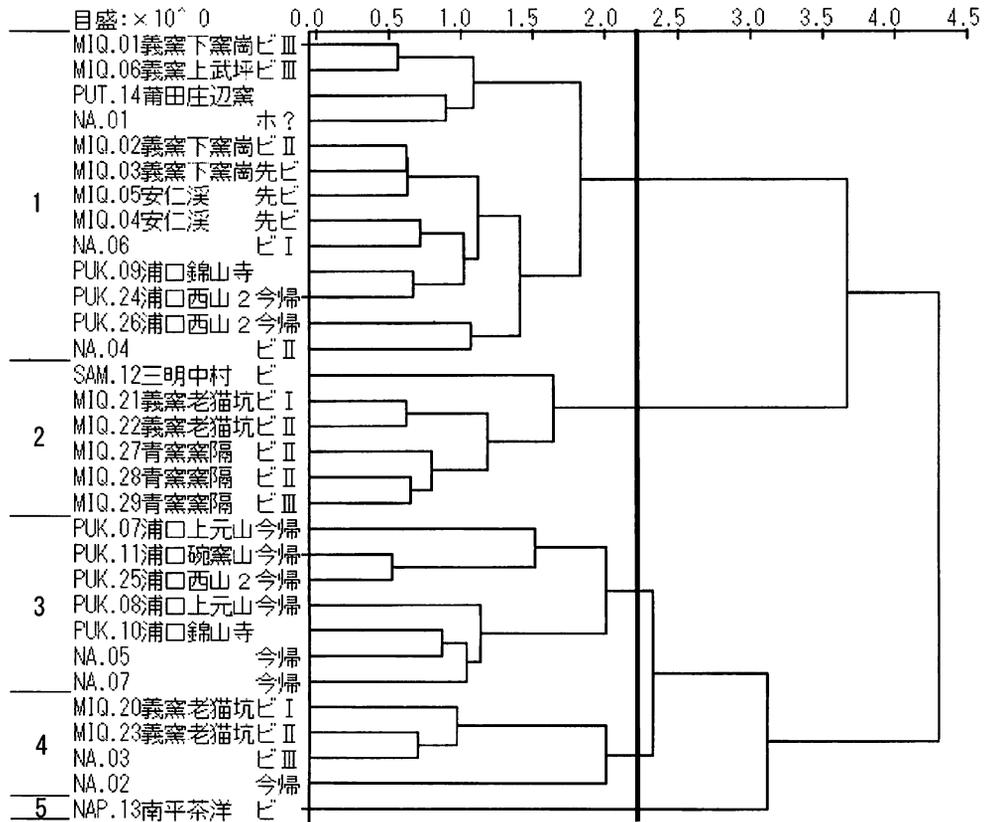


図2 福建省窯跡と今帰仁城跡出土白磁胎土のクラスター分析

凡例：ビⅠ：ピロースクタイプⅠ類・ビⅡ：同Ⅱ類・ビⅢ：同Ⅲ類・今帰：今帰仁タイプ・ホ：莆田庄辺窯製品・先ビ：ピロースクタイプⅠ類先行タイプ

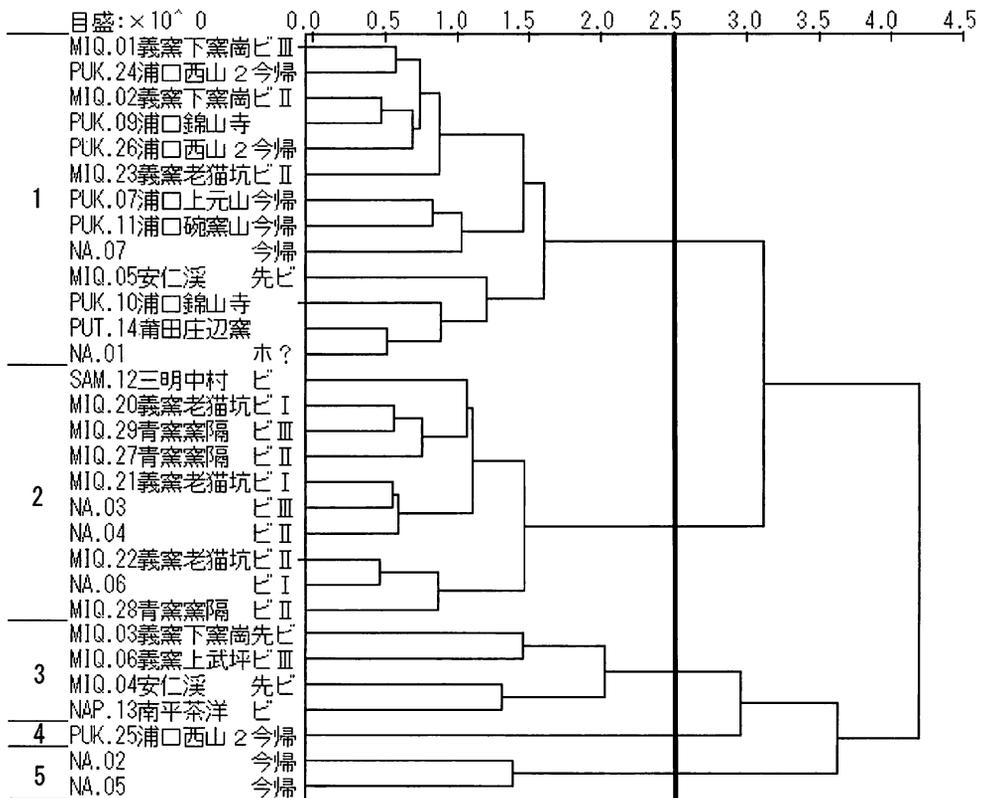


図3 福建省窯跡と今帰仁城跡出土白磁釉薬のクラスター分析

タイプは上元山地点採集品に多くの類似点を見いだすことができると指摘している（第3章第2節1.1.）が、胎土分析の結果も浦口窯上元山（PUK.07・08）と同じクラスターに入っている。ビロースクタイプのNA.03と今帰仁タイプのNA.02は閩清窯のクラスターに入った。ただしNA.02は類似度が低い。NA.01・04・06は浦口窯・閩清窯が混在するクラスターに入ったが、莆田庄辺窯製品に類似するNA.01については莆田庄辺窯がもっとも類似する結果となった。

1.2. 釉薬

釉薬について同じく検討すると、胎土と同様に閩清窯、浦口窯もしくはビロースクタイプ、今帰仁タイプと大きく二分することはできなかった。しかし、距離2.5付近で切断すると5つのクラスターに分類することができる。

まず、第1クラスターには窯跡出土品をみると閩清義窯下窯崗3資料のうちの2点（MIQ.01・02）、閩清安仁溪2資料のうちの1点（MIQ.05）、閩清義窯老猫坑4資料のうちの1点（MIQ.23）のビロースクタイプと浦口窯錦山寺（PUK.09・10）、浦口窯碗窯山（PUK.11）、浦口窯西山第2地点3資料のうちの2点（PUK.24・26）、浦口窯上元山（PUK.07）の今帰仁タイプ・今帰仁関連タイプに莆田庄辺窯碗窯壟（PUT.14）が含まれ、ビロースクタイプ、今帰仁タイプが混在する。今帰仁城跡資料では内底輪状釉剥ぎのNA.01と今帰仁タイプのNA.07が含まれた。胎土の結果と同様、形態から莆田庄辺窯と類似しているNA.01は莆田庄辺窯碗窯壟（PUT.14）ともっとも類似する結果となった。

第2クラスターには三明中村垵瑶窯蛇頭山（SAM.12）、閩清青窯窯隔（MIQ.27～29）、閩清義窯老猫坑4資料のうちの3点（MIQ.20～22）が含まれた。三明中村垵瑶窯と閩清窯の全てビロースクタイプの白磁であり、胎土分析の第2クラスターとほぼ同様の結果となった。今帰仁城跡出土品はNA.03・04・06のビロースクタイプが含まれ、釉薬の分析と形態分類とが矛盾しない結果となった。

第3クラスターには閩清義窯下窯崗3資料のうちの1点（MIQ.03）、閩清安仁溪2資料のうちの1点（MIQ.04）、閩清義窯上武坪（MIQ.06）、南平茶洋窯（NAP.13）が含まれ南平茶洋窯と閩清窯の全てビロースクタイプの白磁であった。今帰仁城跡出土品は含まれなかった。

第4クラスターはクラスターにならず、単独であるが浦口窯西山第2地点3資料のうちの1点（PUK.25）の今帰仁タイプである。

第5クラスターは今帰仁城跡出土のNA.02・05の今帰仁タイプの白磁であるが、この2点は釉が薄いため、釉のみの分析ができずに表面から分析しており、分析値に胎土の影響が出ているものと考えられる。

以上をまとめると窯跡資料では第1クラスターは閩清窯のビロースクタイプ、浦口窯の今帰仁タイプ・今帰仁関連タイプ、莆田庄辺窯碗窯壟が混在するという結果となり、胎土と同様に閩清窯、浦口窯もしくはビロースクタイプ、今帰仁タイプと大きく二分することはできなかったものの、第2・第3クラスターに閩清窯のビロースクタイプがまとめられた。ただし浦口窯西山第2地点、閩清義窯下窯崗、閩清安仁溪、閩清義窯老猫坑の資料は一部が別クラスターに分類されており、これが胎土分析同様、方法の問題や、分析機器の精度の問題、資料数の少なさによるものか、それとも同一の窯でも複数の釉を使用するのかなど不明の点が残された。

今帰仁城跡資料ではビロースクタイプのNA.03・04・06が閩清窯のクラスターに入った。NA.01・07は浦口窯・閩清窯が混在するクラスターに入ったが、今帰仁タイプのNA.07は胎土と同じく浦口窯上元山（PUK.07）と類似度が高い。莆田庄辺窯製品に類似するNA.01については莆田庄辺窯

碗窯壟 (PUT. 14) がもっとも類似する結果となった。表面から分析した NA. 02・05は正確な分析値が得られず別クラスターとなった。

1.3. 小結

窯跡資料が少なすぎて産地推定は難しいが、限られた資料であえて検討してみる。

胎土・釉薬とも閩清窯、浦口窯と大きく二分することはできなかった。しかしながら、閩清窯だけのクラスター、浦口窯だけのクラスターもあり、ある程度分類は可能である。これらの結果から、今帰仁城跡出土品の検討をまとめると表4のようになる。NA. 03～07は形態分類と矛盾しない結果となった。NA. 01は胎土・釉薬とも閩清窯、浦口窯が混在するクラスターに入ったが、莆田庄辺窯碗窯壟 (PUT. 14) ともっとも類似する結果となり、形態・胎土・釉薬から莆田庄辺窯の製品である可能性が高いと考えられる。分析した今帰仁タイプのうち、NA. 05・07は浦口窯上元山にもっとも類似していた。釉薬の正確な分析値が得られなかった NA. 02は胎土の分析では閩清窯のクラスターに入っており、唯一形態分類と矛盾している。

2. 福岡市埋蔵文化財センター設置機器による今帰仁城跡資料・博多遺跡群資料の胎土分析

珪酸塩研究所が分析した今帰仁城跡出土白磁7点と博多遺跡群出土白磁28点の分析を行った。博多遺跡群資料の詳細は第3章第3節2 表1・2を参照されたい。

分析は福岡市埋蔵文化財センター設置のエネルギー分散型微小部蛍光 X 線分析装置 (EDAX 社製 Eagle μ -probe) で行った。測定条件はモリブデン管球、電圧35kV、資料室の測定雰囲気は真空、測定範囲径0.3mm、測定時間300秒である。分析元素は主成分元素である Na、Mg、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe を対象とし、この8元素の酸化物の和を100とする重量濃度比を求めた。定量計算は標準資料なしのファンダメンタルパラメータ法による。

資料は非破壊であり、測定は破断面の汚染の少なそうな部分を選んだ。陶磁器の胎土はよく溶けて

表4 今帰仁城跡出土白磁胎土分析の検討

	タイプ	胎土	釉薬	所見
NA. 01	莆田庄辺窯か?内底輪状釉剥ぎ	混在	混在	混在するクラスターに入ったものの、胎土・釉薬とも莆田庄辺窯出土品ともっとも近い結果となり、形態分類と矛盾しない結果になった。
NA. 02	今帰仁タイプ/内底輪状釉剥ぎ	閩清	不明	釉薬は測定できなかった。胎土は閩清窯のクラスターに入り、形態分類と異なる結果となった。
NA. 03	ピロースクタイプⅢ類/内底印花蓮華文	閩清	閩清	胎土・釉薬ともに閩清窯のクラスターに入り、形態分類と矛盾しない結果になった。
NA. 04	ピロースクタイプⅡ類	混在	閩清	胎土は混在するクラスターに入ったものの、釉薬は閩清窯のクラスターに入り、形態分類と矛盾しない結果になった。
NA. 05	今帰仁タイプ/内底露胎	浦口	不明	釉薬は測定できなかった。胎土は浦口窯のクラスターに入り、上元山地点にもっとも類似した。形態分類と矛盾しない結果となった。
NA. 06	ピロースクタイプⅠ類	混在	閩清	胎土は混在するクラスターに入ったものの、釉薬は閩清窯のクラスターに入り、形態分類と矛盾しない結果になった。
NA. 07	今帰仁タイプ/内底露胎	浦口	混在	釉薬は混在するクラスターに入ったものの、胎土は浦口窯のクラスターに入り、上元山地点にもっとも類似した。形態分類と矛盾しない結果になった。

いるとはいえ不均一であり、また測定面積も微小のため、測定結果にはばらつきが見られることが予想された。また、埋没時の汚染も考慮する必要がある。そこで複数箇所測定し、代表的な分析値を採用した。NA.05・772500560・832700029・832700030については釉薬の層が薄く、釉薬に関する分析はできなかった。

結果は表5の通りである。これらの結果をクラスター分析し、胎土について図4、釉薬について図5のデンドログラムを得た。

2.1. 胎土

距離4.4付近で切断することで、3つのクラスターに分類した。

第1クラスターには今帰仁城跡出土NA.03・06のビロースクタイプ2点と博多遺跡群出土のビロースクタイプ10点、類今帰仁タイプ1点の13資料がある。類今帰仁タイプの772500560を除くとビロースクタイプが占めた。このクラスターを「ビロースク」としておく。

第2クラスターには14資料ある。今帰仁城跡出土品ではNA.02・05・07の今帰仁タイプ3点とNA.01の莆田庄辺窯とみられるもの、NA.04のビロースクタイプ各1点があり、博多遺跡群出土品では今帰仁タイプ3点、類今帰仁タイプ1点、浦口窯と思われるもの4点、ビロースクタイプの1点がある。NA.04・024400200の2点を除けば今帰仁関連のタイプが占めている。さらに、今帰仁タイプと浦口窯と思われるものの比率が高い。このクラスターを「今帰仁・浦口」としておく。

第3クラスターには博多遺跡群出土の8資料がある。ビロースクタイプ2点のほかは今帰仁関連のタイプが占めている。そのなかでも、類今帰仁タイプの比率が高い。このクラスターを「類今帰仁」としておく。

2.2. 釉薬

釉薬は距離3.7付近で切断することで3つのクラスターに分類した。

第1クラスターには9資料があり、今帰仁城跡出土の今帰仁タイプNA.07と博多遺跡群出土の今帰仁タイプ2点、類今帰仁タイプ2点、浦口窯と思われるもの1点、ビロースクタイプ3点である。やや今帰仁関連タイプの比率が高い。このクラスターを「今帰仁関連?」としておく。

第2クラスターには13資料ある。今帰仁城跡出土ビロースクタイプNA.03・04・06の3点と博多遺跡群出土ビロースクタイプ9点、類今帰仁タイプ1点である。類今帰仁タイプの832700028を除くとビロースクタイプが占めた。このクラスターを「ビロースク」としておく。

第3クラスターには9資料があり、今帰仁城跡出土品では莆田庄辺窯とみられるNA.01と今帰仁タイプNA.02各1点、博多遺跡群出土品では今帰仁タイプ2点、類今帰仁タイプ2点、浦口窯と思われるもの2点、ビロースクタイプ1点である。ビロースクタイプ884305419を除くと今帰仁関連タイプが占めた。このクラスターを「今帰仁関連」としておく。

2.3. 小結

福岡市埋蔵文化財センター設置の機器でおこなった胎土と釉薬の分析をまとめると表6のようになる。かなりの確率で形態分類と胎土・釉薬の分析が一致している。今後窯跡出土品との直接比較ができれば、産地についても考察が可能になろう。

表5 福岡市埋蔵文化財センター設置機器による胎土・釉薬の分析値

	胎土 (wt%)								釉薬 (wt%)							
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃
NA. 01	0.00	1.00	24.85	70.02	2.23	0.09	0.23	1.59	0.20	0.77	13.45	67.84	1.93	14.22	0.18	1.41
NA. 02	0.22	0.97	23.61	67.46	4.35	0.16	0.37	2.85	1.16	0.45	9.98	71.17	2.78	13.03	0.19	1.24
NA. 03	0.76	0.80	24.53	68.16	3.84	0.07	0.19	1.65	0.55	0.59	14.45	69.41	4.32	9.70	0.10	0.89
NA. 04	0.00	0.68	23.02	71.88	2.66	0.06	0.18	1.52	0.74	0.81	17.93	68.88	4.58	5.94	0.17	0.96
NA. 05	0.00	0.87	21.34	72.00	2.97	0.09	0.31	2.42	-	-	-	-	-	-	-	-
NA. 06	0.79	0.86	23.65	69.80	3.07	0.07	0.15	1.61	0.18	0.50	17.67	66.77	4.42	9.34	0.13	0.99
NA. 07	0.38	1.03	20.18	72.52	3.20	0.11	0.31	2.28	0.00	0.88	18.35	68.59	3.67	5.85	0.27	2.39
772500560	0.68	1.19	22.62	69.66	3.64	0.17	0.15	1.90	-	-	-	-	-	-	-	-
783301398	0.00	1.12	22.37	71.54	2.59	0.13	0.22	2.02	0.00	0.80	21.07	68.74	3.34	4.33	0.25	1.47
832700028	0.00	0.63	19.04	74.88	4.10	0.24	0.14	0.97	0.99	0.62	16.75	66.48	4.31	9.87	0.15	0.84
832700029	0.56	1.02	24.76	66.42	4.32	0.31	0.34	2.28	-	-	-	-	-	-	-	-
832700030	0.68	0.97	21.59	70.73	3.20	0.13	0.25	2.45	-	-	-	-	-	-	-	-
840405582	0.31	0.71	23.85	70.12	3.25	0.22	0.17	1.38	0.26	0.63	19.09	68.11	4.16	6.25	0.17	1.32
840405584	0.21	0.83	23.55	70.24	3.38	0.31	0.18	1.30	0.65	0.55	14.85	72.10	4.48	6.72	0.12	0.53
840405585	0.00	0.73	22.95	70.90	3.61	0.37	0.20	1.24	0.43	0.56	17.32	69.31	4.12	7.52	0.09	0.64
840405588	0.72	0.96	21.28	71.60	3.67	0.60	0.15	1.01	0.36	0.73	16.74	70.53	3.23	7.63	0.13	0.66
840405645	0.42	0.87	23.41	68.60	4.81	0.30	0.21	1.38	0.30	0.66	16.26	68.62	5.22	8.03	0.12	0.80
840405646	0.80	5.21	23.83	65.53	2.92	0.16	0.19	1.36	0.58	0.64	14.57	67.63	6.38	9.00	0.18	1.03
840405648	0.49	0.94	23.77	69.65	3.36	0.33	0.12	1.35	0.61	0.59	16.17	70.36	4.43	7.03	0.14	0.66
840405649	1.60	3.65	21.41	68.72	3.17	0.23	0.11	1.11	0.42	2.18	17.64	69.33	4.39	4.95	0.08	1.03
850900315	0.41	0.95	22.86	70.51	3.50	0.17	0.17	1.43	0.48	0.63	16.81	68.07	3.91	9.24	0.11	0.75
874010220	0.25	1.15	21.93	71.95	2.76	0.23	0.20	1.52	0.14	0.88	16.61	63.12	3.22	14.26	0.13	1.65
884305419	0.34	0.68	20.81	73.30	3.24	0.15	0.14	1.34	1.31	1.24	13.12	71.19	5.04	6.24	0.28	1.56
884305579	0.00	0.54	17.79	76.45	3.35	0.26	0.18	1.43	0.62	0.78	16.45	66.12	4.60	10.36	0.13	0.94
886200331	0.18	0.95	20.91	74.09	2.17	0.11	0.17	1.41	0.51	0.90	16.73	67.69	2.25	10.79	0.17	0.96
886200332	0.00	0.62	19.17	75.73	2.56	0.13	0.17	1.61	0.22	1.01	19.72	74.56	2.46	0.51	0.16	1.37
886200333	0.35	0.75	19.90	74.60	2.64	0.27	0.16	1.34	0.46	0.92	20.33	70.56	2.64	3.80	0.13	1.16
896350464	0.79	1.23	23.60	69.85	2.31	0.13	0.19	1.89	0.48	0.94	21.43	71.60	2.44	1.38	0.18	1.55
911100322	0.59	0.90	23.62	70.54	2.24	0.28	0.22	1.62	0.63	0.45	14.46	60.86	2.09	14.30	0.14	7.06
955410953	0.24	0.93	17.92	74.38	4.46	0.33	0.18	1.55	0.00	0.94	17.21	67.07	4.54	8.48	0.19	1.57
955411360	0.36	0.88	23.70	68.09	4.02	0.27	0.29	2.39	0.43	0.90	15.92	62.52	3.56	14.75	0.16	1.77
995201106	0.47	0.73	21.25	71.66	3.18	0.22	0.30	2.20	0.36	0.63	15.38	60.16	2.72	16.36	0.22	4.16
000600771	0.54	0.82	22.60	69.79	4.12	0.22	0.17	1.74	0.98	0.60	17.04	66.60	4.83	9.11	0.12	0.71
024400200	0.30	1.10	23.90	68.61	3.66	0.19	0.29	1.93	0.16	0.74	18.95	70.19	4.29	4.48	0.16	1.02
056600344	0.94	1.36	23.07	67.63	4.17	0.18	0.28	2.38	1.03	0.90	21.43	61.13	4.12	9.46	0.21	1.72

NA. 05・772500560・832700029・832700030は釉層薄く分析不能

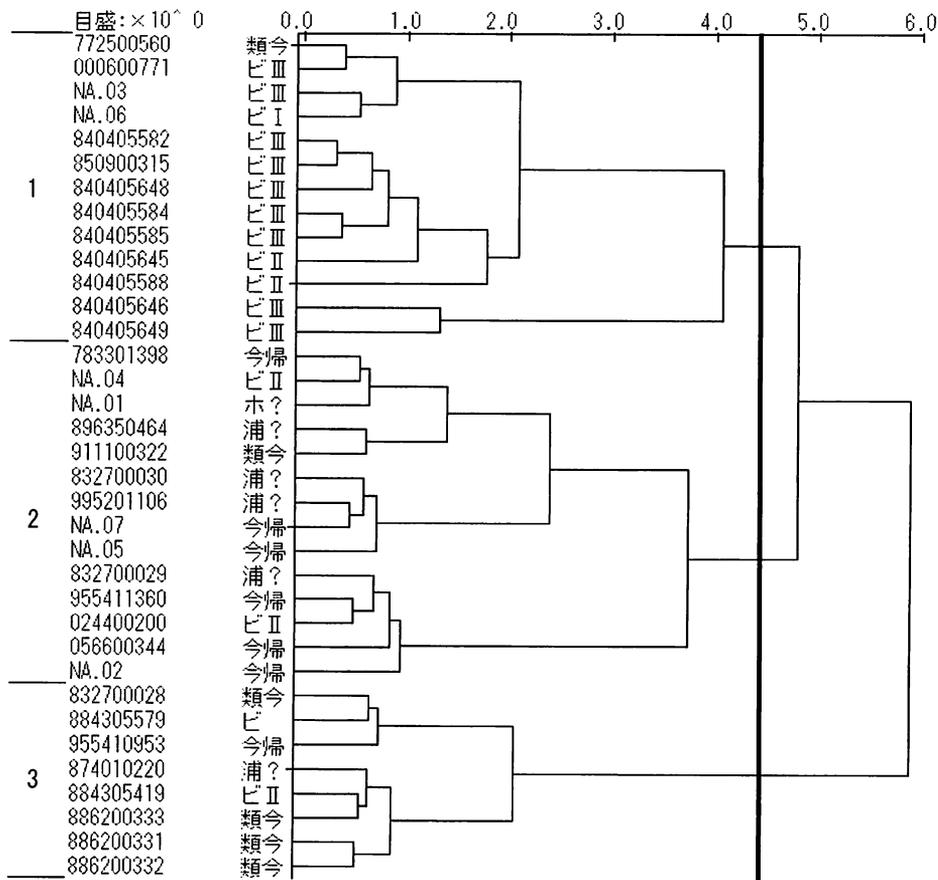


図4 今帰仁城跡と博多遺跡群出土白磁胎土のクラスター分析

凡例：Ⅰ：ピロースタイプⅠ類・Ⅱ：同Ⅱ類・Ⅲ：同Ⅲ類・今帰：今帰仁タイプ・ホ：浦田庄辺窯製品・浦：浦口窯製品・類今：類今帰仁タイプ

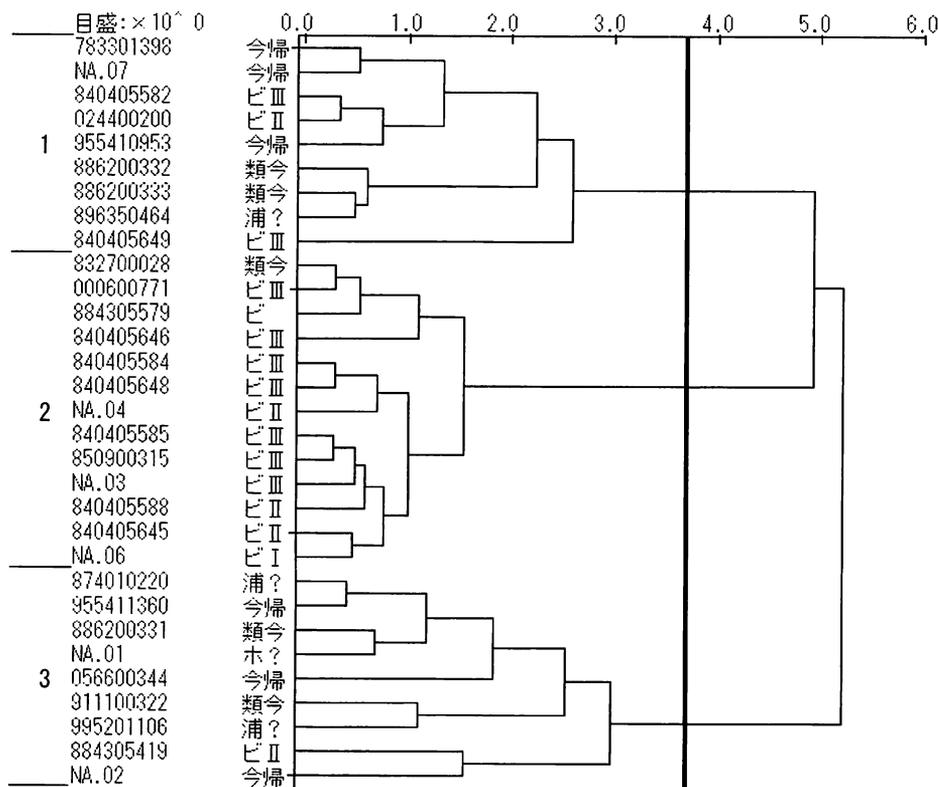


図5 今帰仁城跡と博多遺跡群出土白磁釉葉のクラスター分析

表6 今帰仁城跡と博多遺跡群出土白磁胎土分析の検討

	タイプ	胎土・釉調	胎土	釉薬
NA. 01	莆田庄辺窯か？内底輪状釉剥ぎ	淡灰白色磁質・精良、やや灰色帯透明釉、内底に白泥付	今帰仁・浦口	今帰仁関連
NA. 02	今帰仁タイプ／内底輪状釉剥ぎ	暗灰色磁質、やや青味帯淡灰白色不透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連
NA. 03	ビロースクタイプⅢ類／内底印花蓮華文	淡灰白色磁質、やや水色帯乳白色釉	ビロースク	ビロースク
NA. 04	ビロースクタイプⅡ類	淡灰白色磁質、淡灰白色透明釉	今帰仁・浦口	ビロースク
NA. 05	今帰仁タイプ／内底露胎	灰色磁質、淡オリーブ色透明釉	今帰仁・浦口	測定不能
NA. 06	ビロースクタイプⅠ類	淡灰白色磁質、やや黄味帯乳白色釉	ビロースク	ビロースク
NA. 07	今帰仁タイプ／内底露胎	淡灰白色磁質、淡オリーブ色不透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連？
783301398	今帰仁タイプ／露胎・碗	淡灰白色磁質、淡灰オリーブ色透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連？
955410953	今帰仁タイプ／露胎・碗	淡灰白色磁質、青色帯透明釉	類今帰仁	今帰仁関連？
955411360	今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	淡灰白色磁質、やや青灰色帯透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連
056600344	今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	灰色磁質、やや青味帯淡灰色半透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連
772500560	類今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	白色磁質、やや黄味帯淡灰色半透明釉、高台に白泥	ビロースク	測定不能
832700028	類今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	白色磁質、淡灰白色透明釉、高台に白泥	類今帰仁	ビロースク
911100322	類今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	白色磁質、やや灰色帯透明釉、高台に白泥	今帰仁・浦口	今帰仁関連
886200333	類今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	灰白色磁質、灰白色不透明釉、高台に白泥	類今帰仁	今帰仁関連？
886200331	類今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	淡黄褐色完全磁質でない、やや黄味帯淡灰白色不透明釉	類今帰仁	今帰仁関連
886200332	類今帰仁タイプ／輪剥ぎ・碗	灰白色磁質、淡灰白色透明釉、高台に白泥	類今帰仁	今帰仁関連？
874010220	浦口窯？・小形皿(外面蓮弁文)	淡灰白色磁質、やや青灰色帯透明釉	類今帰仁	今帰仁関連
896350464	浦口窯？・露胎碗	灰色磁質、灰青色透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連？
832700030	浦口窯・碗	淡灰白色磁質、淡青緑色不透明釉	今帰仁・浦口	測定不能
832700029	浦口窯・碗	淡灰白色磁質、やや黄味帯透明釉	今帰仁・浦口	測定不能
995201106	浦口窯・碗(外面蓮弁文)	灰色磁質、ややオリーブ色帯透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連
840405645	ビロースクⅡ類碗	灰白色磁質、灰青色透明釉	ビロースク	ビロースク
884305419	ビロースクⅡ類碗	白色磁質、やや青味帯淡灰白色半透明釉	類今帰仁	今帰仁関連
024400200	ビロースクⅡ類碗	淡灰白色磁質、青味帯透明釉	今帰仁・浦口	今帰仁関連？
840405588	ビロースクⅡ類碗	淡灰白色磁質、乳白色不透明釉	ビロースク	ビロースク
840405648	ビロースクⅢ類碗	淡灰白色磁質、灰色透明釉	ビロースク	ビロースク
840405649	ビロースクⅢ類碗	淡灰白色磁質、やや黄味帯透明釉	ビロースク	今帰仁関連？
840405584	ビロースクⅢ類碗	淡灰白色磁質、やや青味帯淡灰白色半透明釉	ビロースク	ビロースク
850900315	ビロースクⅢ類碗	淡灰色磁質、淡灰色透明釉	ビロースク	ビロースク
840405585	ビロースクⅢ類碗	白色磁質、やや青味帯淡灰白色不透明釉	ビロースク	ビロースク
000600771	ビロースクⅢ類碗	淡黄白色磁質、淡黄白色半透明釉	ビロースク	ビロースク
840405582	ビロースクⅢ類Ⅲ	淡灰白色磁質、青味帯淡灰白色不透明釉	ビロースク	今帰仁関連？
884305579	ビロースクⅡ or Ⅲ類Ⅲ	淡灰白色磁質、やや青味帯透明釉	類今帰仁	ビロースク
840405646	ビロースクⅢ類碗	灰白色磁質、やや黄味帯透明釉	ビロースク	ビロースク

おわりに

今回の分析では特に窯跡資料の数が少なかったため、限られた資料との類似度の比較しかできていない。生産窯の推定を行うためには同一の窯資料の数を更に増やし、窯の中での胎土の相違をみる必要があるし、今回対象にならなかった窯の資料も、類似していない事を示すために分析を行う必要がある。また、今回類似していた窯以上に類似する窯がある可能性は十分に考えられるため、今回の分析結果は途中経過として考えておく必要があり、今後、窯跡資料の分析結果が増えれば、再検討を要するものである。

文献

小椋将弘 2006 『Excelで簡単多変量解析』講談社

金武正紀 1988 「ビロースクタイプの白磁碗について」『貿易陶磁研究』N0. 8、pp. 148～157、日本貿易陶磁研究会

金武正紀 2007 「今帰仁タイプ白磁碗」『南島考古』No. 26、pp. 187～196、沖縄考古学会

森本朝子・田中克子2004 「沖縄出土の貿易陶磁の問題点－中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁－」『グスク文化を考える』、pp. 353～370、新人物往来社

今帰仁タイプとビロースクタイプの年代的位置付けと貿易港

金武正紀

KIN Seiki

今帰仁村教育委員会

Board of Education NAKIJIN Village

1. 今帰仁タイプの年代的位置付け

1.1. 今帰仁タイプ白磁碗と共伴陶磁器

今帰仁タイプ白磁碗との共伴陶磁器で最も注目されるのは今帰仁城跡主郭の第9層、第7層である⁽¹⁾。

今帰仁城跡主郭第9層（築城前夜）

第1図の12が今帰仁タイプI類で、その共伴陶磁器で1の青磁劃花文碗や2・3の青磁櫛描文皿（珠光青磁）など若干古いタイプも共伴しているが、4～10の青磁鎬蓮弁文碗が最も多く第9層の主体遺物と考えられる。また、11の白磁口禿碗、14の白磁口禿皿なども共伴しており、第9層の年代を考える場合、今帰仁タイプI類、青磁鎬蓮弁文碗、白磁口禿碗・皿の共伴を基準として考えたい。

今帰仁城跡主郭第7層（今帰仁城第I期）

第2・3図が第7層における白磁と青磁の共伴である。第2図1～6が今帰仁タイプである。この第7層において今帰仁タイプが最も多く、今帰仁タイプの基準層序と考えられる。共伴としては白磁口禿碗・皿（図2の11～13）が多く、共伴の主な白磁と考えられる。注目されるのは、この第7層でビロースクタイプI類（図2の7・8）とII類（図2の9・10）が登場することである。青磁では鎬蓮弁文碗（第3図2～6）が第9層に続いて多く出土しているが、ラマ式蓮弁文碗（図3の8）や弦文帯碗（図5の7）などが登場する。皿では口折の古手皿（図3の11～13）が多く、共伴皿の主体と考えられる。碗・皿以外で注目されるのは15の酒会壺である。また、16の大海茶入、17の肩衝茶入など茶入の登場も注目される。

今帰仁城跡主郭第6層と第5層（今帰仁城第II期）

第6層は造成土であるが、僅かに遺物を包含する。これは第5層からの落ち込みが多いと考えられたので、基本的には第5層の遺物と考えておいた。この層で注目されるのは今帰仁タイプI～III類は消えて、白磁大型外反碗（庄辺窯系）（図4の8）が登場することである。さらに、この時期にビロースクタイプIII類碗（図4の6・7）が登場する事も注目される。青磁では内底に印花のある外面無文の下脹れ外反碗（図5の1～6）と、高麗青磁（第5図21）が登場することも注目される。

口禿碗（図4の1）やビロースクタイプI（図4の2）、ビロースクタイプII（図4の3～5）の終末とビロースクタイプIII（図4の6・7）の登場はこの6・5層を境にして大きく変化する。第4・3層の造成層を挟んで第2・1層の白磁の主体はビロースクタイプIIIとなる。

1.2. 今帰仁タイプ白磁碗の編年

今帰仁タイプ白磁碗は今帰仁城跡主郭第9層で初めて登場（第1図12）する。その共伴遺物として第3図4の砧系鎬蓮弁文碗がある。このタイプは中国の古墓から出土しており、1272年の窖藏出土と1275年の古墓出土品が報告⁽²⁾されている。また、そのほかの鎬蓮弁文碗は13世紀末～14世紀初頃と

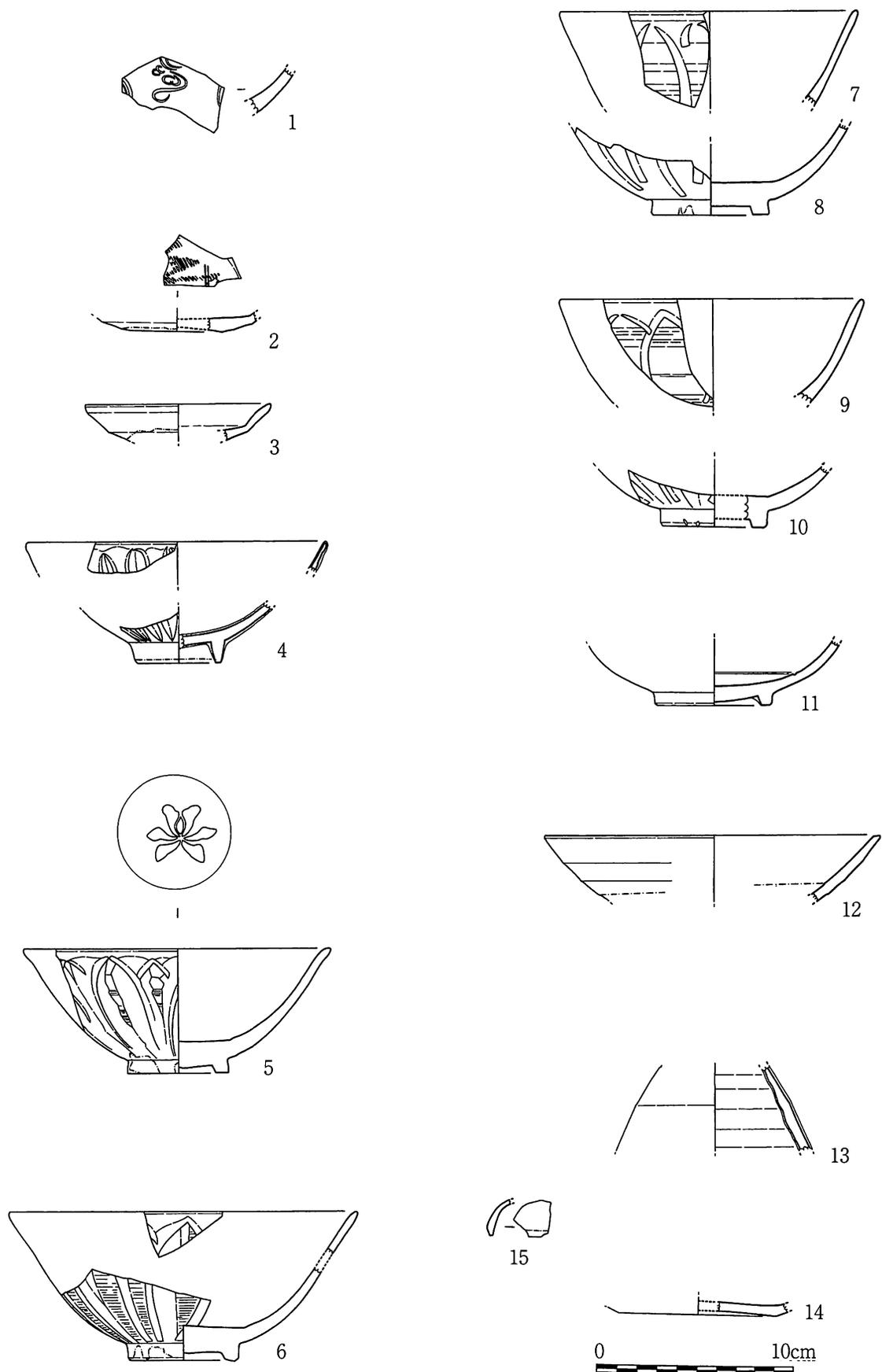


图1 今帰仁城跡主郭第9層出土陶磁器 (S = 1/3)

青磁劃花文碗(1)、青磁樺描文皿(2·3)、青磁蓮弁文碗鉢(4~10)、白磁口禿碗(11)、今帰仁タイプI類(12)
白磁瓶(13)、白磁口禿皿(14)、青白磁合子蓋(15)

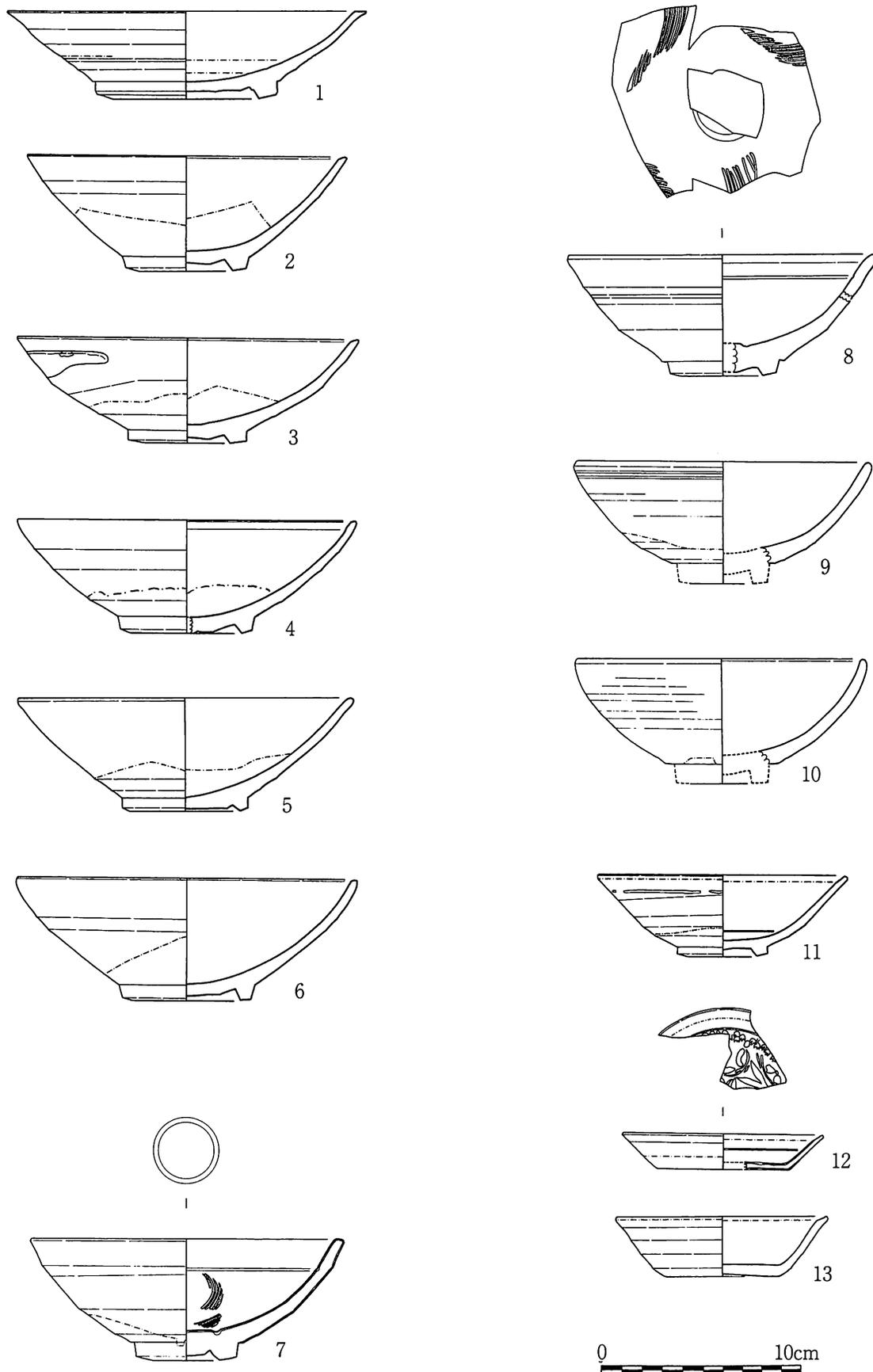


図2 今帰仁城跡主郭第7層出土陶磁器(1) (S=1/3)

今帰仁タイプ白磁碗(1~6)、ピロースクタイプ白磁碗(7~10)、白磁口禿碗(11)、白磁口禿皿(12・13)

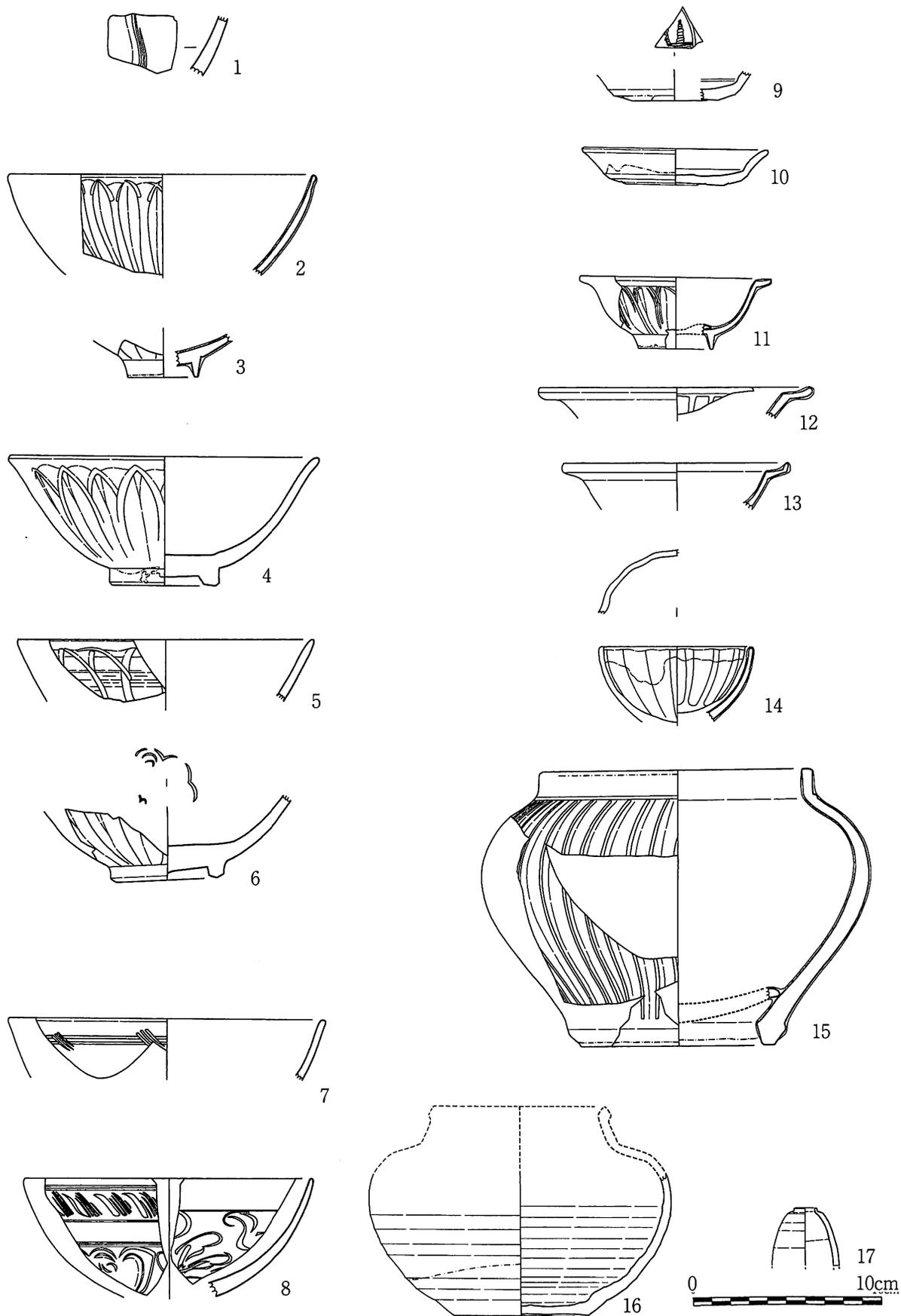


图3 今帰仁城跡主郭第7層出土陶磁器(2) (S=1/3)
 青磁劃花文碗(1)、青磁櫛描文皿(2~6)、青磁弦文帶碗(7)、青磁ラマ式連弁文碗(8)、青磁櫛描文皿(9·10)
 青磁口折皿(11~13)、青磁杯(14)、青磁酒会壺(15)、大海茶入(16)、肩衝茶入(17)

考えられていることから、今帰仁タイプが琉球へ初めて入ってきたのは13世紀後半と考えられる。

今帰仁タイプが最も大量に出土するのは第7層であり、この時期がピーク時と考えられる。第7層での共伴遺物はビロースクタイプ（図2の7～10）、青磁鎬蓮弁文碗（図3の2～6）、青磁弦文帯碗（図3の7）、青磁酒会壺（図3の15）などであるが、それと同タイプが新安沈船（1323年）の遺物⁽³⁾に多くみられる。このことをふまえ、さらに第9層との時間差なども考えて13世紀末～14世紀初頃が今帰仁タイプのピーク時と考えておきたい。

今帰仁タイプのⅠ～Ⅲ類は第7層で終り、第5層から今帰仁タイプに類似する白磁大型外反碗（庄辺窯系）（図4の8）が登場する。第5層はビロースクタイプⅠ・Ⅱ（図4の2～5）の終末とビロースクタイプⅢ（図4の6・7）が登場する時期であり、白磁大型外反碗（庄辺窯系）と共に層序的にも14世紀中頃と考えられる。

2. ビロースクタイプの年代的位置付け

2.1. ビロースクタイプ白磁碗と共伴陶磁器

共伴関係を示す最も標式的な層序は今帰仁城跡主郭の層序である。ビロースクタイプは第9層では出土していないが、第7層で初めて登場する。第2・3図でみると、今帰仁タイプ白磁碗、白磁口禿碗・皿、青磁鎬蓮弁文碗・皿など同時期の陶磁器と共伴している。また、第6・5層でも多く出土している。第6・5層は第4・5図に示しているが、ここで最も注目されるのは今帰仁タイプは姿を消して、ビロースクタイプⅢ類「外反碗」が登場することである。

第5図1～7はまとめて埋められた祭祀遺物と考えられる一括遺物である。この中の青磁碗は新安沖沈船の遺物と同類である。また、図5の21の高麗青磁杯も年代を決める陶磁器である。

第2層や第1層になると、ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は伝世品的に僅かに出土するが、ビロースクタイプⅢ類が大量に出土し、今帰仁城の最も隆盛期を代表する白磁碗となる。

2.2. ビロースクタイプ白磁碗の編年

ビロースクタイプの編年で最も重要な層序は今帰仁城跡主郭の第7層、第6・5層、第2層下部⁽¹⁾である。最下層の第9層（13世紀後半）では出土していないが、第7層で最初に登場する。ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は新安沈船（1323年）の積荷にもみられることと⁽²⁾、今帰仁における第9層との時間差を考慮して13世紀末～14世紀前半と考えられる。

これまで白磁外反碗と呼んでいたビロースクタイプⅢを編年する場合、今帰仁城跡主郭第5層と第2層下部の出土状況が注目される。第9層や第7層では出土していないビロースクタイプⅢが第5層で初めて登場する。第5層は14世紀中頃の層であり、14世紀中頃に初めて琉球に入ってきたと考えられる。そして、第2層下部である。この層が中国の『明實録』の「太祖實録」「太宗實録」⁽⁴⁾に登場する山北王の時代の初期頃である。第2層下部では伝世品と考えられる今帰仁タイプⅡ類（図6の1）が1点とビロースクタイプⅡ（図6の2・3）が2点出土しているが、ビロースクタイプⅢ（図6の4～8）が大量に出土しており、ビロースクタイプⅠ・Ⅱにかわって、Ⅲ類の時代と考えられる。これらのことから、ビロースクタイプⅢ類は14世紀中頃～15世紀初頃と考えられる。

3. 今帰仁タイプとビロースクタイプの生産地調査の成果

2007年9月2日～9日、福建省の古窯調査に参加した。これは熊本大学文学部木下尚子教授を代表とする日中共同研究「13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究－中国福建省を中心

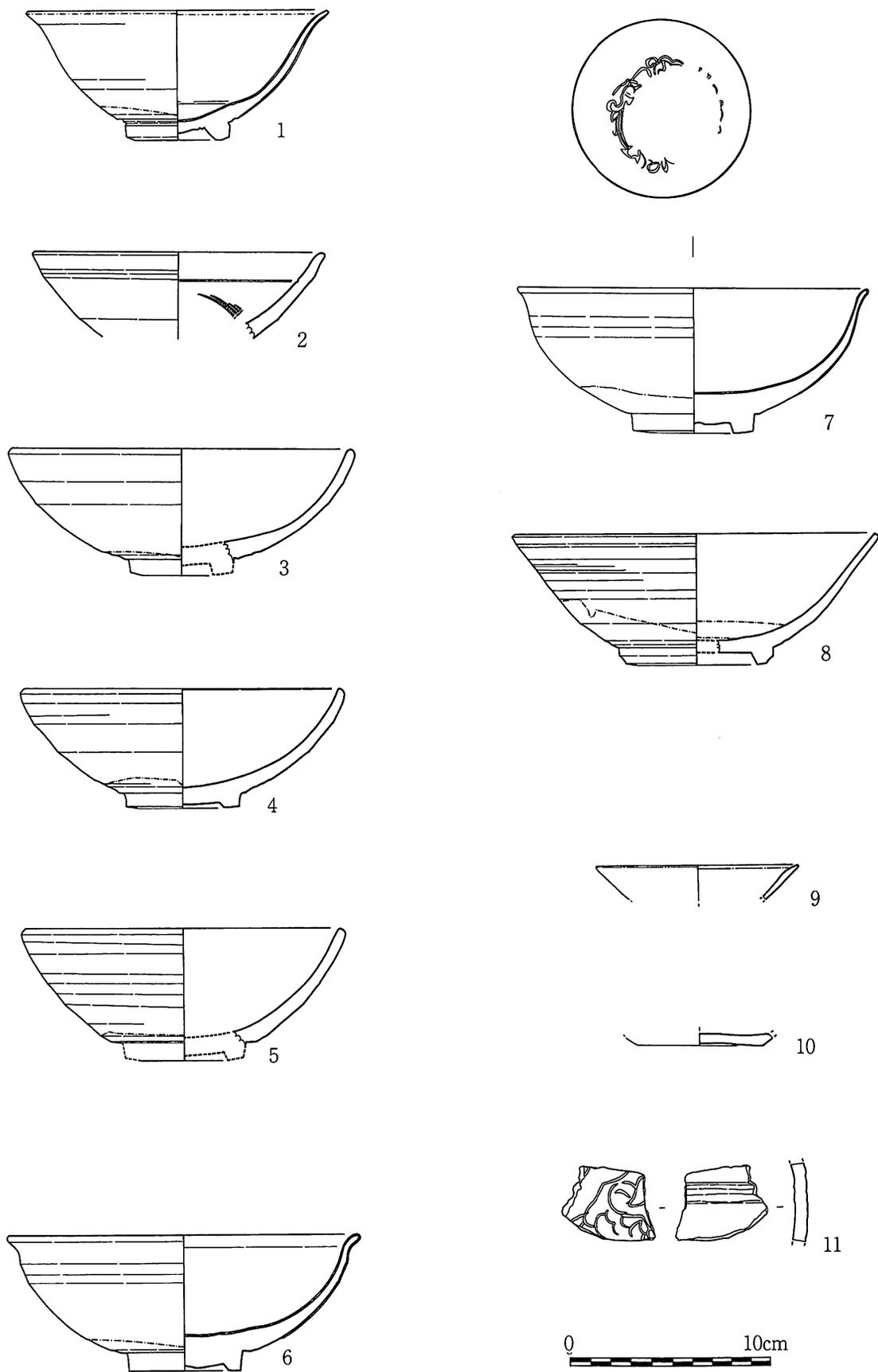


図4 今帰仁城跡主郭第6・5層出土陶磁器(1) (S=1/3)
 白磁口禿碗(1)、ピロースクタイプ(2~7)、白磁大型外反碗(8)、白磁口禿皿(9・10)、白磁瓶(11)

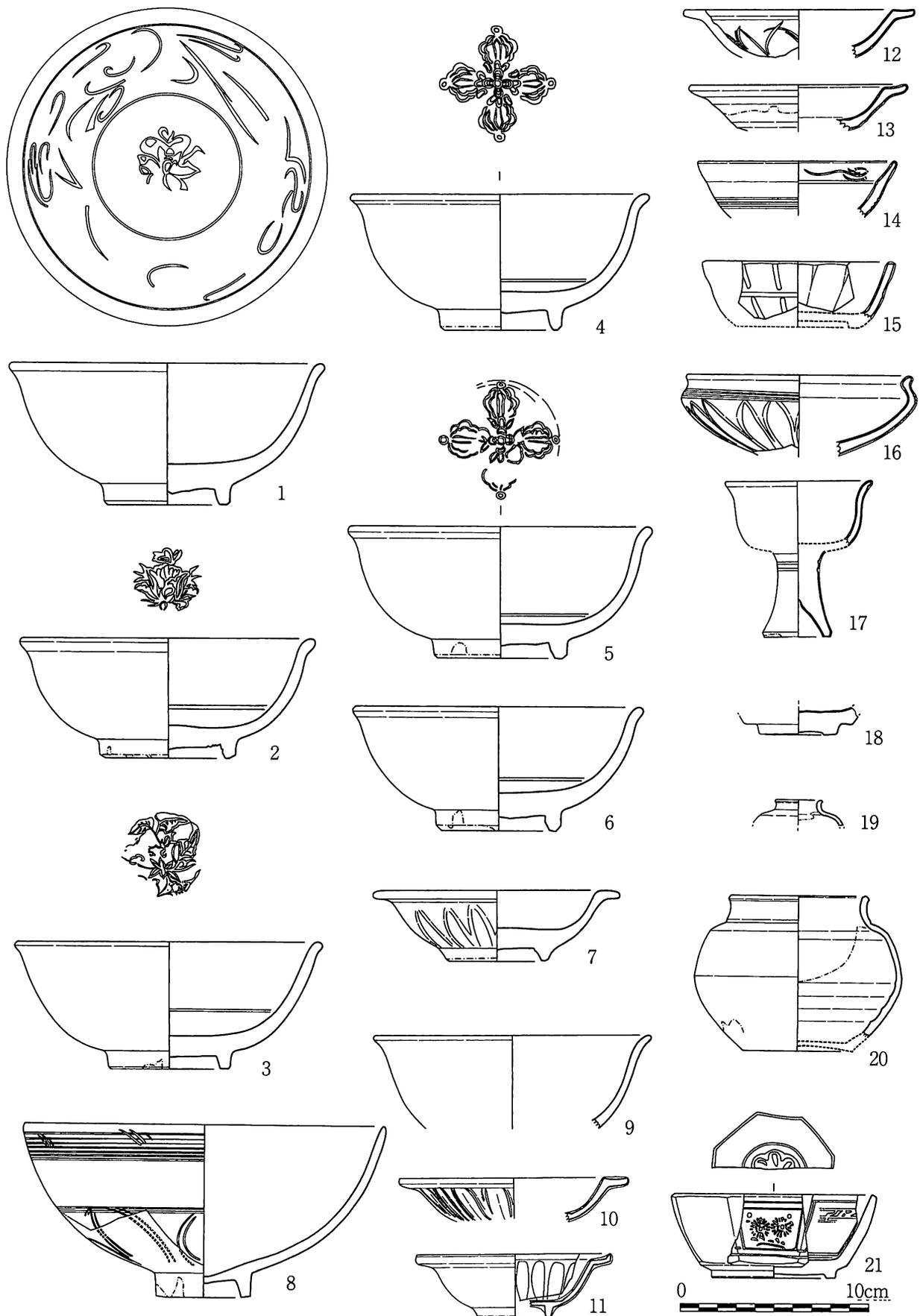


图5 今帰仁城跡主郭第6・5層出土陶磁器(2) (S=1/3)

青磁碗・皿一括遺物(1~7)、青磁弦文帶碗(8)、青磁無文外反碗(B窯系)(9)、青磁口折皿(10~14)、
青磁杯(15~17)、天目茶碗(18)、肩衝茶入(19)、大海茶入(20)、高麗青磁杯(21)

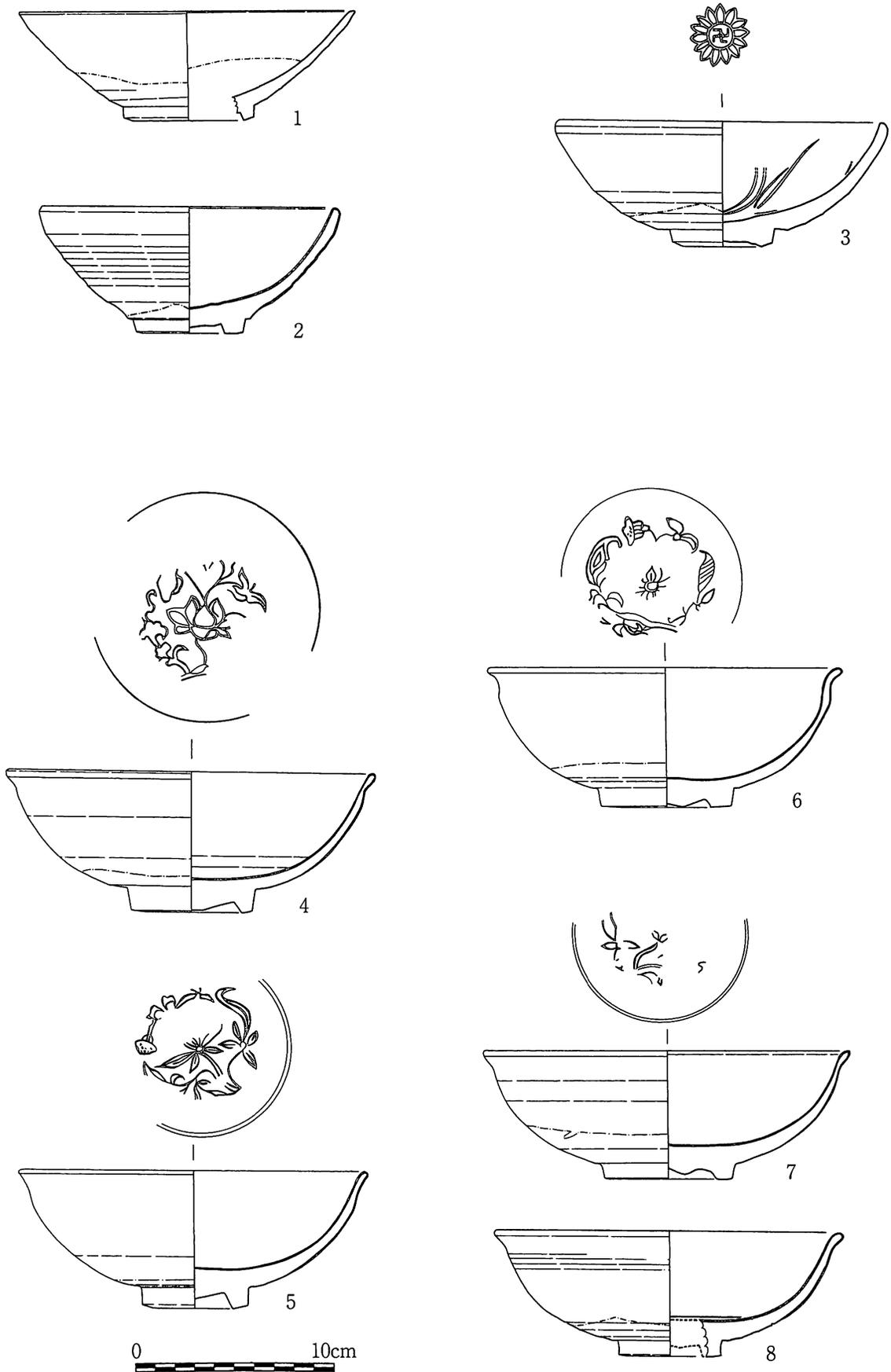


図6 今帰仁城跡主郭第2層下部出土白磁碗 (S=1/3)
 今帰仁タイプⅡ類(1)、ピロースクタイプⅡ類(2・3)、ピロースクタイプⅢ類(4~8)

に「」の調査である。今回は特に今帰仁タイプとビロースクタイプの生産地特定が主目的であった。前述のとおり筆者は20年以上ビロースクタイプと今帰仁タイプの研究を続けてきた。その生産地を実見できる時が来たのである。

9月3日、福建省博物院考古学研究所の採集陶磁器の調査から始めた。主に栗建安所長が古窯から採集した陶磁破片である。その陶磁器を見て、沖縄出土の陶磁器に類似するものが多く確認された。特に白磁大型外反碗（第4図8）と同類のものが甫田市庄辺窯で焼かれていることに注目した。

9月4日、連江県浦口窯の調査である。浦口窯からは今帰仁タイプが出土することは田中克子が報告⁽⁵⁾しているので、今回現地確認できることに大きな期待を持っていた。浦口の上元窯、西山窯、窯庫窯を調査し、いずれの窯跡からも今帰仁タイプのⅢ類は確認されたが、明確なⅠ・Ⅱ類は確認できなかった。しかし、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類は僅かな違いであり、器形、素地、施釉方法などはほぼ同じであるので、今帰仁タイプは浦口窯産であると確認した。ちなみに、上記田中報告の第4図15は今帰仁タイプⅠと考えられる⁽⁵⁾。

9月5日、閩清県義窯の井后崗窯、老猫坑窯の調査。井后崗窯では沖縄で出土する11世紀後半から12世紀の白磁玉縁碗、白磁端反櫛描文碗など古手の陶磁器が多い。この古手の白磁碗は器形、素地、施釉方法など沖縄出土の白磁碗と同じと確認した。白磁玉縁碗については、これまで同安窯系とする研究者が多かったが、今回井后崗の白磁碗を実見して閩江系と考えられる。井后崗ではビロースクタイプも1点確認できた。

老猫坑窯は道路工事で破壊されていたが、崖下に陶磁器や匣鉢などの窯道具が散布しており、窯跡であることが理解できた。その中にビロースクタイプⅠとⅡが多く見られた。しかも古手が見当たらず、すべてビロースクタイプである。ついにビロースクタイプの窯跡が確認されたのである。あとはビロースクタイプⅢの確認である。その可能性を最後の調査に期待した。

9月6日、青窯窯隔の調査である。青窯は閩江の支流安仁溪に造られたダムの西側にある洪芸村からダム沿いに約2 km南下した所にある。そのダムを挟んで東側ダム沿いに前日調査した老猫坑窯がある。窯隔ではビロースクタイプⅠ、Ⅱと、期待のⅢも確認できた。沖縄出土のビロースクタイプⅠ・Ⅱ・Ⅲは安仁溪を挟んで西の窯隔、東の老猫坑窯などで生産され、閩江を下って琉球まで運ばれたと考えられる。

9月7日、3日間で採集した陶磁器を福建省博物院で特に今帰仁タイプ、ビロースクタイプを中心に分類、実測、写真撮影。洗浄した陶磁器の中で、ビロースクタイプⅡで内体面に2本線による幅広蓮弁と内底に印花菊花文のあるのが青窯窯隔で多く採集された。以前栗氏の採集したものにもみられる。このタイプは現在のところ今帰仁城跡（23ページ第2図6）と住屋遺跡（23ページ第2図7）で出土しているのみである。

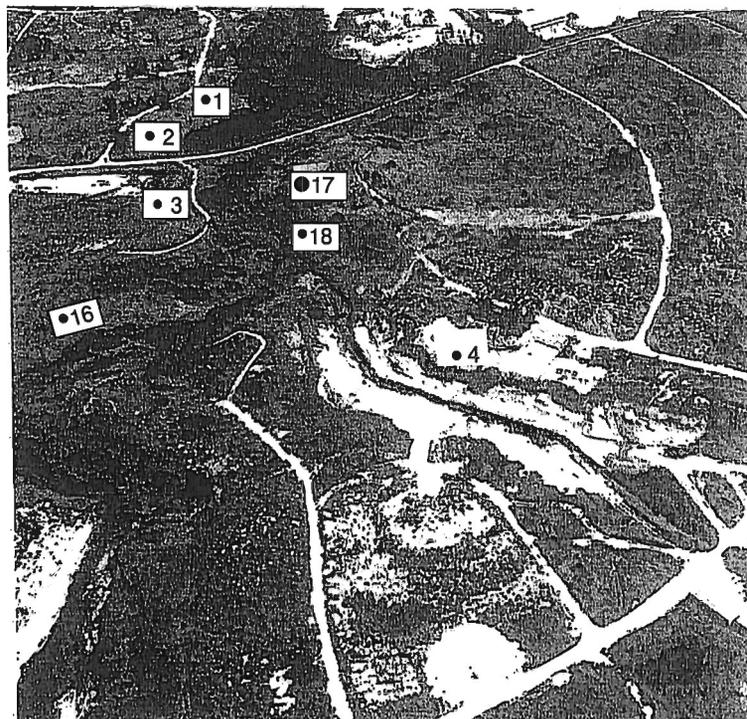
今回の調査で今帰仁タイプやビロースクタイプの生産窯がほぼ確定されたことで、生産地中国と消費地琉球の交易関係の研究が大きく前進したと考えられる。

4. 今帰仁タイプ・ビロースクタイプ白磁碗の貿易港の研究課題

中国の貿易港は生産地が閩江の近くであることから福州港が有力と考えられるが、泉州港も有力であり、広く福建とし、ここでは琉球の貿易港について考えてみたい。

今後の大きな課題として琉球の貿易港の特定が急がれる。その中で、那覇港（渡地地区）の発掘調査が2005年度に沖縄県埋蔵文化財センター、2006、2007年度に那覇市教育委員会文化財課によって発掘調査が実施され、現在資料整理が続いている。この調査で

那覇港が14世紀後半から15、16…そして現在まで貿易港として使われたことが明らかとなった。これは琉球の対外貿易を考える上で実に大きな成果である。『李朝實録』の中に「市は江辺に在り。南蛮・日本国・中原の商船来り、互に市す。」⁽⁶⁾とあり、江辺とは那覇港の埠頭一帯で、そこで市が開かれていたのである。那覇港が国際貿易港であることを示す重要な史資料である。しかし、12世紀から14世紀前半までの貿易港はまだ不明である。那覇港の前は泊港で、その前は牧港であったと歴史研究者は述べているが、その証拠はない。筆者は安謝川に注目している。安謝川河口から上流に向かう右手に多和田川（タータガーラ）という支流があり、多和田川の上流では銘苅川（メカルガーラ）と大湾川（オオワンガーラ）の二つの支流に分かれる。これらの支流に面する丘陵上に12～14世紀前半の遺跡がいくつも形成されている。多和田川の南岸丘陵上に安謝前東原遺跡・安謝東原南遺跡⁽⁷⁾、北岸丘陵上に銘苅原遺跡⁽⁸⁾・銘苅原南遺跡⁽⁹⁾、銘苅川の



◎沖縄先史時代中期（縄文晩期相当）の遺跡

- | | | |
|----------|----------|--------------|
| 1 安謝前原遺跡 | 4 嶺名園内遺跡 | 6 城岳貝塚 |
| 2 天久遺跡 | 5 嶺名貝塚 | 7 ガジャンピラ丘陵遺跡 |
| 3 山川貝塚 | | |

●グスク時代の遺跡

- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1 安謝東原遺跡 | 8 首里城跡 | 15 虎川原遺跡 |
| 2 安謝東原南遺跡 | 9 崎山御嶽遺跡 | 16 銘苅直根原遺跡 |
| 3 安謝前東原遺跡 | 10 魚下原遺跡 | 17 銘苅原遺跡 |
| 4 ヒヤジョー毛遺跡 | 11 石田グスク | 18 銘苅原南遺跡 |
| 5 天久グスク | 12 石田遺跡 | 19 三重グスク |
| 6 首里西森遺物散布地 | 13 シーマ御嶽遺跡 | 20 波上遺跡 |
| 7 玉陵南側洞穴遺跡 | 14 嶺名原遺跡 | 21 牧志御船東方遺跡 |

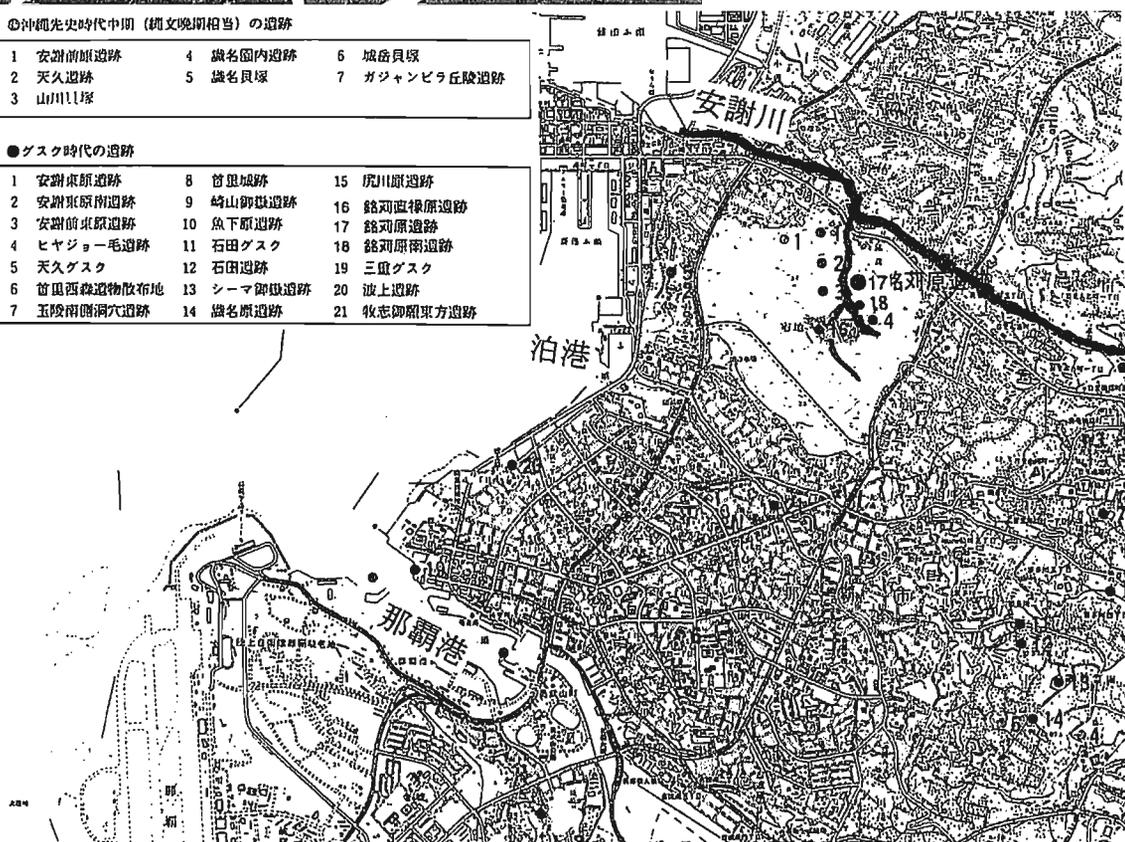


図7 那覇市と浦添市の境を流れる安謝川の支流に集中する12～14世紀前半の遺跡群

北岸丘陵上にヒヤジョー毛遺跡⁽¹⁰⁾、大湾川の西岸に直禄原遺跡⁽¹¹⁾が形成されている(図7)。

これらの遺跡からは12～14世紀前半の白磁玉縁碗、青磁劃花文碗、カムイヤキ須恵器、今帰仁タイプ、ピロースクタイプなどが多く検出されている。このことから安謝川に貿易船が入港し、そこから支流沿いに上陸し、そこに多くの遺跡が形成されたと考えられる。今後港の発掘調査によって物的証拠が期待される。

もう一つの貿易港の問題が先島の貿易港である。八重山では与那国の慶田崎遺跡⁽¹²⁾、与那原遺跡⁽¹³⁾、竹富島の新里村遺跡⁽¹⁴⁾、石垣島のピロースク遺跡⁽¹⁵⁾など、宮古では住屋遺跡⁽¹⁶⁾、高腰城跡⁽¹⁷⁾、尻川遺跡⁽¹⁸⁾などで出土している。時代は新しくなるが、石垣島名蔵湾のシタダル海底遺跡^(19・20)で15世紀の中国陶磁器が大量に発見されていることから、貿易船が名蔵湾一帯に入港したと考えられる。このことから、13～14世紀にも同じように貿易船の入港が考えられる。

福建→与那国島→石垣島→宮古島→沖縄島を結ぶルートも考えられるが、福建→八重山・宮古と福建→沖縄島の2ルートも考えられる。さらに各島が直行ルートで福建と貿易するルートも考えられる。現在のところルートを断定することはできないが、福建と琉球列島が琉球の公貿易以前の13世紀後半～14世紀前半に盛んに交易したことは今帰仁タイプ・ピロースクタイプの陶磁器からみて、紛れもない事実である。

注

1. 金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会 1991
2. 朱伯謙主編『龍泉窯青瓷』藝術家出版社 台北市 1998
3. 『新安海底遺物』文化公報部文化財管理局編 同和出版公社(ソウル) 1983
4. 『中国朝鮮の史籍における日本史料集成明實録之部(一)』図書刊行会編 1975
5. 田中克子「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁」『博多研究誌』第10号 博多研究会 2002
6. 嘉手納宗徳「李朝実録抄解題」『日本庶民生活資料集成』第27巻 三一書房 1981
7. 島弘・玉城安明・仲宗根啓他『安謝東原南遺跡』那覇市教育委員会 2000
8. 金武正紀・島弘・玉城安明・仲宗根啓他『銘苺原遺跡』那覇市教育委員会 1997
9. 當間麻子・當銘由嗣・仲嶺久里子『銘苺原南遺跡』那覇市教育委員会 2002
10. 金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市教育委員会 1994
11. 樋口麻子・當銘由嗣・仲宗根久里子『銘苺直禄原遺跡』那覇市教育委員会 2003
12. 金武正紀・大田宏好他『慶田崎遺跡』与那国町教育委員会 1986
13. 金城亀信『与那原遺跡』与那国町教育委員会 1988
14. 金武正紀・島袋洋・金城亀信他『新里村遺跡』沖縄県教育委員会 1990
15. 金武正紀・阿利直治他『ピロースク遺跡』石垣市教育委員会 1983
16. 大橋康二他『住屋遺跡(1)』平良市教育委員会 1999
17. 盛本勲・手塚直樹他『高腰城跡』城辺町教育委員会 1989
18. 砂辺和正・宮城ゆりか他『尻川遺跡』平良市教育委員会 2003
19. 『石垣島の遺跡』沖縄県教育委員会 1979
20. 石垣市史考古ビジュアル版5『陶磁器から見た交流史』石垣市 2008

生産と流通

田中克子
福岡市教育委員会

TANAKA Katsuko
Board of Education FUKUOKA City

はじめに

消費地出土の貿易陶磁器は当時の社会事情を明らかにする重要な鍵である。その陶磁器がもたらされた背景にはさまざまな要因があるからである。これは、生産地側と消費地側との情報交換・相互理解によって初めて解明されることであり、本共同研究の目指す所でもある。

本項では前に報告された消費遺跡や海底遺跡での出土状況に基づき、生産地においては把握困難な製品の年代的位置付けやその流通について概観し、本章のまとめとしたい。なお、東南アジアを含めた交易ネットワークの中での流通については次章の森本に譲り、本論では日本国内での流通の状況を基に、当時の日本及び琉球と中国との交易関係について予察する。

1. 生産地

まず、それぞれの生産地について再度まとめる。今帰仁タイプについては、現時点で判明した最も近い製品を生産しているのは浦口窯である。各地点により製品や時期の違いが若干見られ、最も類似した製品が多く確認できたのは上元山であるが、踏査地点はそれぞれ近接しており、あくまでも採集資料による分析のため確定はできない。大きく浦口窯という範囲で捉えたい。ピロースクタイプについては、その特徴である肉厚で重量感のある製品は、閩江流域一帯でかなり広範囲に生産されているが、この中でも特に琉球諸島一帯を中心として出土するものはほぼ閩清義窯・青窯の製品であることは明白である。また、出土例は少ないが円盤状高台を有する製品は南平茶洋窯の製品である可能性が高い。

2. 形態変化と消長（図1・2）

今帰仁・ピロースクタイプは生産地においてどのように位置付けられるのであろうか。それぞれの形態変化や生産の消長について、前に金武が示した編年を基に、他の消費地遺跡等での出土状況を補足して考察する。

今帰仁タイプは今帰仁城跡で13世紀後半に初めて出現すること、さらに1281年の弘安の役で元船が沈没した鷹島海底遺跡では極少量認められるものの、大半は浦口窯の同安・竜泉の影響を受けたと思われる製品であることから、その生産開始時期は概ね南宋末～元初（13世紀後半）と考えてよいだろう。また、博多遺跡群では今帰仁タイプに類する資料に内底を輪状釉剥ぎするものが多く、これらの年代が早いこと、さらに今帰仁城跡で最初に出現したものは輪状釉剥ぎするものであることから、この方法が露胎にする方法より早くに始まった可能性がある。生産のピークは元初～中期（13世紀末～14世紀前半）であり、今帰仁城跡においてもこの時期出土するものはほとんど内底を露胎とする製品である。つまり、浦口窯では南宋前期（12世紀後半代）に盛んに採用された輪状釉剥ぎによる重ね焼きの方法を踏襲しながら、次第に今帰仁タイプへと続く製品が作られるようになり、13世紀後半位に今帰仁タイプの形態が出現、同時に内底を露胎にする方法も採用され始め、この後14世紀前半にかけてこの方法が主流になったと考える。施釉後再度釉剥ぎするという途中の手間を省き、一度の浸し掛

けによって内底を露胎のまま残して重ね焼きするという方法を採用することにより、より大量の生産を目指したのではないだろうか。しかし、その生産時期は比較的短く、元後半（14世紀中）には今帰仁タイプの生産は停止したと思われる。このタイプに代わって別の製品が出現したのか、或いは窯自体の操業が停止したのか⁽¹⁾、この窯における他の焼造製品の詳細な検討が必要であろう。

ピロースクタイプについては、Ⅰ類・Ⅱ類は今帰仁タイプの出土量が最も増加する13世紀末～14世紀初頭に今帰仁タイプと共に琉球諸島にもたらされ始め、さらに14世紀前半～中頃には、姿を消し始める今帰仁タイプに取って代わってそのピークを迎える。これは金武も既に述べているように、新安沖沈船から両者共に出土していることや、博多遺跡群においてもⅡ類が14世紀前半には出現していることから裏付けられる。以上より生産開始時期は概ね元代初頭～前半（13世紀末～14世紀初頭）と考えて間違いないであろう。ただし、Ⅰ類については、閩清窯でこれに先行すると思われる製品が確認され、この製品が形態的に12世紀後半～13世紀初め頃の白磁（田中分類D類、田中2003、7頁）の系統を引くものと考えられることから、Ⅱ類に先行して南宋末～元初（13世紀後半）位には生産が開始されていた可能性が高い⁽²⁾。この中にはピロースク遺跡等で出土したような内底を輪状釉剥ぎするものも含まれる。この後元後半（14世紀中頃）までに内湾口縁のⅡ類が生産のピークを迎え、同時に外反口縁のⅢ類へと形態を変化させ始める。Ⅲ類は言うまでもなく、琉球諸島においては14世紀後半～15世紀前半にかけて普遍的に出土する製品で、明代前半にかけて大量に生産されたものである。

3. 流通

まず、博多遺跡群における出土状況から、今帰仁タイプ・ピロースクタイプ両生産地の製品が日本へ輸出され始める宋代に遡って、その流れを追ってみる。

11世紀後半～12世紀前半、博多では膨大な量の福建産白磁（田中分類A・C類他、田中2003、3～5頁）が出土する。そのほとんどが閩清窯の製品ではあるが、浦口窯や南平茶洋窯においても極めて類似した製品が焼かれており、これらもまた含まれていると思われる。続く12世紀中～後半には、内底を輪状に釉剥ぎして重ね焼きをする焼成方法を採用した製品（田中分類F類、田中2003、8頁）が出土するようになる。これもまた閩清窯・浦口窯を含めた閩江中下流域から沿海部にかけて広く生産されたものである。その後12世紀後半～13世紀代にかけては、同安・竜泉窯系の青磁が主流となるが、両窯の製品⁽³⁾も依然として輸入されている。

このような状況に変化がみられるようになるのが13世紀後半になってからである。当時の貿易都市であった博多遺跡群出土の数万点を越える貿易陶磁器の中において、多少の報告漏れがあったことを考慮しても、今帰仁タイプ・ピロースクタイプの出土量は琉球諸島でのそれにとり及ぶものでない。11世紀後半から博多に大量に輸入されていた、しかも引き続き操業は続けている閩清・浦口両窯の製品が、13世紀後半を境に博多にはほぼ入って来ないという現象をどのように理解すればいいのか。例えば、この時期出土する白磁の主流は「口禿」（中国では“芒口”と表現）と呼んでいる、伏焼焼成のために口縁の釉を搔き取ったものである（田中分類H・I類 田中2003、9～10頁）が、竜泉窯系青磁と共に日本国内に広く流通した製品である（田中2008、119～120頁）。これらは福建省閩北沿海部、或いは閩南沿海部の製品と考えられるものもあり、決して福建産白磁が別の生産地の製品にとって代われ、輸入されなくなったというわけではない。また、「口禿」白磁が上物であるかと言えば、今帰仁タイプと同様大量生産によるどちらかと言えば下手の部類に入るもので、品質的に今帰仁・ピロースクタイプとそれ程変わる物ではない。さらに、第3章第2節3でも述べたように、円盤状高台を持つピロースクタイプの生産地である南平茶洋窯で、同時期に生産されていた天目碗はかな

りの量が輸入されている。つまり、同時期に輸入された製品と同じ生産地域の中にあっても、両製品は需要がなかったがために、日本（博多）向け輸出品目からふるい落とされたと考えるのが妥当であるのか。しかし、そうすると問題になるのが、博多向けの交易船である新安沖沈船から出土したビロースタイルⅠ・Ⅱ類である（文化財庁・国立海洋遺物展示館2006、31・32・88頁）。これを乗組員の携行品と捉えるのか、或いは単純に、商品として運ばれてはきたが、需要のない商品であったがために博多など日本国内には残らず、必要とされた琉球へもたらされたと捉えるのか、現段階において言及することは困難である。

このことと関連して、奄美諸島における出土状況は何らかの示唆を与えてくれる。宮城・新里も指摘したように、琉球諸島（沖縄・先島諸島）と奄美諸島ではその内容に明らかな相違が見て取れる。奄美諸島では今帰仁タイプは見られず、ビロースタイルについてはⅠ・Ⅱ類は出土しているものの極少量であり、Ⅲ類の段階になってその数を増している。しかし、これも沖縄諸島での出土量とは比較にならない少なさで、どちらかと言えば博多遺跡群での状況と似ている。第3章第3節2の冒頭でも述べたように、当時の貿易港であった博多に荷揚げされた交易品は、その後さらに各地へと運ばれる。琉球列島も例外ではない⁽⁴⁾。九州と琉球列島とを結ぶ担い手については、木下や鈴木等が指摘するようにさまざまな考え方があがる⁽⁵⁾、いずれにしても、琉球列島で出土する貿易陶磁器は、九州と琉球列島を取り巻く流通圏の中でもたらされたというのが一般的である。実際、琉球列島での貿易陶磁の出土状況を見ると、13世紀後半に今帰仁タイプ・ビロースタイルが出現するまでは、数量等の違いこそあれ、その内容は荷揚げ港であった博多や権力の集中していた鎌倉・京都等一部の都市部周辺地域の状況と変わるものではない。さらに、13世紀後半以降朝貢貿易が開始されるまでの貿易陶磁器の出土状況についても、今帰仁・ビロースタイルを除けば、日本本土での内容と大差がない⁽⁶⁾。つまり琉球列島は、朝貢貿易が開始されるまでも依然として、日本国内の他地域と同じように博多を中心とした大きな国内流通圏の中に取り込まれていたと考える。

この流通圏の中にあって、この二種製品のみが博多から沖縄諸島の間には全くといっていい程持ち込まれていないのは、単に需要の問題として捉えるよりむしろ、今帰仁タイプ・ビロースタイルⅠ・Ⅱ類が、博多から琉球に至る流通ルートの中に最初から含まれていなかったと考えるほうが妥当ではないだろうか。ビロースタイルⅢ類については、沖縄諸島において14世紀後半～15世紀前半に急増することや、遠くは十三湊遺跡を始めとした日本本土各地へ分布を拡大している状況は⁽⁷⁾、まさに明との朝貢貿易による結果と捉えることができ、奄美諸島出土のⅢ類も琉球から北上して本土にいたる流通の過程によるものであろう。すなわち、13世紀後半を境に、それまで形成されていた九州と琉球列島を繋ぐ大きな国内流通圏とは別に、沖縄諸島から先島諸島にかけて、琉球諸島を巡る流通圏が形成され、今帰仁タイプ・ビロースタイルは、この中で消費された製品と考える。これについては、陶磁器のみならず他の考古資料等を含めて比較・検討をする必要がある⁽⁸⁾。

最後に、今帰仁タイプ・ビロースタイルⅠ・Ⅱ類がどのようにこの流通圏の中に運ばれて来たのかを考えてみたい。これに関して、先島諸島と沖縄諸島における出土状況の相違は重要と考える。先島諸島のほうが相対的に今帰仁タイプやビロースタイルⅠ類の出土量が多い。中でも今帰仁タイプについては内底を輪状釉剥ぎするものが多く、ビロースタイルⅠ類にも沖縄諸島では類例のない内底を輪状釉剥ぎするものがある。さらに、非常に不確定ではあるが、宮古島住屋遺跡出土品が閩清窯で確認されたビロースタイルⅠ類に先行するタイプにも類似している⁽⁹⁾。前述したそれぞれの形態変化と年代的な位置付けを前提にすると、先島諸島出土資料には年代的に古いものが多い傾向が伺われる。逆に、ビロースタイルⅢ類の出土量について見ると、沖縄諸島での突出した状況を見て取

れ、宮古・八重山諸島では相対的に少ない。これは朝貢貿易により沖縄諸島に持ち込まれたものが、周辺地域へと広がっていった状況を示すものである。このように相反する状況を考えてみると、今帰仁タイプ・ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は、福建から八重山・宮古諸島、さらに沖縄諸島へと北上する交易ルート⁽⁴⁰⁾によって運ばれてきた可能性は十分考えられる。しかし、これがとりもなおさず当時の琉球と中国との直接交易に繋がるとは言い難い。なぜならこのルートの最終目的地はあくまでも「博多」であり、両製品はその経路の途中で琉球諸島に受容されたものなのか、或いは最終目的地はこの地であったのかは、多方面からの立証を必要とするからである。

注

- (1) 沖縄では、14世紀中頃、ビロースクタイプⅢ類と共に、莆田庄辺窯（第3章第2節2の図4参照）と思われる製品が出現するようになる。これは、今帰仁タイプと同様内底を輪状釉剥ぎ、或いは露胎にして、重ね焼きにより焼成された製品である。このことから、浦口窯の製品はこの頃には操業を停止し、代わって庄辺窯の製品が琉球へ輸出されるようになった可能性も十分考えられる。
- (2) 白磁Ⅰ類は大きく外に開く碗で、内面の劃花文や印花文を特徴とする。宋代景德鎮窯青白磁の影響を受けたものとする。また、ビロースクタイプⅡ類にも、高台の作り等形態的に景德鎮窯枢府白磁の影響が窺われることから、Ⅰ類の出現時期を13世紀後半頃に想定することは可能と考える。
- (3) この時期博多遺跡群で出土する両窯の製品は上記白磁Ⅰ類や、第3章第3節2で紹介した浦口窯の同安・竜泉窯系青磁の影響を受けたと思われる碗や小形の皿等（田中分類Ⅰ類-浅形、田中2003、9頁）もある。
- (4) 亀井は博多に荷揚げされた貿易陶磁器の国内流通について、「この貿易陶磁器が、わが国内に販路を求めて、博多から強い力で押し出され、それを求める側との条件が合致した時、たとえその地が今日の眼から見れば山間僻地であろうと絶海の孤島であろうと、汎日本的に波及し、陶磁器は受容されている」として、琉球列島に受容された陶磁器については、「九州本土と南西諸島を直接ないし中継して結ぶ交易船が往来する形態」によりもたらされたと指摘する（亀井1993、28～30頁）。
- (5) 木下は当時の日本と琉球との交易を「貝交易」という視点で捉えており、大和において需要の高い貝を求めて、選択された陶磁器、滑石製石鍋、鉄製品を携えた大和商人が琉球列島に積極的に進出したとする（木下2003、117～144頁）。また、九州産石鍋の分布に着目した鈴木は、琉球列島への流通の担い手を国内商人でなく宋商人と推測している（鈴木2007、96～108頁）。
- (6) 最近の琉球列島における発掘調査成果にはめざましいものがあり、出土した貿易陶磁器の内容もかなり詳細に分かってきている。以前感じられていた年代観のずれも博多におけるそれとほとんど差がなくなっており（金武1998・瀬戸他2007）、博多に貿易陶磁が大量に輸入され始める時期から、琉球列島にも同様にこれらがもちこまれていることがわかる。さらに、筆者は13世紀中頃～14世紀後半の琉球列島と博多遺跡群、及び周辺地域出土陶磁器について比較検討を試みたが、出土量を除けば、顕著な相違を見出すことができなかった。当然、博多で出土しており、琉球列島で出土していない種類はあるが、これは琉球列島に限ったことではない。その時代の主流となっている陶磁器については、種類や形態等、博多周辺地域出土品とも大きな違いはない。
- (7) 他に、熊本県玉名市永徳寺（亀井1981、6頁）等九州各地はもとより、瀬戸内海沿岸の尾道遺跡・草戸千軒町遺跡（森田1982、50頁）や、北東日本海沿岸地域では新潟県堀越館跡・至徳寺遺跡の15世紀前半代の遺構から出土している（水澤2004、200～202頁）。
- (8) その一例として、徳之島で焼かれたカムイヤキの分布が挙げられる。カムイヤキの13世紀後半以降の分布域が、この琉球諸島を取り巻く流通圏に重なっている状況（新里2003、398～400頁）は興味ある現象である。
- (9) 金武は、この資料について形態的にビロースクタイプに通じるところもあるが、今回対象の今帰仁タイプ、ビ

ロースタイプいずれとも判断しかねる資料とする（第3章第3節1）。

- (10) 当時の中国と日本との交易ルートについては、奄美大島倉木崎海底遺跡の発見（宇検村教委1999）によって、唐代以降の主要ルートであった明州（寧波）—博多の他に、宋代には琉球弧を北上するルートが存在した可能性も指摘されている。金沢は、海流や季節風の条件と琉球列島での貿易陶磁器の出土状況等から、当時の交易航路について論じている（金沢2002）。その中で、福建を出発し、途中琉球列島で小規模な交易を行いながら、最終目的地博多を目指して北上するルートを想定する。また、榎本も朝貢貿易開始直前には、14世紀初頭に始まった明州一帯での内乱等が航路に影響し、これまでサブルートであった福建—琉球—博多ルートがメインとして躍り出て、その後琉球と明との朝貢貿易のルートとして使用されるようになったとする（榎本2008、80～81頁）。

文献

- 宇検村教育委員会 1999 『鹿児島県大島郡宇検村 倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財報告書第2集
- 榎本 渉 2008 「日宋・日元貿易」『中世都市・博多を掘る』pp. 80～81、海鳥社
- 金沢 陽 2002 「アジアの海—沈没船が語る中世交流史—」第37回歴博フォーラム資料、国立歴史民俗博物館
- 亀井 明德 1981 「14・15世紀の貿易陶磁—とくに日本出土の中国陶磁—」『貿易陶磁研究』No. 1、p. 6、日本貿易陶磁研究会
- 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号、pp. 28～30、上智大学
- 木下 尚子 2003 「貝交易と国家形成—9世紀から13世紀を対象に—」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書、pp. 117～144、熊本大学
- 金武 正紀 1998 「陶磁器輸入の流れ」『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会
- 鈴木 康之 2007 「滑石製石鍋のたどった道」『東アジアの古代文化』130号、pp. 96～108、大和書房
- 新里 亮人 2003 「徳之島カムイヤキ古窯産製品の流通とその特質」『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室創設30周年記念論文集、pp. 398～400、龍田考古会
- 瀬戸 哲也・仁王 浩司・玉城 靖・宮城 弘樹・安座間 充・松原 哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心に—」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～補遺編』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 田中 克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁—（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号、博多研究会
- 2008 「Ⅲ 陶磁の海道—貿易陶磁器の推移」『中世都市・博多を掘る』、pp. 119～120、海鳥社
- 文化財庁・国立海洋遺物展示館2006 『新安船 The SHINAN Wreck Ⅲ』、pp. 31・32・88、国立海洋遺物展示館、韓国
- 水澤 幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』No.24、pp. 200～202、日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1993 「14～16世紀の白磁分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、p. 50、日本貿易陶磁研究会

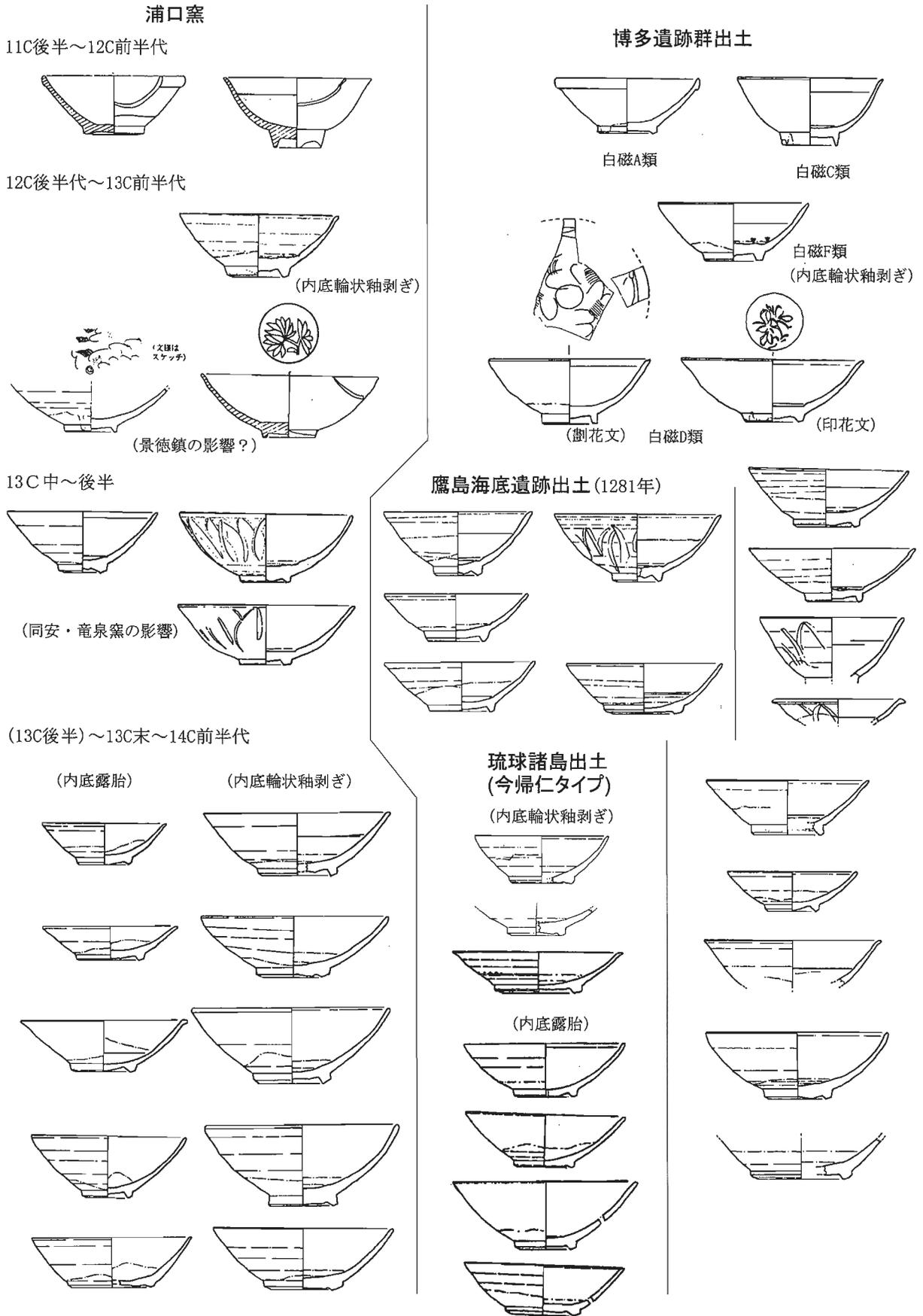


図1 浦口窯における磁器生産とその消費状況 (縮尺約1/6)

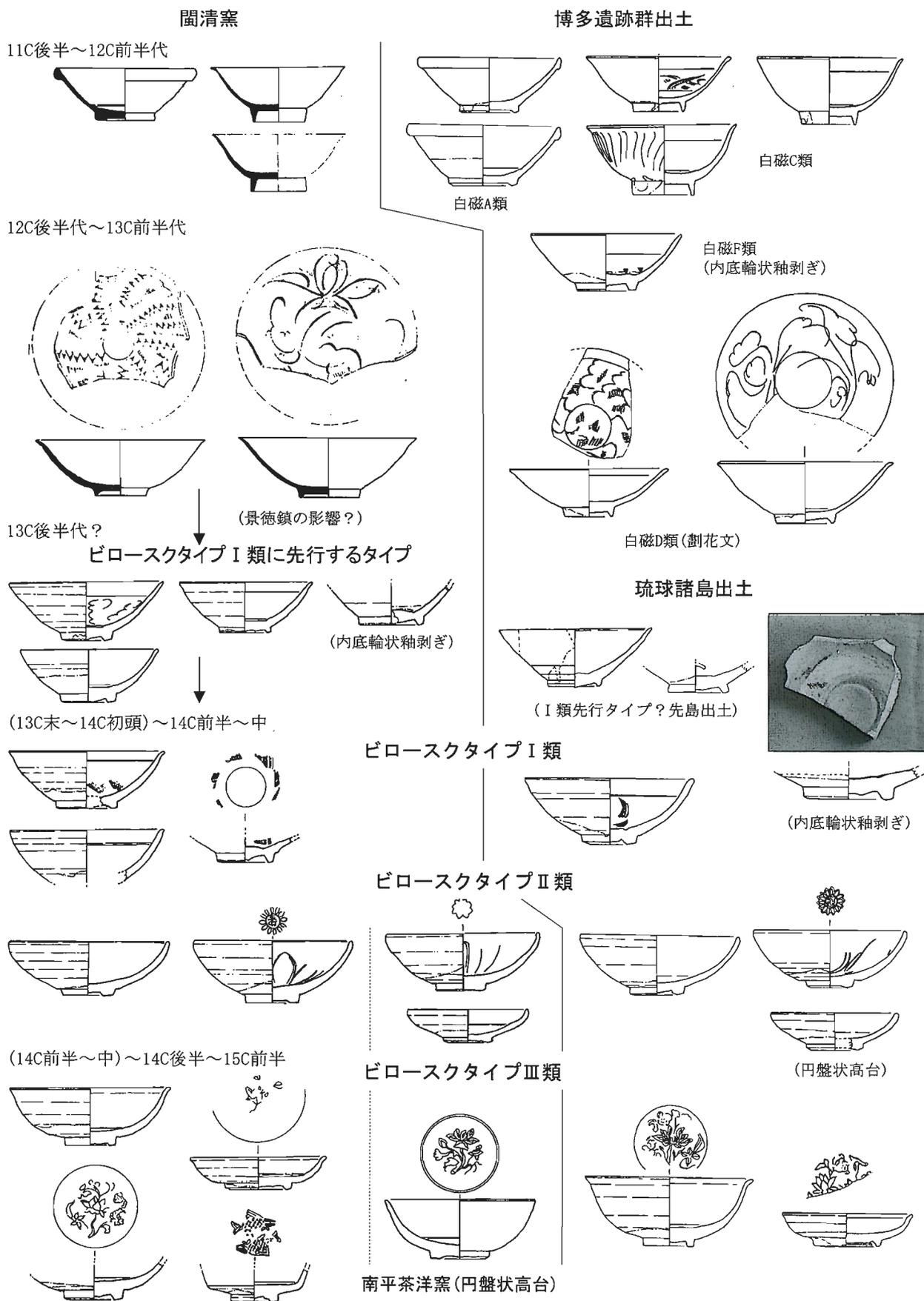


図2 閩清窯・南平茶洋窯における白磁生産とその消費状況 (縮尺約1/6)